カラクリ荘の異人たち4

～春来るあやかし～

霜島ケイ
KEI SHIMOJIMA

イラスト
ミギー



GA文庫

カラクリ荘の異人たち4

～春来るあやかし～

霜島ケイ

GA文庫


ペンキで塗られた木の柵に囲われた庭から
歌は聞こえていた――。


「何するんだい」!!


「――失礼だね、この付喪は！」


「阿川君の笑った顔って、見たことあります？」

カラクリ荘の異人たち4
～春来るあやかし～

霜島ケイ

GA文庫

カバー・口絵　本文イラスト

ミギー

目次

一章　東風（こち）……5
二章　菜の花いろの灯（ひ）をともし……136
三章　春来（きた）るあやかし……218

一章　東風

1

「――阿川」

昼休み。弁当を食べ終わるともうやることがなくて、太一はその時、教室の窓からボンヤリと校庭を眺めていた。

いつも休み時間になると話しかけてくる和泉采奈は、今日は文芸部の用事があるとかでいなかった。そうなると太一には他に話をする相手もいないわけで、一人でいることには慣れていても、手持ち無沙汰であることにかわりはない。

（春は名のみの、だっけ？　……ていうか、二月が春っていうのは絶対、無理があると思う）

朝からどんよりと曇っているせいもあって、生徒の姿もまばらな校庭の風景はいかにも寒々としていた。二月も半ばを過ぎて、暦の上では春でも、目に入る彩りにはその兆しもない。灰色に立ち枯れたような樹々と、常緑樹の硬質な緑。校庭の片隅に植わっている椿の紅色だ

けが、燃えるように鮮やかだ。

采奈以外の誰かが声をかけてくるなんて思わなかったので、突然後ろから名前を呼ばれて、太一は驚いた。

振り返ると、クラスの男子生徒が目の前に立っていた。

（えっと……高坂……）

高坂日之人。太一にしては珍しくフルネームで覚えていたのは、ヒノトという名前がずいぶん変わっていると思ったからだ。

高坂はクラスでも目立つ部類の生徒だった。背が高い。成績が良くて、運動も出来る。サッカー部だかバスケ部だかで、まだ一年なのにレギュラーで活躍していてスゴイんだよと、采奈が以前に言っていたことがある。

とはいえ、太一が知っているのはそれで全部だ。同じクラスでもほとんど言葉を交わしたことのない生徒はけっこういて、高坂もその一人だったのだ。

だから、いきなり話しかけられたことに戸惑った。何の用だろうと首を傾げていると、高坂はちょっとためらったように黙り込んでから、言った。

「幽霊って、見たことあるか？」

太一はぽかんとした。

「幽霊って、死んでからなる幽霊のこと？」

思わず訊き返すと、高坂は奇妙な顔をした。
「普通はそうじゃないのか？」
なんだか逃げ出したくなった。出だしでもう会話にしくじった気がする。
他人と話をするのは苦手だ。特に学校では。相手を怒らせるか白けさせるかなのが、わかっているから。その原因が、他人の感情をちゃんと理解できない自分にあることも。
下宿先の空栗荘ではたいして気兼ねせずに住人たちとしゃべれるし、最近は実家でも気まずい思いはあまりしないですむようになった。でも学校という場所での同年代の連中はダメだ。中学では「つまらない」とか「暗い」とか言われて、露骨にクラスメートから敬遠された。その記憶があって、高校生になって一年近くになるのに未だにクラスに馴染めない。
（なんで話しかけてきたんだろう）
しかも、どうして話題が幽霊？
ため息を呑み込んで、太一はうなずいた。
「見たことあるけど」
「どんなの」
「うちのばあちゃんとか、落ち武者とか」
去年のお盆の時にも、どっさり見たなと思う。何しろ死霊の盆踊り状態だったから。
高坂はニコリともせずに、太一をしげしげと見つめた。

「いつも見えるのか？」
「……いつもじゃないけど」
たまたまだ。祖母はむこうから太一に会いに来てくれたのだし、落ち武者は隣の部屋にいるタカハシさんの友人である。
太一は腕を組むと、窓ガラスに背中を押しつけた。知らず知らずに腰が引けてそういう格好になったのだが、これが傍目には無表情に「かったるそう」に窓にもたれかかっているみたいに見えている——ということに、本人は気づいていない。
高坂はちょっと顔をしかめた。会話がつづかなくて、言葉を探すのに困っているんだな、と太一は思う。
だけど、他になんて返事をすればいいんだろう。
「阿川は」
言いにくそうにいったん言葉を切ってから、高坂はボソボソと言った。
「霊感とか、あるタイプ？」
「ないよ」
霊感とか霊能力があるというのは、十遠見やミヨシみたいな人間のことだと思うから、太一は即座に首を振った。
そうか、と高坂はうなずいた。

「ヘンなことを聞いて、悪かったな。怒らないでくれ」
「……べつに」
怒ってなんかいないのに、どうして謝られるのかわからない。
高坂はまた少し考え込むようにしてから、
「阿川は、空栗荘に住んでいるんだろう？」
「え……」
太一は目を瞬かせた。
「夏休みが終わってから、名簿の住所変更をしただろ。その時から気になっていた。俺も、中学の二年までは賽河原町に住んでいたから」
「へえ。……そうなんだ」
あの町の住人はクラスでは自分と和泉栄奈の二人だけだと思っていたから、たとえ過去形でも賽河原町に住んでいた人間が他にもいるというのは、少々意外な気がした。
「同居していた祖父が死んで、引っ越した。――その祖父がよく言っていたんだ。何かおかしなことや困ったことがあったら、空栗荘に相談に行けと。それで、阿川が空栗荘に住むようになったのも、そのへんのことと関係があるのかと思った」
身のまわりで不思議なことが起こったら空栗荘の主人に相談するというのは、賽河原町に住んでいる人たちの決まりごとみたいなものらしい、とは太一も聞いたことがある。

とはいえ、それと太一が空栗荘に住むことになった事情は、無関係だ。

「相談を受けるのは大家さんだし、俺は下宿してるだけだから。……父親があそこの大家さんと友達なんだ。その関係で」

「だけど――」

さらに何か言いかけて、高坂は思いなおしたようにうなずいた。そうか、とまた呟く。

「それならいいんだ。すまん」

小さくため息をつくように言うと、踵を返して離れていった。教室から出ていく彼を見送って、太一は首を傾げた。

（何だったんだろう、一体）

結局、高坂が何を言いたかったのか、そもそもなぜいきなり太一に話しかけてきたのかは、わからずじまいだ。

（幽霊がどうかしたのかな）

もしかすると幽霊がらみのトラブルとか、お祓いがしたいとか霊能者に相談したいとか、そういう話だったのだろうか。

訊き返せばよかった。そんなことに、今になって気がつく。だからといって、わざわざ追いかけていって質問する気にはなれなかった。

いつもこうだ。――太一は思う。

会話というのは流れがあって、相手が待っている言葉があって、互いにそういう言葉を遣り取りしながら成り立っていくのだと思う。なのに太一がちゃんと反応しないものだから、きっと高坂は話をつづけられなくなって、途中で諦めてしまったのだろう。

悪かったかなと思う反面、わずらわしい気もする。どうせ上手く会話にならないのなら、話しかけられないほうが気が楽だった。

ふと見回すと、教室に残って雑談していた生徒たちが、好奇心に満ちた目でチラチラとこちらを見ていた。彼が采奈以外の者としゃべっているのが、珍しかったに違いない。

太一は組んでいた腕を解くと、また窓に向かった。すぐに興味を失ったらしい生徒たちの、話し声や笑い声が意味不明の雑音となって、背中に広がっていく。

（……高坂って、ああいうしゃべり方をするヤツなのかな）

冷たいガラスごしに外を眺めながら、太一はそんなことを思った。

まるで言葉を選んでぽつぽつと噛みしめるような話し方だった。低い声は淡々としていて、あまり感情の起伏を感じさせない。

成績優秀でスポーツマンというと、それだけで派手で快活なイメージがあるから、ちょっと意外だ。

（普段、どんな感じだっけ）

目立つ存在だから、友人は多いのだろう。高坂の周囲には、いつもクラスメートや部活の仲

間が集まっている。今日のように一人でいることは、ほとんどない。
だけどそういえば、高坂が仲間と大声で騒いでいるところは、見たことがないように思う。
（実は案外、無口だとか？）
これまでほとんど関心を払ったことのない相手なので、それくらいしか思いつかなかった。
授業開始五分前のチャイムが鳴って、クラスメートたちがどやどやと戻ってきた。教室に駆け込んできた栄奈が、太一を見てぱっと笑顔になる。そのついでに何かにつまずいたのか、自分の席の前で派手に転んで、友達に助け起こされていた。
（和泉って、どうしてしょっちゅうコケてるんだろう……？）
首を傾げながら、太一は空いたままの高坂の席に目をやる。
高坂日之人はそのまま、授業が始まっても教室には戻ってこなかった。

「――阿川君！」
振り返ると、栄奈が後ろから転がるように駆け寄ってきた。
帰宅途中の駅の改札口だ。
全力疾走でもしてきたのか、太一の前で息を切らせてゼイゼイしながら、
「い、いまっ、かえ、りっ？　……ぐ、偶然、だね。私もっ、ちょうど、帰るとこなのっ……カーコたちと……ケーキ、食べててっ遅くなって……っ」

仲のいい友達数人と寄り道していたのは本当だが、偶然というのはバレバレの嘘である。喫茶店でみんなとおしゃべりしていたら、駅に向かう太一の姿が窓から見えた。それで慌てて、「ごめん、また明日！」と店を飛び出してきたのだ。

ちなみにそのあと友人たちが、「栄奈も頑張るよね……」「うん」「問題は、阿川がぜんっぜんわかってないっぽいことなんだけどね」「うんうん」などとため息をついていたことまでは、栄奈は知らない。

まあ詳細はともかく、栄奈が自分を見つけて走って追いかけてきてくれたことくらいは、太一も最近はわかるようになっていた。

「転ばなかった？」

「う、うん」

栄奈はカバンを胸に抱きしめた格好で、こくこくとうなずく。階段を上がってホームに出る頃には、ようやく息をつけるようになったらしく、太一を見上げて大きな目を丸くした。

「でも、どしたの？　阿川君、いつもは学校が終わるとすぐに帰っちゃうのに」

部活もやっていないし、誰かとつきあいで遊びに行くこともないから、太一は授業を終えるといつも真っ直ぐに空栗荘に帰る。放課後も友達づきあいで忙しい栄奈とは、帰り道が一緒になることはほとんどない。

「ちょっと、本屋とか雑貨屋とか寄ってて」

「買い物？」
「うん。……見てただけ」
太一は言葉を濁した。なんで道草を食ってまで、普段は縁のない雑貨屋などのぞいていたかは、栄奈にはとても言えない。
電車に乗ってからも、二人してドアの横に立ったまま、太一は栄奈の他愛ないおしゃべりに耳を傾けていたが、
「あ、そうだ！」
急に栄奈がにゅっと顔を近づけたので、目を瞬かせた。
「ミカが言ってたよ。今日、お昼休みに阿川君が高坂君と話をしてたって」
「あ、うん」
「すごい！　いつの間に高坂君と友達になったの？」
「べつに、そんなんじゃ……。あいつが話しかけてきただけだから」
「え、なんて？」
「幽霊がどうとかって」
「ゆ、幽霊～～？」
栄奈はまた目を丸くした。
「どういう意味？」

「さあ。……すぐに教室を出て行っちゃったし」
そういえば、と采奈は首を傾げた。
「高坂君、今日の午後は早退だったね。部活も休んで、具合が悪かったのかなあ」
結局、高坂が教室に戻ってきたのは、五限目の授業が終わったあとだった。そのままカバンを持って、そばにいた生徒に「早引けする」と言って、帰ってしまったのだ。
車内に次の駅名を告げるアナウンスが流れた。
「阿川君、今度そっちのドアが開くよ。——どうしたの？」
ぼんやりしていた太一は、慌てて首を振った。
「あのさ」
「うん？」
ちょっと迷ってから、訊いた。
「高坂って、どんなヤツ？」

「えっとね、高坂君は……あ、女子に人気あるよ。他の男子みたいにバカ騒ぎしないし、へらへらしてないし、無愛想だけどそこが大人っぽくてイイんだって」
電車を降りると、空はもう暮れ始めていた。淡いすみれ色の黄昏に、街の明かりが灯っている。

二月の夕暮れは寒くて、少し心細い。賽河原町行きのバスを待つ間、二人はそばの自販機でホットの缶コーヒーを買ってベンチに腰を下ろした。

「やっぱり、高坂ってあまりしゃべらないんだ……」

「うーん、しゃべらないってわけじゃないんだけど。高坂ファンの子たちに言わせると、寡黙っていうか落ち着いてるっていうか、クールっていうか、そんな感じ」

采奈は缶を両手で包み込むようにしながら、白い息を吐いて言う。

「見た目もわりとカッコイイし、部活でレギュラーなのもポイント高いんじゃないかな。なんか、今年のバレンタインデーなんてすごかったらしいよ。高坂君、うちだけじゃなくて他のクラスの女子からもいっぱい、チョコをもらったって――」

そこまで言って、采奈は急にハッとしたように「わわわっ」と素っ頓狂な声をあげた。

「え、ええと、チョコはどうでもよくってっ。……そ、それよりどうしたの？　阿川君がクラスの子に興味をもつなんて、珍しいよね。あ、もしかして昼休みになんかあった？　高坂君にヘンなことを言われたとか」

采奈が心配そうな顔をしたので、太一は急いで首を振った。

「いや。だから、幽霊とか霊感の話」

「ううう、それは違う意味で『ヘンなこと』っていうかー」

高坂君てオカルト好きなのかなぁ、と采奈は首をすくめた。

「……高坂って、そんなイヤな感じしなかったし」
「うん。男子にも好かれてるっぽいよね」
太一と違って、基本的にはちゃんと他人とつきあえる人間だから、口数が少なくても周囲に人が寄ってくるのだろう。
太一は缶コーヒーをゆっくりと飲んだ。熱くて苦い。
（どうして俺、高坂のことを気にしてるんだろう）
采奈に言われるまでもなく、自分でも不思議だった。
クラスメートの一人が、たまたま声をかけてきただけのことだ。そいつがどんなヤツかなんて、関係ない。少なくとも以前の太一なら、「どうでもいい」の一言で片付けていたはずだった。
なのに――なぜ、今はこんなふうに気にかかるのだろう。
興味だとか好奇心とは、少し違う。
昼休みからずっと、なんだか悪いことをしたみたいに、重ったるくて嫌な気分がつづいているのだ。
（やっぱり、ちゃんと訊き返せばよかった）
話をするならまわりにいる誰でもいいのに、高坂がわざわざ太一に話しかけてきたのは、相手が太一でなければいけない話だったから、ではないのか。

多分、そうだ。

（何が言いたかったんだろう）

そのあと高坂が授業に戻ってこなかったことも関係があるのかな、と思ってから、太一はコーヒーの缶を握りしめた。

（だから……そんなの、気にする必要なんてないんじゃないかな。だいたい俺、何を言われても、きっとわからなかったし……）

「でも高坂君、昔はあんな感じじゃなかったなー。明るくて、いつも冗談ばっか言って他の人を笑わせてて、廊下や教室でも騒いでよく先生に怒られてたよ」

栄奈が漏らした言葉に、太一は「え？」と目を瞠った。

「あ、私、高坂君と同じ中学だったから。クラスは違ったけど」

そう言えば、と太一は思う。

「中学の二年まで、賽河原町に住んでたって高坂が言ってた」

「うん、そう。それに、引っ越したって言ってもそんなに遠くじゃないから、転校もしなかったしね。――だから、ほんというと高校で高坂君と同じクラスになった時に、ビックリしちゃった。だって、まるきり別人なんだもん」

（明るくて、冗談ばかり言って、騒いで先生に怒られている……？）

そういう高坂のほうが、太一には想像できない。

「高校に入ってから、性格が変わったってこと？」
「うーん、やっぱりそうなのかなあ。高坂君、今は冗談なんか全然言わないもんね」
しかめっ面で考え込んで、栄奈は何度も首を捻っている。
よくしゃべるヤツがいきなり無口な性格になったり、明るいヤツが笑わなくなったり、というのは……。
（まあ、あるよな。そういうこと）
人が壊れるのは、簡単なことだから。
「あ、バス来たよ、阿川君！」
二人は急いでコーヒーの残りを飲み干して、ベンチから立ち上がった。
バスが賽河原町の交差点にさしかかった時だった。傍らで吊革に摑まっていた栄奈が、あっと声をあげた。
「阿川君、あれ」
彼女が指さしたほうを見て、太一も「あ……」と呟く。
バスが走り抜ける一瞬、角の信号の横に佇む人影に気づいた。
見慣れた制服。学生服の上にコートを羽織って、カバンを脇に抱えている。背が高いから、すぐにわかる。

ついさっきまで話題にしていたクラスメート。

「高坂……？」

「うん、高坂君だった」

もう夜の色に近い黄昏の中、家路を急ぐ人たちに混じって、高坂だけがそこに立ち尽くすようにして、じっと車道を見つめていた。——その姿が、あっという間に後方へ、視界から消え去った。

「何をしてたのかな……」

制服にカバンを持っているということは、学校を出てそのまま、家には帰っていないということだ。

（でも、早退したのに？）

こんな時間に、どうして高坂があんな場所にいるのだろう。まさか、何時間もあそこにずっと立っていたなんてことは——。

「あのね、阿川君」

隣で考え込んでいた栄奈が、太一を見上げた。

「あの……私、思い出したんだけど……もしかしたら高坂君と関係あるのかなって、ちょっと思ったんだけど」

「え、なに？」



周囲の乗客をはばかってか、栄奈の声は小さくて、聞き取りづらい。おまけに、言いにくそうにもじもじしている。思わず太一は、内緒話みたいに耳を寄せた。

「去年ね、同じ中学の子があの交差点で、車にはねられて死んじゃったの」

囁く声がくすぐったかったが、そんなことは気にしていられなかった。

「えっ？」

「高坂君と同じクラスの女子で、相田環って子。えっと、うちの高校の入試が終わったあとだったから、……ちょうど去年の今頃」

「あの交差点で？」

うん、と栄奈はうなずいた。

「あそこって、昔からやたら事故が多い場所なんだって。私なんて子供の頃は、あの交差点には行っちゃいけないって、おばあちゃんに言われてたんだよ。ヘンな噂もいっぱいあって、夜中に車で通りすぎた人が幽霊を見たとか、道路を渡ろうとしたら誰もいないのにすぐ後ろで話し声がしたとか」

（……幽霊？）

あれっと思った。

太一はとっさに、バスの後方を振り返る。もちろん、交差点ははるか彼方で、見えるわけもない。

――阿川。

――幽霊って、見たことあるか？

それでね、と栄奈はまたもごもごと言った。人が死んだ話を、それこそ噂話みたいに話題にすることが、気が咎めるのだろう。

「高坂君、その相田さんとつきあってたんだって」

2

空栗荘は、人間の住む「こちら側」と妖怪たちの住む「あちら側」の境目にある、下宿屋兼旅館だ。

この世には、そんなふうに人と異形の世界が繋がってしまった場所が、幾つもあるのだという。空栗荘の大家である時国柊二郎は、「境界守」――あっちとこっちがうっかり交わらないように、境界を見張る管理人でもあるそうだ。

……といってもそれが具体的にどんなことをする仕事なのか、太一には未だによくわからない。彼の知るかぎり、大家はたいていいつもグータラと寝てばかりいるからだ。

ともかく。

玄関の戸を開ければ目の前が妖怪の町、というおかしな場所に建っている空栗荘であるから、

そこに住んでいる住人たちも、やはりちょっと変わっていた。

5963（ごくろうさん）号室のミヨシと、2400（自信満々）号室の十遠見順は、霊能力者だ。ミヨシはフリーだが、十遠見は国家認定資格を持つ公務員。

1107（いいオンナ）号室の井原古都子は、妖怪の町の工房に通う木彫り職人である。

8783（花屋さん）号室の風田レンはその番号のとおり、花屋で働いていて、植物と会話ができる。

太一の隣の部屋にいる174（人でなし）号室のタカハシさんは、部屋から出て来ないのでずっと正体不明だったが、なんと昔からこの土地の安全を守ってきた神様だということが少し前に判明した。人でなし、というのは性格のことではなく、文字通り「人間ではない」という意味だが、神様に趣味でそんな部屋番号をつける大家さんて、ある意味すごいと思う。

太一の部屋番号は0114（お人好し）。自分がお人好しだと太一自身は思ったことがないので、この番号は謎だ。というか、柊二郎が好き勝手に決めたそれぞれの住人の部屋番号に、果たして意味があるかどうかという点で、とっくに謎であったが。

それから、空栗荘の家事の一切を切り盛りしているお露さん。何十年も前からおばあさんだったんじゃないかと思うような、年齢不詳のおばあさんである。

太一がこのおかしな下宿屋で暮らし始めたのは、去年の夏。風変わりな住人たちに囲まれて、妖怪たちにも顔馴染みができて、彼らの起こす騒動や不思議な出来事も、もうすっかり日常に

なってしまった。

——そうして今、冬が終わろうとしていた。

「おや、お帰り。今日はずいぶん遅かったね」

空栗荘に着いた時には、あたりはすっかり暗くなっていた。もうじき夕食の時間だ。

そんな一番忙しいはずの時間帯なのに、お露さんは玄関の外で何やらごそごそやっていた。

手に御札のようなものを持っている。

ただいま、と挨拶した太一をじろりと見て、

「珍しいね。学校に居残りかい？　宿題を忘れて廊下に立たされていたとか」

小学生じゃあるまいし、というか今時は小学生だってそんなことはしないと思う。

「いえ、寄り道してました」

「おやおや、誰かと遊んでいたのかい」

多分お露さんの頭の中にある「遊び」というのは、草野球とか缶蹴りとか、そういうことなんだろうなと思いながら、

「一人で」

太一が答えると、お露さんははぁ、とため息をついた。

「あんたね。たまには友達でもここへ連れて来りゃいいじゃないか」

「え、和泉を？」
「……相変わらず、あの子しか友達がいないのかい、あんたは」
「はあ」
嘆かわしいとばかりに、お露さんはまたため息をつく。
「まあ、いいさ。それより手伝っておくれ。昼間のうちにこれを貼っておくのを、うっかり忘れていてね」
「何ですか、その……御札？」
「風封じの札だよ。さっきから試しているんだが、どうも今ひとつ場所がうまく決まらなくてねえ」
（……風封じ？）
何だろうそれ、と太一が思っていると、お露さんはふんと鼻を鳴らした。
「もうじき、春を告げる風が吹く。冬の陰の気を追い払って、陽の気を目覚めさせる風さ。ところが、これがなかなか難儀なもので」
春の風は一年のうちで一番心が浮き立って、でもその一方で一番やっかいな風だ。お露さんはそう言った。
「春というのは、終わりと始まりのけじめの季節だ。生命が生まれて死者の魂が去って、冬に眠っていたものがいっせいに動き出す。その合図のような風だから、運んでくるのは福も災い

も、いいことも悪いことも、いっしょくたさ。目覚めるのが、いいモノばかりとはかぎらないからね」

　風が運んで来る悪いモノって何かな、と太一は首を傾げる。それを見て、お露さんはニヤリとした。

「たとえば、木の芽時には頭のイカレちまうヤツが多いだろう？　世の中が騒がしくなって、おかしな事件が起こったりね。それに昔は、春になると疫病が流行ったものだ。――まあ、今ならさしずめ花粉症かねぇ。ともかく、そういう禍事が家の中に入ってくるのをふせぐために、この札を貼るんだよ」

「……えっと、つまり、花粉症対策？」

「それは医者に行きな」

　お露さんは、玄関の脇にぺんと札を貼りつけた。が、すぐにはがれて落ちてしまう。

「やれやれ、ここもダメだ。ちゃんと正しい場所に貼らないと効力がないんだよ、これは。おまけにその場所が、毎年違うときている」

　そのあとしばらく、二人であだこうだと試して、ようやく御札は入り口にある『空栗荘』の看板の隅におさまった。

「これでよし。ぜんたい、いつ風が吹いて春が来るかなんて、誰にもわかりゃしないからね。明日かもしれないし、十日先かもしれない。ともかく、今年も間に合ってよかった」

お露さんは割烹着の裾で手を拭いながら、満足げに言った。
「おや、夕食の時間が遅れちまったよ。ほらあんたも、早く着替えて食堂においで」
「はい」
太一はうなずいてから、首もとを通り過ぎた冷たい風に首を縮めた。
今吹いている風は、冬の北風だ。
(春って、風が運んでくるのか)
知らなかった。よく耳にする、春一番というやつだろうか。
そんなことをぼんやり考えながら、太一は足早に自分の部屋へ向かった。

「たーいちっ!」
「うわぁ!」
部屋のドアを開けたとたん、中からアカネが体当たりで飛びついてきた。ぎゅうっとしがみつかれたまま廊下にひっくり返って、太一は「いたた……」と顔をしかめた。
一見すれば幼い人間の女の子だが、アカネは付喪である。正体は玄関に飾ってある市松人形だ。だからたいした重さはないけれど、何しろ勢いがよかった。
「太一、大丈夫? どっか痛いの?」
仰向けに転がった太一の腹の上に、ちょこんと乗ったままで、アカネは心配そうに顔をのぞ

き込んできた。
「……大丈夫だけど、とりあえず俺の上から降りてくれない？　あと、飛びつくのはせめて、部屋に入ってからにして」
「はあい」
ぶつけた肘をさすりながら太一が起き上がると、隣室から「おかえり」と声が聞こえた。
「あ、タカハシさん。ただいま。――騒いですみません」
タカハシさんはうるさいのが嫌いだ。神様を怒らせると罰が当たるかもしれないので、太一は慌ててカバンを拾い上げて、謝った。
「かまわないよ」
渋い中年男性の声で、タカハシさんは寛大に許してくれた。
「太一、太一！　遊んで！」
「だからうるさくしちゃ、ダメだって。それに俺、これから夕食だし。……あ、そうだ」
腕を引っぱるアカネを部屋に押し込んでから、太一は思いついて隣室に声をかけた。
「あの、タカハシさん。俺、今ちょっと困っていることがあるんです。教えてもらいたいことがあるんですけど」
「何かな」
「女の子へのプレゼントって、何がいいんですか？」

これも神頼みというのだろうか。神様なら、もしかするとわかるかなと思ったのだが、

「……」

タカハシさんは沈黙した。

しばらくして、明らかに困った声で、

「すまないが、それは私の専門外だ。縁結び担当に訊いてもらえないか」

「はあ」

カテゴリーエラー。タカハシさんは地域の安全担当である。

「役に立てなくて、申し訳ない」

「いえ、こっちこそ、変なことを訊いてごめんなさい」

神様に恐縮されて、太一は慌てて首を振って、部屋に入った。

(どうしようかな)

カバンを置いて、ため息をつく。

高坂のことも気になるけど、太一には今もっと悩んでいることがあった。

着替えようとして、手にはめていた手袋を見る。

栄奈が彼の誕生日にくれた、手編みの手袋。冬休みが終わってから、太一はそれを学校にして行っている。少し恥ずかしかったけど、やっぱり暖かいし、手袋をはめている彼を見て栄奈がとても嬉しそうな顔をしたからだ。

「太一、どうしたの？」
ぼうっと突っ立ったままの彼の顔を、アカネが不思議そうに見上げた。
「あ、うん。何でもない」
お返しに、采奈の誕生日に何かあげたいと思った。
だけど、何がいいのかちっともわからない。
他人への贈り物なんて、ましてや女の子のプレゼントなんて、今まで買ったことがなかったからだ。
頭からセーターをかぶりながら、太一は「困ったな」と呟く。
采奈の誕生日は二月だ。実を言うと、もう過ぎてしまっていた。
遅れてプレゼントを渡すなんてマヌケなことをするくらいなら、何でもいいから適当に思いついた物を買えばよかったかもしれない。
でも、手袋をもらった時、太一はとても嬉しかったのだ。そのふわふわと浮き立つような気持ちを、同じように采奈に返したかった。
采奈が本当に欲しくて、もらって喜ぶ物をあげたかった。
（だけど、和泉は何が欲しいんだろう）
今日寄り道をして店を回ったのも、女の子が喜びそうな物を探していたからだ。店には可愛らしい物も綺麗な物もいっぱいあった。でも。

（アクセサリーとかは……好みって、あるだろうし。ぬいぐるみとか本……、欲しいかな、そんなの？　あまり高価なものは買えないし……）

趣味で使う物がいいのだろうけど。

（和泉の趣味って、何だろ？）

小説を書いているって言ってたけど、女の子へのプレゼントにまさか原稿用紙を渡すわけにもいかない。

そんなふうに、いつも、いつまでもぐずぐず迷ってしまうのだ。

太一はまた、ため息をついた。

こうなって、ひとつだけわかることがある。

（……俺、和泉のことって、ほとんど知らないんだな）

ちょうど同じ頃、和泉栄奈も自分の部屋でため息をついていた。

（バレンタインのチョコの話なんかしちゃって。……私のバカ）

今日はお母さんが仕事から早く帰ってきたし、台所へ行って晩ご飯の支度を手伝わなければいけないのだけど、落ち込んだ栄奈は制服を着替えたあと、自分の机の前にしょんぼりと座った。

机の隅に、綺麗に包装されてリボンのかかった、小さな箱があった。

バレンタインチョコだ。思い切って奮発して、デパートの有名ブランドのお店で買ってきた。
もちろん、二月十四日に太一に渡すつもりで。
でも結局渡せなくて、その日からチョコはそこに置きっぱなしになっている。
（だって）
もし太一がチョコを受け取ってくれなかったら、受け取っても困った顔をされたら、もう今までみたいに話しかけることなんてできない……そう思ってしまった。そしたら、どうしてもどうしても、これを太一に手渡す勇気が出なかったのだ。
それでなくても、一度は太一に告白して、失敗している。というか、告白したことにすら気づいてもらえなかったというべきか。
「ううう。……阿川君、私のことどう思ってるのかなぁ」
采奈は机の上に突っ伏した。
友達だとは、思ってくれていると思う。
（だけど友達って、すっごく微妙だよね）
友達から始めましょう、とか。いい友達でいようね、とか。なんだかそのへんのレベルみたいな気がする。
そんなことを考えたら、ますます落ち込んだ。
おまけに――。

「あんまりだよ、よりによって、私の誕生日がバレンタインデーだなんて～～っ!?」

そう。因果なことに。

采奈の誕生日は、二月十四日であった。

太一とのことを応援してくれているクラスの友人たちは、「気にすることないんじゃない？」と言ってくれる。でも、采奈としてはやっぱり複雑だ。

（だってチョコをあげたら、誕生日のプレゼントを期待してるみたいなんだもん）

太一に手袋を編んでプレゼントしたのは、お返しが欲しかったからじゃない。その手袋を、太一は学校にしてきてくれた。それだけで、采奈は飛び上がりたいくらい嬉しかったのだ。

だからよけい、誕生日とバレンタインデーが同じ日、というのが恨めしい。

……なんてことを、今さらグダグダ思い悩んでいても、虚しいだけだ。好きな男の子にチョコを渡して想いを告げる、特別な日はもう過ぎてしまった。采奈自身の特別な日と一緒に。

ため息をついてジタバタしていたら、階下の台所からお母さんの声が聞こえた。

「采奈！　もうご飯よ！　早く降りてきなさい！」

「……はぁい」

渋々と立ち上がってから、采奈は机の上の箱を見た。決意を固めてうなずくと、「えいっ」と気合いを入れてリボンを解く。包装紙を破いて、中のチョコを片っ端から口に押し込んだ。

「ふえぇ、甘い」

ものすごく甘くて、涙が滲んだ。

3

驚いたことに、高坂は翌日の昼休みにも太一に声をかけてきた。
「今日の放課後、空いてるか？」
自分の席で、お露さんに作ってもらった弁当を食べていた太一は、前触れもなく目の前に椅子を引き寄せて座った彼を、ぽかんとして見た。
半分噛ったエビフライをご飯の上に戻して、
「空いてるっていうか……帰るだけだけど」
「だったら今日、阿川の家に行ってもいいかな」
女子に言わせれば「大人っぽい」という淡々とした高坂の表情を、太一は少しの間、見つめた。
「空栗荘に？」
「ああ」
クラスの生徒の大半は、まだ教室で弁当を広げていた。高坂の声は普通の大きさだったが、それでもみんなに聞こえたらしく、クラスメートたちもやっぱり「ええ？」というように二人

を見た。
「なんで？」
「相談したいことがある」
そっか、と太一は納得した。
（大家さんに会いたいんだ）
高坂の昨日の言葉や行動がまだ気になっていたから、すぐにわかった。やはり何か、空栗荘の大家に相談したくなるような「おかしなこと」や「困ったこと」があったに違いない。
「いいけど」
うなずくと、高坂もうなずいて立ち上がった。
「じゃあ、帰りに。俺は部室に寄って休部届けを出さないといけないから、校門で落ち合うってことで、いいか？」
「うん」
高坂が教室を出て行ったあと、太一はそそくさと残りの弁当を食べ終えた。お露さんがもたせてくれる弁当は、いつもとても美味しい。なのに、急に味がしなくなったみたいだった。
教室の空気が、少しヘンだ。クラスメートたちが、何となく太一を気にしている。固まってお昼を食べていた数人の女子のグループが、くすくすと笑って、「高坂君と阿川君てさぁ……」などと小声で言っているのが聞こえた。

居心地が悪い。太一は小さく息をつくと、弁当箱をカバンにしまって、席を立った。いつものように窓際へは行かず、教室の外へ出た。

（べつに、放っておいてくれればいいのに）

彼がほんのちょっと誰かと言葉を交わしただけで、なぜみんな、あんなふうに見るのだろう。誰にどう思われようと、かまわない。自分が悪いのだから仕方がないと、太一はずっと思っていた。――でも、なぜだろう。なんだか、胸の中がもやもやする。

教室をあとにして、でもどこに行けばいいのか迷って、結局太一は階段の踊り場に佇んだ。

「あ、いた！　阿川君！」

しばらくして、元気な声とともに栄奈がぱたぱたと走って来た。

「どしたの？　どこ行ったかと思ったよ」

べつに何でもないと、太一は口の中で小さく答える。

栄奈は小首を傾げた。本当は、教室を出て行く太一の様子がいつもとなんだか違っていて、気になったから追いかけてきたのだが、それは言わなかった。

「さっき、ビックリしちゃった。高坂君が、阿川君のとこへ遊びに行くなんて」

「俺じゃないよ。大家さんに会いにくるだけ」

太一は踊り場の窓にもたれて、外に目をやった。

「空栗荘の大家さん？　――あっ」

そういうことかぁ、と采奈は神妙な顔になった。賽河原町に住んでいる采奈も、それがどういう意味か知っている。以前に弟が薄売りに攫われた時、彼女も空栗荘に相談に来たのだ。

「高坂君、やっぱり何かあったのかな。空栗荘に行くくらいなら、よっぽどのことだと思うけど、昨日のことも関係あるのかな」

「うん」

どうだろ、と太一は曖昧にうなずいた。

「でもさ、阿川君と高坂君て、一緒にいると目立つね。みんな、思わず見ちゃったよ」

采奈は急に明るい声で言った。太一は目を伏せる。

「――そんなにおかしいかな」

「え？」

「俺が高坂と話をしたら、そんなにヘンなのかな」

采奈はきょとんと目を瞠ったが、すぐにすごく真面目な顔になった。

「おかしくないよ」

「――」

「全然、おかしくなんかないよ。阿川君は普段しゃべらないし、おっかないし、一人でも平気な一匹狼だってみんな思ってて」

だからその「おっかない」とか「一匹狼」って何なんだろうと、太一は思う。いつ聞いても、

自分のことを言われてる気がしないのだが。

「高坂君だって、自分から誰か遊びに誘ったり、家に行きたいなんて言い出すタイプじゃないから、それでみんな、珍しいなって思っただけだよ」

目立っていたのも本当だ。太一は自覚がないようだが、クラスの中には「阿川君てけっこうイイよね」と言う女子が何人かいるのを、采奈は知っている。さっき太一を見て笑っていたグループの子たちだ。

「阿川君は誰も自分のことを好きじゃないって思ってるみたいだけど、前にも私言ったけど、そんなこと絶対にないんだからね！」

まるで怒っているみたいな、采奈の口調だ。

太一の横で一緒に窓にもたれて、真っ直ぐに彼を見上げて、

「さっきはみんな、『あれ、阿川も普通に友達づきあいするんじゃん』て思ったんだよ。本当に、それだけ」

「……うん」

すっきりと胸の中のもやもやが晴れたわけではなかったけども、太一はうなずいた。

采奈はよく、「クラスの子たちは阿川君のことを嫌っていない」というようなことを、言ってくれる。一生懸命に言ってくれるから、心がほっこりする。

「だからおかしくなんかないの、わかった？」

「うん」
太一がさっきよりしっかりとうなずくと、采奈は安心したように笑った。
その笑顔を見て、ふと、今なら訊けるかもしれないと太一は思った。
これまでも機会はいくらでもあったのに、訊けなかったこと。なぜだか、ものすごく恥ずかしくなって、口に出せなかったこと。
でも、今なら。
「あの……あのさ、和泉」
「うん」
「和泉の好きなものって、なに？」
采奈が誕生日に欲しいもの。何だろう。
勇気を振り絞って、やっと、口にすることができた。
「え、好きなもの？　……うーん、いっぱいあるけど」
いきなり質問されて、采奈は大きな目をいっそう丸くした。真剣な顔で考え込んでから、うん、と大きくうなずいた。
「今の季節だったら、やっぱりおでんかな」
「……え」
「それでね、おでんの中でも、大根と卵が一番好き！　あ、それと、油揚げの中にお餅を入れ

たやつも大好き」
「そ、そうなんだ」
「阿川君は？　おでんの具で何が一番好き？」
「……はんぺん、かな」
「うん、はんぺん、おいしいよね！　でもあれってさ、長い間煮てるとぶわっと大きくなってビックリしない？」
「うん」
その時、チャイムが鳴った。
「わあ、たいへん。教室に戻ろ、阿川君」
栄奈が慌てたように駆け出す。あとにつづきながら、太一は思わずため息をついた。
……どうして食べ物の話になったんだろう？

放課後。約束どおり校門で待っていると、少し遅れて高坂が姿を見せた。
べつに何を話すでもなく、太一は彼と並んで歩き出した。
なんだかヘンな具合だと思う。クラスメートと一緒に歩くというのはこれまであまりなかったので、うまく距離感が摑めない。
そういえば栄奈と歩いた時、彼女は時々小走りになっていた。栄奈の歩く速さを全然考えて

いなかったことに、太一は今さら気づいた。
会話のないまま電車に乗ったあたりで、
（来てもいいって言ったけど、本当によかったのかな）
傍らに立つ高坂を気にしながら、太一は急に心配になった。
何しろ空栗荘では、奇妙な出来事が日常茶飯事だ。
（まさかいきなり、妖怪や幽霊と鉢合わせってことはないと思うけど……）
大家さんの都合も聞いてないし、そもそもこの数日顔を見ていないからやっぱり寝てるんじゃないかな、と太一が首を傾げていると、高坂が初めてぼそっと口をきいた。
「無理に押しかけたみたいで、悪い」
いや、と太一は思わず口ごもって答えた。
（高坂ってなんだか……よく謝るヤツだな）
それに、本当にあまりしゃべらない。
まあ太一が話しかけないから、よけいに口を開くきっかけがないのだろうけど。
次に高坂が口を開いたのは、バスを待っている時だ。
「賽河原町って、よそと比べて少し不思議だよな。引っ越してみて、わかったけど。他の町にはないような習慣とか祭りとかがあって」
「……うん」

多分、昔の人たちは自分たちの住む土地が妖怪の世界に繋がっていることを、知っていたのだ。不思議な習慣や祭りは、その名残である。よそから来た太一の知らないことも、まだまだたくさんあるに違いない。

「そう言えば去年の夏にさ……盆の祭りの時に、提灯を持たされた」

ふと、言葉が自然にこぼれるように、太一の口から出てきた。

ああと、高坂はうなずく。

「俺もガキの頃、提灯を持って祭りに行ったよ。提灯の火が赤くなったら、近くに悪いものがいるから、すぐにそこを離れろって大人たちに言われた」

「うん、そう」

「あれって本当かな。赤くなったのは、見たことがなかったが」

高坂の口も少し軽くなったみたいだ。賽河原町を知っている人間にしか、通じない話題だからだろうか。

「本当だったよ」

太一が言うと、腕時計を見ていた高坂は顔を上げた。太一にちらと目を向けて、

「そうか」

「あと、死んだ人間も祭りに来てた。みんな面をかぶってさ」

「ああ、そういうのも聞いたことがある。だから、真夜中を過ぎたら祭りに出ちゃいけないと

か。全然本気にしてなかったけどな」
「俺、去年の盆にばあちゃんに会ったんだ」
高坂は、ふぅんと首をうなずかせた。
「幽霊って、やっぱり生きている時と同じ格好なのか？」
「さあ。ばあちゃんが死んだのは、俺が生まれてすぐだから……。でも多分、生前もあんな感じだったんだと思う」
「話、したか？」
「うん」
こういう会話なら、わりと普通にできるんだなと、太一は思った。内容は、全然普通じゃなかったが。
高坂はふと黙り込むと、しばらくして、独り言のように言った。
「……俺も、去年来たら会えたのかな」
誰に？
太一は思わず彼を見つめた。
夕暮れには少し早い。遅い午後の光が、バス停にも降り落ちていた。淡くて透き通った、冷たいガラスのような二月の陽射しだ。
風はまだ北風。

「寒いな」
高坂は首をすくめて、呟いた。
その一言で会話が途切れて、相手との距離感がまた、わからなくなる。
――昨日、高坂は交差点で何をしていたのだろう。
訊いていいのかどうか、太一が迷っているうちに、バスが到着した。

4

「へぇ、あんたのクラスメートが大家に相談事ね。それで連れて来たのかい」
空栗荘に戻ると、太一は高坂を玄関の外に待たせて、お露さんを呼んだ。
訪問者は大家の許しがあるまで中に入れてはいけないと言われていたからだが、食堂から出てきたお露さんは玄関の上がり口で説明を聞くと、しかめっ面で言った。
「で、その子はどこにいるんだい」
「外で待ってます」
あんたね、とたちまちお露さんは呆れ顔になる。
「なんだい、あんたのクラスメートは化け物なのかね？　ちゃんと人間だとわかっていりゃ、中に入れてもいいんだよ。妖かしと人間の境界を守るためのルールなんだから」

お露さんに促されて、太一は高坂を中に招き入れた。
高坂は三和土に立って、空栗荘のレトロな内装や玄関に積み上げられたガラクタの山を物珍しそうに一瞥してから、ぺこりと頭を下げた。
お露さんは彼をじろりと見ると、
「ふん。それで大家に用ってことは、何か困ってるのかい？　こっちもあのグータラを叩き起こす手間があるんでね、酔狂だったらお断りだ」
ということは、やっぱり柊二郎は寝ているわけだ。
高坂は大人のような顔で、少し考えてから言った。
「――死んだ人間から連絡が来ることって、ありますか？」
「そりゃ、幽霊から手紙か電話をもらったって話かね」
「携帯電話のメール」
ふん、とお露さんは鼻を鳴らすと、まったく今時は幽霊も情緒がないよとぶつぶつ言った。
「まあ絶対にないってことはないね。その相手ってのは知り合いかい？」
「中学の時に同じクラスにいた女子です。去年、交通事故で」
隣で靴も脱がずに突っ立っていた太一は、ハッとして高坂を見た。
（それって、和泉が言ってた……）
――ちょうど去年の今頃。

――高坂君と同じクラスの女子で、相田環って子。
あの交差点で、車にはねられて死んだというクラスメートの話だ。
でも、まさか。
（その子からメール？　ていうか、死んだ人間からメールが来るなんてこと……）
いや、そこはべつに驚かなくてもいいのか。太一だって空栗荘に来てから、妖怪や幽霊と普通に会う生活をしているのだから。絶対にないことではないと、お露さんも言っていることだし。でもやっぱり、ちょっと驚く。
だって、幽霊は携帯電話なんて持っていないと思う。
それとも、昨今は妖怪だってひょっとすると携帯くらいは持っているのかもしれない。例えばお魚紳士こと、裏・賽河原町の町長とか。鮒の妖怪だが、シルクハットをかぶってステッキを持っているなら、ついでに携帯電話を持ち歩いていたって違和感はないような……。
（妖怪が持ってて、幽霊がダメってことはないよな）
首を捻っている太一にはかまわず、お露さんはしかめっ面でつづけた。
「で、相手は何だって？」
「待ち合わせ場所と時間が書いてあって、そこで待っていると」
「ふうん。ついでに立ち入ったことを訊くけど、その相手はあんたとどういう関係だったのかね？」

——高坂君、その相田さんと
「交際していました。事故の日にも、俺は彼女と会っています」
淡々と言った高坂をしばらくじっと見てから、
「なるほど」
お露さんはうなずく。
「確かにやっかい事かもしれないね。大家を起こしてくるから、太一、あんたはこの子を団欒室に連れて行って待っていておくれ」

空栗荘では、団欒室だけが洋風の造りになっている。古風な暖炉には赤く火が燃えていて、室内はほこほこと暖まっていた。
古い革の匂い。書物の匂い。昼間はアーチ型の大きな窓から明るい陽射しが入り、夜は黄色い柔らかな照明の光に満たされる。冬には特に居心地のよい場所なので、太一は最近、団欒室で消灯時間まで勉強することが多かった。
コートを脱いで、言われたとおりソファに二人で座って待っていると、大家の部屋のほうからドスンっと大きな音が響いた。
何だあれ、という顔で高坂が見るので、太一は肩をすくめた。
「多分、背負い投げ」

声をかけても起きない大家に業を煮やして、お露さんが強硬手段に出たらしい。わりとよくあることだ。

果たしてほどなく、「いたたた……」と腰をさすりながら、半分寝ぼけ顔の大家がいつもの作務衣姿であらわれた。

「いやあどうも、お待たせしました～」

ふにゃふにゃした声で言って、柊二郎はテーブルの反対側の席に腰を下ろした。

「えっと、じゃあ俺は部屋に戻ります」

高坂が相談しに来た相手は柊二郎なのだし、話を聞いたところで太一が役に立つわけはない。むしろ邪魔だろうと思って、カバンを持って立ち上がったら、

「いえいえ、太一君もいてください」

引き留められて、太一は首を傾げた。

「でも」

「君はクラスメートが困っているのに知らん顔ができるような、薄情な人間ではありません。何しろ部屋番号０１４４の『お人好し』ですから！」

……やっぱり部屋番号を変えてもらいたいかも、と太一は思った。

（いいのかな。俺が話を聞いても）

ちらと見ると、高坂が小さくうなずいたので、また腰を下ろす。

「では、あらためまして。どうも、空栗荘の大家の時国柊二郎です」
柊二郎は高坂のほうを向いて、ひょいと会釈した。高坂も礼儀正しく頭を下げる。
「高坂日之人です」
「うん、なかなか良いお名前です。――それで、太一君のクラスメートであるところの君は、死んだはずの交際相手から携帯電話にメールをもらったので、僕に相談をしに来たと。ええと、そういうことでいいんでしょーか？」
柊二郎はにこやかに言う。寝ぼけていても、お露さんが伝えたことは覚えていたようだ。
「はい」
「君は以前に賽河原町に住んでいたとか」
「はい。ここのことは祖父から聞いていました」
さっき太一が玄関先でした説明も、しっかり伝わっていたようである。そうですか、と空栗荘の大家はうなずいた。
「そのガールフレンドのお名前は」
「相田環」
「ではまず、問題のメールを拝見することはできますか？」
高坂は制服のポケットから取り出した携帯電話を操作して、柊二郎に手渡した。
柊二郎は、ふむふむと呟いて文面に目を通してから、

「これ、太一君にも見せていいですか？　――あ、かまいませんかそうですか。ではどうぞ、太一君」

差し出された携帯電話を受け取って、太一も死者からというメールを見た。

メールはこんな具合だった。

『今日の四時。いつもの交差点で待ってるね。《みはま》のあんみつ食べたーい。環』

キラキラした可愛い絵文字入り。なんかもっとおどろおどろしいものを想像していたが、内容はいたって普通のメールだ。

（……というか、普通すぎるんだけど）

なんで、あんみつ？

「《みはま》ですかー」

あの店のあんみつは美味しいですよねー僕も大好きですと、柊二郎は感慨深げに言った。どうやら甘味屋らしい。

「とすると、待ち合わせの交差点というのは《みはま》の近くの――賽河原町二丁目の交差点ですか？　バス通りになっている……」

「そうです」

柊二郎は目尻の下がった目をいっそう細めて、なるほどあそこですか、と呟いた。

「いつもの、ということは、彼女とはいつも二丁目の交差点で待ち合わせを？」

「はい。以前は家が近かったけど、俺が引っ越してからは放課後や休みの日に、よくそこで待ち合わせていました」

高坂の口調は、まったくよどみがない。まるで、教室で教師の質問に答える優等生だ。

うんうんとうなずいて作務衣の腕を組むと、柊二郎は「それで……」とつづけた。

「そのメールを受け取ったのはいつですか？」

「今年に入って三回、同じメールが来ました。一回目は年が明けてすぐで、あと二回は二月になってから。一週間前と、昨日。見てもらったのは、昨日来たやつです」

太一は思わず、持ったままだった携帯電話にもう一度目をやった。

（三回って……）

しかも、同じメールということは、この『あんみつ食べたーい』が三回？

と考えてから、気づいた。

（あ、そうか）

昨日も、高坂はこのメールを受け取っていた。

（だから昨日、あそこの交差点にいたんだ）

約束は四時。太一が見かけた時には、それよりずっと遅くなっていたけど、高坂はまだそこにいた。

（待ってたのかな）

――もういない相手からメールが届いて、その相手に会うために、その場所で。

「それで、会えたわけ？」

高坂は怪訝そうに太一を見返した。

「昨日、二丁目の交差点にいるのを見たから。帰りのバスの中で」

それで合点がいったように、ああ、と高坂は首を揺らした。

「いや。俺、幽霊は見えないから」

「――」

その時、お露さんがお茶を運んできた。

「ああ、お露さん。ミヨシ君は今います？」

柊二郎が訊ねると、湯呑みをテーブルに置きながら、お露さんは「いるよ」と無愛想に応じた。

「古都子もさっき帰ってきた。――何だね、今回は助っ人が必要なのかい？」

「そうですねぇ。どうも、踊りヶ辻と関係があるようですから」

「へえ」

お露さんはやれやれと肩をすくめると、「やっぱり、やっかいだね」と言いながら部屋を出て行った。

「踊りヶ辻って……？」

太一が訊ねる。
「二丁目の交差点のことですよ。今はもうお年寄りしか知らないでしょうけど、あそこは昔、そう呼ばれていたんです」
「はあ」
それで何がやっかいなんだろうと思ったが、太一が訊く前に、柊二郎はふたたび高坂のほうに顔を向けた。
「それにしても、メールを受け取った時にはずいぶんビックリしたでしょう」
「はい。最初は何かの間違いか、誰かの悪戯かと思いました」
平坦な口調で言った高坂を、柊二郎は目を細めて見つめた。それから柔らかな声で、
「誰だってそう思います。でも何かの間違いでも、誰かの悪戯でもないんですね？」
「違います」
高坂はきっぱりと首を振る。
「環の弟が一学年下にいて顔くらいは知ってたんで、最初のメールが来たあとにそいつを呼び出して確認しました。環の携帯電話は事故の時に壊れて、解約もとっくにしたそうです」
けれどもメールは届いた。彼女のアドレスで。
それに、と高坂は言葉を継いだ。
「まだ言ってなかったけど、実はそのメールは環が事故に遭う前、最後に俺に送ってきたのと、

同じものです。悪戯なら、メールの内容を知っている人間でなければできないし、環はむしろ俺とそういう遣り取りをしていることを、他人に内緒にしたがっていましたから」

なるほど、と柊二郎はちょっと考え込むふうを見せた。

「つまり、君が環さんから受け取った最後のメール……それと同じものが、今年になって三回も送られてきたということですか」

「はい」

「しかもその内容を知っている人間は、おそらくいない、と。ええまあ、そうすると本人からのものでしょう。間違いなく」

なんだそうか、と太一も思った。相手が生きていた時のメールなら、普通すぎるのも当たり前だ。

（幽霊があんみつを食べたがっているわけじゃ、なかったんだ）

柊二郎は湯呑みに手を伸ばすと、茶を一口飲んで、うーんと唸った。

「もう一度それ、見せてもらっていいですか」

太一から携帯電話を受け取って、しばらくいじってから、

「確かに三回とも、同じ内容ですねえ。……あまり思い出したくないことでしょうから申し訳ないんですが、もう幾つか確認していいですか」

はい、と高坂の声はやはり淡々としている。

「俺がお願いしていることですから」
「ええと、それでは。環さんが事故に遭ったのは、君と一緒にいる時ですか？」
「別れたあとです。俺は家に戻ってから、クラスのやつに連絡をもらって知りました」
「亡くなったのはあの交差点なんですね？」
「はい。車が突っ込んできて、即死だったそうです」
高坂と別れて、家に帰るために横断歩道を渡っていた彼女を、信号無視で突っ込んできた乗用車がはねたのだという。
「――それで、君が僕に相談したいことというのは、何でしょう？」
居住まいを正した柊二郎に対し、高坂は束の間黙り込んでから、逆に訊ねた。
「普通の人間が、幽霊を見る方法はありますか？」
「はあ。幽霊をですか」
「俺は、環はまだあそこの交差点にいるんだと思います。俺に会いたくて、呼んでいるのだと思う。でもさっきも言ったように、俺は幽霊を見たことがないから、環がいてもきっとわからない。――きっと、何回メールが来ても、俺は環とは会えません。だから、もし会える方法があるなら教えてほしいんです」
太一は隣に座っている高坂の横顔を見た。
どうしてだろう。背筋が、すうっと冷たくなった。

誰かの悪戯のほうがよかったかもしれない。もちろんそれは、悪意に満ちたひどい行為だけど、もしかしたらそのほうがマシだったんじゃないか……なぜか、そんな気がした。

柊二郎は高坂をじっと見つめていたが、やがてぱちんと携帯電話を畳むと、彼に返した。

そうして微笑んでいるのかいないのか、わからない顔で、言った。

「なるほど、そういうことなら、方法があるかどうか調べてみましょう。今この場でどうこうできる話ではありませんので、後日何かわかったら連絡します。ええと、その時は太一君に伝えてもらうということで、いいですか？」

お願いします、と高坂は頭を下げた。

「ああ、重要なことを訊くのを忘れていました」

急に思いついたように、大家は口を開いた。

「環さんが亡くなったのは、いつですか」

「去年の、二月二十三日」

柊二郎はうなずく。

今日は十九日だから、命日まであと四日ですね。と、呟いた。

その日の話は、それで終わった。

玄関で見送る太一に「じゃあ」と言って、高坂は戸を開けた。——そのとたん、外に踏み

だそうとしていた足が、止まった。

「うわわわわ」

一緒に見送りに出た柊二郎が、素っ頓狂な声をあげて高坂のコートを後ろから摑み、同時にお露さんがぴしゃりと戸を閉ざした。見事な連携プレーだ。

（……どうして？）

太一もぽかんとした。

高坂が戸を開けた一瞬、見えたのは飛び石が門まで連なる空栗荘の前庭ではなかった。夕刻の、青みを帯びた黄昏に鬱蒼と浮かび上がる樹木と、妖怪たちの町へつづく坂道。こちらの、人間の世界ではなくあちらの——異界の風景である。

（なんで、あっち側に繋がっちゃったんだろう）

「あの、今——」

振り返って高坂が言いかけると、

「はいっ、何でしょうっ？　何か幻でも見ましたかっ？」

柊二郎はパッと彼のコートを放して、ぶんぶん、ぶんぶんと首を振った。

と、いきなり玄関の戸が外からがらりと開いた。

「ただいま。……どうかしたんですか？」

入って来たのはレンだ。バイトから帰ったらしい。

あたふたしている空栗荘の面々を見て、不思議そうに首を傾げた。
「あああ、レン君。お帰りなさい。今日も一日お仕事ご苦労さまでした」
「え？　あ、はい」
柊二郎は素早く首を伸ばして、開いたままの戸の外を見た。前庭が見える。もとどおりに人間の世界の風景に戻っているのを確かめて、ほっと息を吐いた。
「ええとですね、それでは高坂君、今日はどうもでした。さあ、ずずいっと外へどうぞ。あ、帰り道、わかります？　何だったら太一君に途中まで送ってもらえば――」
大丈夫です、というように、高坂は首を振った。物問いたげにチラと太一を見たが、結局「失礼します」とだけ言って、出て行った。
手を振ってそれを見送ったあとで、大家とお露さんはそろってはぁぁと肩の力を抜いた。
「やれやれ、どうなってるんだい。まさかあちら側の戸を開けちまうなんて」
お露さんがぼそぼそと言った。
「ちょっとまずいね、あの子は」
ええまあ、と柊二郎が曖昧な相づちを打つ。
「だいたい、死んだ女に呼ばれてるって時点で、すでに半分あの世に引っ張り込まれているみたいなもんだ」
「そうですねぇ」

え、と太一は声をあげた。
「それって命が危ないとか、そういうことですか？」
お露さんは皺だらけの顔をしかめると、太一に向かってそれこそ幽霊みたいに、両手をだらんと垂らして見せた。
「そりゃね。女の情念ほど怖ろしいものはないよ。恋しい男に未練がありゃ、手に手を取って黄泉路の道行き、相手に取り憑いて取り殺すってのもよくある話さ」
「まあそういう可能性も、ないこともないこともないことも——」
「どっちなんだい」
「ところでお露さん、今日の夕飯は何ですか？」
「蕪とイカの炒め物に、豆腐の挽肉あんかけだよ」
お露さんは、呆れたように柊二郎を見た。
「……って、なんでここで飯の話なんだい。まったく、人が真面目に話してりゃ、このぐうたらボケボケ大家は」
「すごい言われようですー」
ふん、と気が抜けたように鼻を鳴らすと、お露さんは踵を返して食堂へ行ってしまった。
「あ、ミヨシ君を見かけたら、僕のところへ来るように言ってくださいね〜」
その背中に声をかけてから、柊二郎は太一と向き合った。

「そういうわけで、君も高坂君のことは気をつけていてあげてください」
どのへんが「そういうわけ」なんだか、よくわからない。まさか本当に、高坂に相田環の霊が取り憑いているとか――と考えてから、太一は首を傾げた。
「俺がですか？」
「そう。君がです」
でも、と太一は口ごもる。
「気をつけるって、どうすれば……」
「そうですね。とりあえず彼に、詳しい事情を聞いてみるということで」
「だって、事情はさっき聞いたんじゃ？」
「はい。だけど、気がつきませんでしたか？　――彼、大切なことは何も話していませんでしたよ」
ではよろしく～と言いながら、ぺったんぺったんとスリッパを鳴らして行ってしまった大家を、太一はぽかんとして見送った。
（大切なこと？）
どういう意味だろう。
ますます首を捻ってから、太一はレンがまだその場にいることに気づいた。
「レンさん？」

玄関の上がり口で、閉ざされた戸をぼんやりと見ていたレンは、我に返ったように振り返った。それまで片手で自分の胸を摑んでいたのは、苦痛を感じていた証拠だ。

「今の、君の友達？」

「クラスメートだけど。……どうかした？」

「彼、うちの店に花を買いに来たことがあるんだ」

死んだ人にあげる花。そう言って、レンは優しげな顔を少し曇らせた。

「顔は覚えていなかったけど、痛みが同じだったから、思い出した」

「――」

植物と会話ができるほど感応力の鋭いレンは、そのためにそばにいる人間の心の痛みまでも感じ取ってしまう。見ず知らずの他人の辛さや悲しみや怒りといった負の感情を、そのまま本当に自分の「痛み」として感じてしまうのだ。

柊二郎のかけた暗示のおかげで、賽河原町にいる分には普通に生活していられるのだが、それでも人の多い場所や、強い感情を持った相手の近くには、苦しくて長い間はいられないらしい。

そのレンが感じた、高坂の痛み。

「それって、いつ頃？」

「去年の春かな。四月か五月くらい。……見た目にはそんな感じじゃないのに、胸の中がキリ

キリと潰れるみたいに痛かった。誰かが死んですごく悲しくて、それでその人にあげる花を買いに来たんだって、わかった」

「……うん」

レンの店は二丁目の交差点の近くではないけれども、歩いて行けない距離ではない。

「でも、ちょっと驚いた。あれからけっこう経つのに、さっき会ったら痛みの度合いが全然変わっていなかったから。普通は、どんな感情も時間が経てば、少しくらいは薄れるものだと思うけど」

太一は、高坂の寡黙で淡々とした表情を思い出した。

見た目はそんな感じじゃない、とレンは言ったけど、確かに悲しそうな顔はしていなかったから、意外な気がした。

「それに、悲しいだけじゃなくて……」

レンは思い出すように、そっとまた自分の胸に触れた。

「なんていうのかな、ものすごく……怒っているみたいな」

「怒っている？」

うん、とレンはうなずいた。

「自分に対して怒っている。彼のは、そういう痛みなんだ」

5

夕食後、宿題を片付けるために教科書とノートを持って太一が団欒室に行くと、古都子と十遠見が先に来ていた。寒い時期は住人たちも、食堂ではなく暖炉のあるこの部屋で寛ぐことが多いようだ。

十遠見はソファで新聞を読み、古都子は揺り椅子を揺らしながらスケッチブックに何か描いている。工房で彫る作品の構想を練っているのだろう。

太一がテーブルの片隅に陣取ったところで、古都子は鉛筆を放り出して「うーん」と伸びをした。立ち上がると、テーブルの上に置いてあったポットからカップにコーヒーを注いだ。

「太一君もいる？」

「はい」

「ついでにこっちにも頼む」

「はいはい。えっと、太一君はブラックだっけ？　十遠見さんは砂糖とミルクたっぷりね」

暖炉の火がぱちぱちと音をたてている。この場所に流れる時間は静かで穏やかで、不思議なことにどれだけ他の人間がいても、煩わしいと太一は思ったことはない。本を読んでいても勉強をしていても、他人の気配を気にせずに没頭できた。

しばらくそうして宿題と格闘してから、太一は気になっていたことを思い出して、ノートから顔を上げた。
「あの。ちょっと訊いていいですか？」
「数学とか物理とか漢文とか英語の問題だったら、十遠見さんに質問してね」
「違うんです。そうじゃなくて……幽霊って、携帯電話を使えるのかなって思って」
「携帯電話？」
古都子は首を傾げた。
「使えるかどうかは知らないけど、電話機自体持ってないんじゃないかしら」
「あ、やっぱり」
「だいたい、使っていたら違法だ。彼らは基本料金も通話料もパケット代も払っていない」
十遠見が新聞に目をやったままで言った。真っ先に金の話になるところが、さすがだ。
「でも死んだはずの人から電話や手紙が来たって話は、あるんでしょう？」
「それはあるけど、どうやってそれができるかなんてわかる人はいないんじゃないかしら。例えば霊が祟るっていうけど、どんなふうに念が残ってどうしてそれで生きている人間に悪影響を及ぼすかなんて、誰にもちゃんと説明できないと思う」
「霊に関しては、実際わからないことのほうが多い。というより、科学的に分析して結論づけることなど不可能だ。だから日本人的に解決するしかない」

と、十遠見も言う。
「日本人的って？」
「まあ何だかよくわからないけど、世の中そういう不思議なこともあるということで、とりあえずお祓いするか何かしておこう――ということだな」
国家公認術者の言葉なので、そこそこ深い。
「もし本当に電話を使わなきゃいけないんだったら、メリーさんなんて困るんじゃない？」
古都子はスケッチブックを胸に抱えて、クスクス笑った。
「は？　メリーさん？」
「知らない？　メリーさんて名前の人形がいて、それが古くなって捨てられちゃうのね。すると捨てた人間のところに電話がかかってくるの。『私、メリーさん。今ゴミ捨て場にいるの』とか『角のコンビニの前にいるの』って。電話が来るたびに人形がだんだん近づいてきて、最後に『今、あなたの後ろにいるの』で、おしまい」
「知ってますけど。それって実話じゃないんじゃ……？」
怪談とか都市伝説の類だ。
「現実でも、よく似た話はある」
十遠見は新聞をバサッと膝の上に置いた。
「私の知人の体験談で、しかも現在進行形だ。聞きたいか？」

ものすごく話したそうなので、太一はうなずいた。
「――そいつは海外出張の土産に、パリの骨董店でアンティークの人形を買ったんだが、うっかりホテルに忘れてきてしまった。ところが帰国した夜、『よくも置いていってくれたわね』と女の子の声で恨みがましく、パリから国際電話がかかってきたそうだ」
どうやらいわくつきの人形だったようだと、十遠見は言う。
「日本語で？」と疑わしげに、古都子。
「そう、なぜか日本語に翻訳されていたらしい。その三日後、今度は『今ウィーンにいる』と電話があった。それからというもの、数日ごとにローマ、アテネ、カイロ、デリー、バンコクと、各国の首都から電話が入るようになった――」
「あっそ。……まあ、グローバルに近づいてきてるわね。それで？」
「ところが一ヶ月前に、『今北京にいる』と連絡があったきり、音信不通だ」
メガネの縁を指で押し上げると、あくまで真顔で十遠見は締めくくった。
「入国審査にひっかかったのかしら」
「もしかすると薬物の不法所持かもしれない」
（……その前に、人形なんだけど）
太一は思ったが、黙っていた。
ここの住人たちは普段から不思議なこと慣れしているせいか、時々すごく大雑把だ。

「そうなると気になるわね。人形が来日したらぜひ教えて、十遠見さん」
「ああ」
ところで、と古都子は首を傾げた。
「ごめん、太一君。何の話だったっけ？」
「幽霊が携帯電話を使えるかどうか、ですけど」
「あ、そうか。で、それは察するに太一君のクラスメートが関わっていることね」
え、と太一は古都子を見返した。
古都子はニッコリする。
「実は、柊さんからさっき聞いたの。私にも調べて欲しいことがあるからって」
「そうなんだ……」
「ミヨシも柊さんに言われて、踊りヶ辻を見に行ったはずよ。そろそろ帰って来る頃だと思うけど」
そういえば、もうひとつ気になることがあった。
「あの交差点て、どうして踊りヶ辻って呼ばれていたんですか？」
「ああ、あそこはね――」
古都子が言いかけた時、当のミヨシが団欒室に入って来た。後ろにアカネがくっついている。勉強をしている時は邪魔しないように言い聞かせてあるので、アカネが団欒室について来るこ

とはめったにないのだが、今日はどうやら部屋で一人で遊ぶのも飽きてしまったらしい。パタパタと嬉しそうに駆け寄ると、太一の膝によじのぼった。

「部屋をのぞいてもおらんと思うたら、ここにおったんか」

目つきが鋭いので妖怪にまで「顔が怖い」と言われてしまうミヨシは、相変わらずの仏頂面で太一の隣にどかっと腰を下ろした。

「今、大家に報告してきたとこや。おまえにも言うとく」

なんだろう、と太一が思っていると、

「踊りヶ辻やけどな。あそこに幽霊はおらん。少なくとも、おまえのクラスメートが言うとる女の子の霊はおらんで」

え、と太一は目を瞬かせた。

「いない？　……でも」

「大家に言われて一応見に行ったけどな。もしおったら、もっと早うに気ぃついとったわ。俺かてあそこは何度も通っとるんやし」

「私もあの交差点はバスで通るが、これといって強い霊の気配は感じないな。それでなくともあそこは溜まりやすい場所だから、定期的に浄化している。霊がいつまでも留まっているはずはない」

十遠見も言う。

つまり――相田環の霊は、あの交差点にはいない？
膝の上のアカネに子猫のようにきゅうっとしがみつかれながら、太一は混乱する。
（それって、どういうことだろう）
「それだけや。ほな、俺は夕飯を食うてくるわ」
あとはまかせたで、と古都子に言って、ミヨシは団欒室を出て行った。
「やっぱりいなかったのかぁ」
古都子がふぅと小さくため息をつく。ちょっと面倒ね、とつけ加えた。
「あの。幽霊がいないって、つまり高坂が……嘘をついたってことですか？」
太一がおそるおそる訊くと、古都子は笑って「ううん」と首を振った。
「もし嘘やデタラメなら、柊さんにはちゃんとわかるはずよ。調べろって言ったんだから、その女の子の霊は本当にいるんだと思う。大丈夫……っていうのもヘンだけど、太一君のクラスメートは嘘つきではないわ」
「だけどミヨシさんも十遠見さんも、あの交差点に幽霊はいないって」
「こちら側にはね」
「え？」
「さっきの話のつづき。どうして二丁目の交差点が、踊りヶ辻って呼ばれていたのか」
古都子は揺り椅子を軽く揺らす。笑みを消して、真顔になっていた。

「もともとは違うの。もっとずっと昔には、『おどり』じゃなくて『ことり』だったそうよ」
「ことり？」
「子を取ると書いて、子取りヶ辻。多分、頻繁に人が消えた――つまり神隠しといわれる現象が多発した場所なんだと思うわ。消えたのは子供だけじゃなくて、もちろん大人もでしょうけど。その『子取り』がなまって『踊り』になったのか、それとも縁起が悪いからわざと呼び名を変えたのか、どっちかじゃないかしら」
（人間が消える……？）
子取りヶ辻。確かに聞いただけでぞっとするような、不吉な名前だ。
そういえば、と采奈が言っていたことを太一は思い出した。
――子供の頃は、あの交差点には行っちゃいけないって、おばあちゃんに言われていたんだよ。
事故が多かったり、ヘンな噂があったり。でももしかすると、子取りヶ辻という名前はとっくに風化していても、あの場所で神隠しがあったという記憶はこの町の人々の中にまだ生きつづけているのかもしれない。
「辻や橋というのは古くから異界に繋がる場所と言われてきた。特にあの交差点は霊的な力が強く働いていて、境界守にとっては要注意のポイントだ」
十遠見が割り込んだ。今回は助っ人ではないが、会話の流れで少しは事情を察しているらし

い。

「異界って……じゃあ、あの交差点からも妖怪の町に入れるってこと？」

ふと見ると、アカネが上機嫌で太一のノートに落書きをしているものだから、慌ててシャーペンを取り上げながら、太一は言った。

「太一のいじわるー」

「ダメだってば。画用紙を買ってあげただろ。めっ」

ぷうっとアカネがふくれる。

「――それが、そう単純な話でもないの」

古都子も笑いながら指先でアカネに「めっ」をしてから、言った。

「あちら側では、家屋や通りがしょっちゅう入れ替わっているでしょ？　それでも要所は人間の町も妖怪の町もだいたい同じところにあるから、慣れれば位置関係はだいたい勘で見当がつくわけ」

まあ、そうでなければ古都子のように毎日妖怪の町の工房に通うのは無理ということになってしまう。あちら側の賽河原町には地図などないし、あっても役に立たないから、太一などはいまだに一人で迷わずに妖怪の町を歩くことはできない。

「ところが、踊りヶ辻だけはあちらの町のどのへんにあるのか、さっぱりわからないのよ。とんでもないところに出現したかと思うと、すぐに消えちゃったりね」

「そうなんですか」
裏・賽河原町名物『さまよえる地下鉄駅』より、所在確認が困難らしい。
「こちらで神隠しが起こるのと同じように、妖怪の町のほうでも妙な力が作用している特別な場所なんだと思う。だからあちらの住人たちも、辻の場所がわかってもあまり近づかないみたい」
古都子はまた椅子を揺らすと、ふぅと、小さく息をついた。
「それで柊さんに、あちら側の踊りヶ辻が今どこにあるのかを確認してほしいって頼まれたの。明日は工房を休んで、妖怪たちに聞いて探してみるわ」
さっきミヨシが「あとはまかせた」と言ったのは、あちらの賽河原町のほうは古都子にまかせた、という意味だったのだろう。確かに空栗荘の住人たちの中では、古都子が妖怪の町に一番慣れている。
と、そこまで聞いて、あれっと太一は思った。
そもそもどうして踊りヶ辻の話になったかというと……。
「あの。高坂は嘘をついていなくて、相田環の幽霊は本当にいて、でもこちら側にいないってことはつまり――」
うん、と古都子はうなずいた。
「多分、というかそれ以外に考えられないわね。その女の子の霊は、あちら側の辻にいるんだ

と思う」

「ええっ？」

「事故の衝撃で飛ばされたのか、何かのはずみであっちに入ってしまったのかも。人間が迷い込むくらいだから、もっと彼岸に近い霊ならなおさらあり得ることだけど。……そういうところだから、少しやっかいかもね」

やっかいも何も、妖怪も近づかないなんて、よほどおかしな場所じゃないかと太一は思う。

「もしかして、とても危ない場所なんですか？」

「うーん。そこがどんなところかは、私もよくわからないの。こっちで神隠しにあった人たちだって、結局どうなったかはわかっていないわけだしね。帰ってきたのか、でなければ、まだ辻にいるのかもしれない。それとも、辻を通って別の場所に行ってしまったのかも。ともかく場所の確認だけして、私もうっかり足を踏み入れないようにするわ」

（だけど、それだったら）

太一はちっとも片付かない宿題のノートに、ぼんやりと視線を落とした。

――幽霊が見えるとか見えないとかの話どころじゃなくて、もしそんなところに相田環がいるのなら、高坂が彼女に会うことなんて、もう絶対に無理じゃないだろうか。

6

翌日の昼休みには、太一のほうから思い切って高坂日之人に声をかけた。もちろん、ものすごく迷ったあげくだ。

自分の席にいた高坂は、ちらと太一を見てうなずくと、立ち上がった。

彼の周囲にいた数人がきょとんとした顔をしている。またクラスメートたちに注目されそうだけど、仕方がない。

采奈のほうに目をやると、まだ弁当を広げたまま目を丸くしてこちらを見ていたが、何か勝手に合点したらしく拳を握って「うんっ」と大きくうなずいた。

「高坂。――ちょっといい？」

「なに？」

廊下に出たとたんに訊かれて、太一は周囲を見回した。落ち着いて話をするには、どこへ行けばいいだろう。

「もしかして、人の来ないところがいいのか？」

「うん」

「じゃあ、こっち」

高坂に連れて行かれたのは、校舎の最上階。屋上に通じる階段の踊り場だった。
「外でもいいけど、寒いからな」
そう言って高坂は、階段に腰を下ろす。太一は少し離れて、手すりにもたれかかった。
「で、何だ？」
「あの……」
口を開きかけたとたん、頭の中で組み立てていた言葉が、全部ばらばらの断片になってしまった。会話の最初の部分を見失って、太一は自分でも唐突だと思う質問をした。
「三回とも、あそこの交差点に会いに行ったわけ？」
ああ、と高坂はあっさりとうなずいた。
「でも最初は、何かの間違いか悪戯かもしれないって思ったんだろ？」
そうでなくても気味が悪いとか怖いと思うのではないか。死者からのメールなんて。
「……本当は最初のメールが届いた時には、そんなこと何も思わなかった。ただ、環に会えるということしか頭になかった。あとになって、悪戯の可能性もあると気がついたから、環の弟に確認したが」
肩を竦めた高坂の表情は、相変わらず淡々として冷めている。
「彼女からのメールだって、初めから信じてたってこと？」
高坂はうなずいた。

どうして疑いもせずに、そんなふうに思えるんだろう？　太一は不思議に思う。
「結局、一度も会っていないけどな」
「……高坂が一昨日俺に声をかけてきたのってさ」
太一は手すりを握る手に力をこめた。
「俺がもし幽霊が普通に見える人間だって答えたら、一緒にあそこの交差点に来てほしいとか、そういう話だったのか？　つまり、自分は見えないから、彼女が本当にそこにいるのかどうか確認してほしかったとか」
「環はあそこにいる。でなきゃ、メールが来るわけがない」
きっぱりとした声に、どう答えていいか困って、太一は黙り込んだ。
（いるけど、いないっていうか……）
あちら側の賽河原町のことなんて上手く説明できないし、高坂にしゃべっていいことなのかどうかも、わからない。
「怒っているって、どうして？」
困ったあげくに、またも唐突なことを訊いてしまった。
高坂が怪訝な目を向けてきたので、急いでつけ加える。
「相田環のことで高坂は自分に怒ってるんだろ？」
今度は返事まで少し時間がかかった。

高坂は膝の上に頬杖をつくと、踊り場の壁に目を逸らせた。
「阿川って、やっぱり少し変わってるな」
ぼそっと言われて、太一はまた言葉に窮した。
「すまん。悪い意味じゃない。——ただ俺の勝手な思い込みっていうかイメージかもしれないが、阿川はこういう話を聞いてくれそうな気がした」
「こういうって……」
「幽霊とか霊感とか。そんなオカルト、他人はひくだろ、普通」
俺だってべつにオカルトは好きじゃないけど、と太一は思う。「一匹狼」とか「おっかなそう」に加えて、またひとつ本人にはぴんとこないイメージを語られてしまった。
「それって、俺が空栗荘に住んでるから？」
どうかなと、高坂は呟く。例によって、考えて言葉を選ぶようなゆっくりとした口調だ。
「それもあるけど、もっと早くから阿川のことは気になっていた。あまりしゃべらないから。今だって、和泉以外とはほとんど口をきいていないみたいだしな。もしかしたら阿川は、他のヤツとは何か違うんじゃないかと思ったんだ」
「違う？」
「価値観とか考え方とか、そういうもの。言葉が少ないぶん、軽い使い方はしないんじゃないかって。それで思い切って話しかけてみたら、落ち武者の幽霊を見たとかすらっと平気な顔を

して言うから、なんかおもしろいと思った」

どのへんがおもしろかったのだろう。太一が相手では会話がつづかないから、途中でやめてしまったのだとばかり思っていたのだが。

（だいたい、俺なら話を聞いてくれそうって）

他人と違うことは違うが、それは多分高坂が考えているような意味じゃない。なんだか妙に買いかぶられているようで、太一は重苦しい気分になった。

「でも途中で、やっぱり悪いと思った。いきなり話しかけて、するような話題じゃなかったから」

まただ。また、胸の中がもやもやする。他人からどんなふうに見られてもどうでもいいはずなのに、勝手な思い込みで自分という人間を測られたくないと思ってしまったのは、なぜだろう。

「――俺、他人と上手く会話ができないんだ。相手が笑っていても泣いていても怒っていても、理解できないから。それで面倒だから黙ってるだけ」

もやもやのせいで、声が硬くなる。

高坂は視線を太一に向けた。考え込むように目を細めると、

「俺は、他人と会話をするのが怖い」

「え？」

一瞬、意味を摑みそこねて太一は目を瞠った。

（怖い？）

成績がよくてスポーツマンで、いつも友人に囲まれている高坂が？

「言葉は人を傷つける。軽い気持ちで口に出して、でも間違えてしまったらもう取り返しはつかない。そう思ったら、怖くてしゃべれなくなった」

「どうして、そんなこと……」

「俺はあの日、環とケンカをした」

相田環が死んだあの日、あの交差点で。

あっさりと高坂が漏らした言葉に、太一は思わず彼を見つめた。

「きっかけなんてささいな事だった。その頃の俺は口が軽くて、考えもせずに好き勝手な事をベラベラしゃべりまくっているような人間で、それで環を傷つけて怒らせた。俺も腹が立って、そのまま環を置いて一人で家へ帰ったんだ。もちろん謝って仲直りするつもりだったけど、俺ばっかり悪いわけじゃないと思っていたし、そんなのは明日でいいだろうって、すごく気楽に考えていた」

でもその明日は、来なかった。

「事故を目撃した人の話では、環はしばらく交差点で泣いていたらしい。泣きながら信号を渡ろうとして、車にはねられたんだ」

太一に話しかけているのではなく、まるで目の前の空気を見つめているような顔で、高坂はそんなことをやはり淡々と語った。

「俺が最後に聞いた環の言葉は――『ヒノトなんて大嫌い』だ」

（……ああ、そうか）

太一にも、なんとなくわかった。

高坂が抱えている自分への怒りは、後悔だ。

相田環とケンカをした。傷つけた。怒らせて、泣かせた。そして――死なせた。

一人で家に帰ったりしなければ、すぐに彼女に謝っていれば、もっと言葉に気をつけてさえいれば。

――そう思ったら、怖くてしゃべれなくなった。

高坂君は前は明るくて、いつも冗談ばかり言って他の人を笑わせていたんだよ、と栄奈が言っていた。今は別人みたいだと。

寡黙なのではなく、言葉を選んで選んで口から出そうとしているから、そう見えるのだ。

「それでもし彼女に会えたら……謝りたいとか？」

太一は遠慮がちに訊ねる。

柊二郎の言っていた『大切なこと』というのは、もしかするとこういう話なのではないかと思いながら。

だが高坂は「違う」と首を振った。
「謝ったって、一度言ってしまった言葉は消えない。相手を傷つけた言葉は、なかったことになんかならない。――だけどもし、あのケンカ自体をなかったことにしてしまえるのなら、俺が環を傷つけた言葉も、消えてなくなる」
「それ、どういう意味？」
太一は戸惑う。
高坂は制服のポケットから携帯電話を取り出すと、太一にメールの受信記録を見せた。
「俺が環からメールを受け取った日の日付と時間を見てくれ。全部同じだ」
言われて、太一も気がついた。
死者から届いたメールは、三回とも同じ日付で受信したことになっていた。――去年の二月二十三日の昼。
でも、そんなことがあるわけがない。
たとえば三回目のメールを高坂が受け取ったのは、一昨日だ。
「これって……」
「もともとの環の最後のメールが送られてきたのが、二十三日のその時間だった」
階下で誰かが誰かの名前を呼んでいる。その声が踊り場まで響いて、太一はぴくりとした。
昼休みを過ごす生徒たちの笑い声や話し声が遠く、ざわざわとした空気になって伝わってくる。

でも、ここには誰も来ない。人の来ない場所がいいと言ったのは太一なのに、薄暗い踊り場の空間がなんだか急に息苦しいものに感じられた。

高坂の声が、少し熱を帯びた。視線は相変わらず、太一を見ているようで見ていない。

「環の時間はきっと、あの日のまま止まっているんだと思う。だから何度もメールが来るんだ。去年の二月二十三日の午後四時に俺と会う約束をして、その時間にあの交差点で俺を待っている。死んでから何度も、それを繰り返しているんだ」

「――」

「もし待ち合わせの時間に俺が行って、環に会って、今度はケンカなんかしないで普通に話すことができたら。そうしたら俺が環を傷つけたことも、傷つけた言葉も、きっとなかったことになる。やりなおしができるんじゃないかと思う」

「でも、彼女はもう死んでるし」

太一は背中がすうっとまた冷たくなるのを感じた。昨日も同じように、高坂を見ていてぞっとしたのだ。理由はわからない。

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

高坂は立ち上がった。夢から覚めたみたいに、太一に向けた視線の焦点がさだまる。

そうして、低い声で言った。

「……環が待っているなら、俺は会いに行かなきゃいけない。環があの日を何度も繰り返して

いるのなら、もうこれ以上あいつを泣かせたくない」

学校から帰ると、太一は柊二郎の部屋へ行って、高坂との会話のことを話した。

「ああ、なるほどそうですか。彼、やっぱり気づいていましたか」

コタツに首まで埋もれながら、大家はもごもごと言った。

「何がですか？」

「あ、太一君。ミカンをどうぞ」

「どうも」

どうしてコタツとミカンの組み合わせって、何の話をしていても緊張感がなくなるのだろう。柊二郎と差し向かいに座ってミカンの皮をむきながら、太一は思う。

「相田環さんの時間が、あの日で止まっていることです」

思わず手を止めて、太一は柊二郎を見た。

「じゃあ、本当に？」

「はい。僕も高坂君の携帯電話の履歴を確認しましたから」

柊二郎はふにゃっと潰れたように、テーブルに顎をのせた。

「あのですね、太一君。例えば飛び降り自殺をした人が、自分が死んだことに気づかないで、幽霊になってからも何度も同じ場所から飛び降りを繰り返すことって、確かにあるんです。そ

んな霊を説得して成仏させるのも、十遠見さんやミヨシ君の仕事なわけですけれども。それと同じで、相田環さんも自分がもうこの世の人間ではないことに、きっと気づいていないのでしょう。高坂君と会って止まっていた時間を進めることができれば、彼女も納得して今いる場所から離れられるのかもしれませんが」

でも、と太一は曖昧に言った。

「彼女はあちら側の踊りヶ辻にいるんだから、高坂が会うのは無理なんじゃ……？」

「いえ。方法は多分ありますよ。むしろ今の高坂君なら、簡単なことかもしれない」

柊二郎は潰れた格好のまま、「しかし」とため息をついた。

「二人を会わせるべきか、会わせないべきか。ちょっと難しいです」

「会わせちゃいけないんですか？」

首を傾げた太一を、空栗荘の大家は目だけあげて見た。

「高坂君にとっても相田環さんにとっても、よくない結果になるかもしれません」

とはいえ会わせないわけにはいかないですよねやっぱり、と柊二郎はため息をつく。

太一には、全然わからない。よくない結果って、何だろう？

だが訊き返すより先に、柊二郎は言葉をつづけた。

「次のメールは三日後。二十三日に来ますよ」

「え、わかるんですか？」

「なぜメールが今年になってから高坂君に届くようになったのか、太一君は不思議に思いませんか？　それも一月に一回、二月に入ってからすでに二回メールが来ています。――つまり、霊の力が自分の命日にむけて少しずつ強まっている証拠なんです。力がピークに達するのは、言うまでもなく環さんの命日である二十三日です」

「そういうものなんですか？」

「ええ、そういうものです」

うなずいてから、柊二郎はよいしょっと身体を起こした。

「おせんべもありますけど、食べます？」

「いえ、いいです」

「――二十三日は、高坂君に空栗荘へ来てもらって下さい。必ず、待ち合わせ時間の四時になる前に」

煎餅を片手に、柊二郎はいつになく硬い声で言った。太一にむける眼差しも真剣だ。

「とにかく、我々で何とかフォローしてみましょう。どのみちあちら側へは、ここの玄関を通って行くしかないですし。一人で待ち合わせ場所へ行こうとはせずに、先に空栗荘へ来ること。高坂君にはしっかり伝えてください」

「はい」

「でも万が一、ひょっとして、その算段がうまくいかなかった時には。太一君、君が高坂君を

守ってあげてくださいね」
「……ええ？」
太一は困惑する。
（俺が？　守るって？　……というか、うまくいかなかった時って、何？）
「君の使命は、何が起こっても高坂君をこちら側に引き留めることです」
「あのお、大家さん」
「何でしょう」
「さっきから俺、大家さんの言っている意味がわからないんですけど」
「あー、わかりませんか」
「全然」
柊二郎は手に持っていた煎餅を、音をたてずに齧った。器用だ。その一口を飲み込んでから、言った。
「ではハッキリ言いましょう。いいですか、太一君。これは、高坂君が言うような『やりなおし』はできないことなんです。いえ、たとえできたとしても、やってはいけないことなんですよ。なぜなら――」
「いいのかい、このまま太一を関わらせて？」

太一が自分の部屋へ戻ったあと、お茶を持って来たお露さんが、湯呑みを柊二郎の前に置きながら言った。

「おや、聞こえていたんですか。さすが地獄耳」

「バカをお言いでないよ。聞こえなくても、あんたの考えることくらいはお見通しさ」

お露さんは、鼻を鳴らした。

「じゃ、理由もお見通しですね」

「だから心配しているんだ。言っただろう、あの高坂って子はマズイよ。簡単に異界との境界を越えちまうような人間は、この世に未練も執着も持っていないからね。自分を捨てちまったってかまわないと思っている輩だ」

「ここへ来たばかりの頃の太一君と似てますねえ」

「今だって太一の目は、あっち側を見ているじゃないか。そりゃ、だいぶマシになったとはいえね。クラスメートと一緒にあっちに引っ張り込まれて、戻ってこられなくなったらどうするつもりだい」

「大丈夫ですよ」

ほにゃっとした口調で応じた大家を、お露さんは呆れ顔で見る。

「あっさり言うね。その自信はどこからくるんだか」

「確かに高坂君は太一君に似ています。だからこそ、と僕は思うんですよ。太一君はまだ、自

分が本当に怖いものから目を逸らしている。無意識に逃げようとしているから、異界に目が向いてしまうんです。でもね、そろそろ気がつかなきゃいけません。自分が何を怖がっているのか、気づいても彼はもう大丈夫なはずです。――だから、高坂君のことは太一君に頼むことにしました」

「太一があのクラスメートをこっち側に引き留めることができれば、上出来だけどね。荒療治ってのは、失敗したら目もあてられないよ」

お露さんは疑わしげに、顔をしかめた。どうしても心配であるらしい。

柊二郎は湯呑みを口に運ぶと、美味そうにずずっと茶を飲んだ。

「太一君は、他人の信頼や好意を無視することのできない子です。そして僕は、彼を信じていますから」

それにね、とつけ加える。

「太一君は高坂君のことが気になっています。それは、他の人間にも目を向けるようになったってことじゃないでしょうか。彼はまた一歩、前進したんだと思いますよ」

アタシだってあの子を信じていないわけじゃない、と気まずそうにむにゃむにゃ言ってから、お露さんは口調をあらためた。

「ところであんた、今回も『ほだされた』んじゃなかろうね？」

「はて。何のことでしょ」

「とぼけるんじゃない。あんたは、誰かの会いたいって気持ちに滅法弱いからね。未練がましいのもほどほどにしな」

「……うう、一言もありません」

叱りつけるように言われて、柊二郎は情けない顔になる。

「それはおいといても、相田環さんをこのままにしておくわけにはいかないでしょう。自分の死に気づいていない霊は哀れです。異界に迷い込んでしまっているのなら、なおのこと放置はできません」

「古都子が辻の場所を探して来たら、ミヨシか十遠見をやって成仏させる……というわけには、いかないんだろうね」

ええ、と柊二郎はうなずいた。

「それでは高坂君の問題が残ってしまいます。彼の時間も、環さんが事故に遭った日で止まっている。自分で自分を、彼女が亡くなった日に縛りつけてしまったんです」

「まったく、子供ってのは手がかかるよ」

お露さんは深々とため息をついた。

「思春期を侮っちゃいけません。子供は他人を愛するのも憎むのも傷つくのも、大人よりよほど真剣です。大人は自分を騙すことができますが、子供にはできませんからね」

と、真顔で言ってから、柊二郎はぽしぽしと頭をかいた。

「……なんてセリフを口にすると、自分も年を取ったなあとしみじみ思いますよ。最近は体力もがっつり落ちましたし」

お露さんはふんと盛大に鼻を鳴らすと、空になった湯呑みを大家から取り上げた。コタツに埋もれている彼を見下ろして、容赦なく言い放った。

「運動不足なんだよ。あんたときたら、客が来た時以外は、寝てるかコタツにへばりついてるかのどっちかじゃないか。たまには早起きして、ジョギングでもするこったね」

「この寒いのにそんなことして、肺炎で死んだらどうするんですか～」

「安心しな。三途の川の渡し守に話をつけて、あんたがあの世にいく前に簀巻きにして渡し舟から蹴り落として、そのままどんぶらこっこと現世へ戻してくれるよう頼んでおくから」

さすが、その昔三途の川の渡し守を半殺しにしたという噂のお露さんが言うと、かけらも冗談には聞こえなかった。

7

週末をはさんで、二月二十三日は月曜日だった。

（あれれ、阿川君がいない……!?）

その日も文芸部の用事で、昼休みのチャイムとともにお弁当を持って部室へ行っていた栄奈

だが、教室へ戻ってみると太一の姿がないのでくるくるとあたりを見回した。
「阿川だったらさっき、高坂と一緒にどこかへ行ったよ」
入り口近くで机を囲んでおしゃべりしていた仲良しの女子が、くすくす笑いながら栄奈に告げた。
「あ、そなんだ……」
「残念でしたー。でも最近、なーんかあの二人って仲がいいよね」
「うん。二限目の休み時間にも、廊下で二人で何か話をしてたし。栄奈、何か聞いてない？」
「え、えっとえっと、……聞くって何を？」
自分の席に腰を下ろした栄奈に、興味津々という顔で女の子たちが詰め寄る。
「だからぁ、どうして仲良くなったのかとか、二人でいつもこっそり何を話してるのかとか」
「し、知らないよ」
困って栄奈が言うと、みんないっせいに「えー」とがっかりした声をあげた。
（私だって詳しいことは知らないもん。阿川君は何も言わないし）
高坂が空栗荘の大家に相談事があったらしいことは、知っている。太一に話しかけたのが、そのためだというのもわかる。
それでもって、これをきっかけに太一と高坂が友達になればいいなと、栄奈は思う。思うのだが。

（ううぅ、なんか阿川君をとられちゃった感がひしひしと……ってダメだってば、阿川君に友達ができるのはいいことなんだから！　……で、でもちょっと寂し……ううん、そうじゃなくて、二人でどんな話してるのかな……じゃなくて、阿川君には絶対、男子の友達だって必要なんだから……！）

頭を抱えてジタバタしている采奈の様子に、その場にいた女子は顔を見合わせた。

「何を考えているか、手に取るようにわかるっていうか……」

「こんだけわかりやすいのに、なーんで阿川にだけは伝わらないのかねえ。不憫だ……」

その頃太一は、屋上に通じる階段の踊り場にいた。先日と同じように手すりにもたれかかり、高坂も同じ格好で段に腰を下ろしている。

（俺、何やってんだろ）

高坂を守れと言われたけど、いざという時に誰かを守ることなんて、自分にはできないと太一は思う。去年の盆祭りに采奈が首無し包丁男に襲われた時には、運良く手元に御札があったから何とかなったが、今回は素手だ。

（絶対に無理。……でも無理っていうなら、この頃俺、いろんなことで無理してる気がするんだけど）

土曜日に、柊二郎の言葉を伝えるために高坂の家に電話をした。でも、本当いうと太一は電

話が苦手だ。目の前にいる相手とさえ上手くしゃべれないのに、耳で聞いた声や口調だけで相手の感情を察して話をあわせるのは、もっと無理だ。

電話口に本人が直接出たのでホッとしたけど、案の定、上手く用件を伝えることができたかどうか自信がない。それで今日、午前中の休み時間にもう一度同じことを高坂に確認して、昼休みの今は高坂と一緒にここにいる。二回とも太一のほうから声をかけたことだから、きっとまた目立っただろうと思う。

自分がどうしてここまで高坂につきあっているのか、考えるとすごく不思議だ。

そんなことを太一がぼんやりと思っていた時、高坂が手に握っていた携帯電話が鳴った。

メールの着信音。

ぱちんと開き、画面を確認して、

「環から」

高坂は短く告げた。

「同じ内容？」

「ああ」

「それ、返信したらどうなるの？」

ふと思いついて太一は訊ねたが、高坂は首を振った。

「やってみたけど、誰にも届かなかった」

届いても怖いけど。

高坂は携帯電話をポケットにしまうと、太一を見上げた。

「四時までに空栗荘に着いてないといけないとしたら、学校が終わってからだと間に合ってもぎりぎりだな」

うん、と太一はうなずく。時間を逆算して、例えば途中でバスが遅れたりしたらちょっとヤバイかもと思っていたのだ。

「俺は五限目が終わったら早退する。先に空栗荘へ行っているから、阿川はあとから来ればいい。それならクラスの連中によけいな詮索もされないだろう」

太一がクラスメートの目を意識している……ことに気がついていたらしい。とっくにそう決めていたように、高坂は平坦な声で言った。

太一は彼を見つめた。なんとなく、ため息が出た。

柊二郎が言った「算段が上手くいかなかった時」って、どんな時なのだろう。誰かを守るというのは、どうすればいいんだろう?

――君も高坂君のことを気をつけていてあげてください。

太一はもう一度ため息をついて、言った。

「俺も一緒に行くよ。五限目が終わったら早退するから」

なんかもうどうにでもなれという気分で、五限目の授業が終わると太一はカバンを摑んで足早に教室を出た。校門で待っていると、少し経って高坂も出てきた。

「つきあわせて悪い」

高坂がぽそりと言ったあとは、先日のように何を話すでもなく二人で歩き出す。

だが駅に着いた時に、予想もしていなかった事態が起こった。

電車が来ない。

繰り返しホームに流れるアナウンスによると、幾つか先の駅で踏切が故障したために、電車がすべて緊急停止したのだという。

(嘘だろ。どうして、こんな時に)

仕方がないのでベンチに座っていると、駅員に事情を訊ねにいった高坂が戻ってきた。

「どれくらいかかるって?」

訊いた太一に、高坂は肩をすくめて、

「わからない。けど、当分動かないらしい」

このままホームで足止めでは、早退してきた意味がない。ちょっと考えて、太一は立ち上がった。

「大家さんに電話してくる」

「だったら俺の携帯を使えばいい」

しかし取り出した携帯電話を見て、高坂は顔をしかめた。
「圏外になってる。そんなはずはないんだが」
「いいよ。売店の横に公衆電話があったから」
しかし公衆電話から何度かけても、空栗荘には繋がらなかった。呼び出し音は鳴りつづけているのに、誰も出ないのだ。
（みんないないのかな）
お露さんは買い物に出ていて、柊二郎は寝ていて、他の住人は一人も帰っていないとか？　まあタカハシさんは、いても電話には出ないだろうが……。
何かヘンだ、と太一は思った。
電車が止まって、空栗荘とは連絡がつかない。なんだか普通でないことが起こっている気がする。
結局、電車が動き出したのはそれから三十分以上も経ってからのことだった。
これでバスまで来なかったらどうしようと不安だったけれども、そんなことはなく、定刻より数分遅れただけで賽河原町行きのバスが停留所に到着した。
この時点ですでに、午後三時をまわっている。本当なら、とっくに空栗荘に着いていたはずの時間だ。
バスに乗れば、空栗荘の最寄りの停留所まで約十五分。バス停から少し急ぐとして、なんと

か四時までに、三十分くらいの余裕をみて戻れそうだ。太一はホッとした。
バスが二丁目の交差点にさしかかった。赤信号で停車する。
（そういえば、あっち側の辻の場所ってわかったのかな？）
古都子とは団欒室で話をしたあと、一度も会っていない。休日も彼女は工房へ通っているし、食事時間もずれていたのか、顔をあわせる機会がなかったのだ。他の住人にしてもそれはよくあることで、タイミングがあわなければ何日も姿を見かけない、ということも珍しくはない。
信号が変わって、バスが動き出した。
高坂が手を伸ばして、降車ボタンを押した。
「――高坂？」
驚く太一に、高坂は低く言った。
「ごめん。俺はここで降りる。阿川は一人で帰ってくれ」
「何を言ってんだよ？　先に空栗荘へ行かないと――」
「環がいたんだ」
「え……？」
太一は目を瞬かせた。
「信号のところに立っていた。環だった。間違いない」
きっぱりと高坂は言った。怖いくらい表情のない顔で。

「初めて、見えたんだ」
（そんなはず、ない……）
こっち側の、人間の世界の交差点に、相田環はいない。彼女は異界の辻にいるのだから。
（それに、まだ待ち合わせの時間じゃないし）
慌てて腕時計に目をやって、太一は愕然とした。
四時――五分前。
何度、目をこらしても。
（嘘だろ、そんな）
バスに乗って、まだ十分も経っていないはずだ。なのになぜ？　いつの間にこんな時間に？
どうしてこんなことが起こるんだ……!?
バスが停車した。扉が開く。高坂は身をひるがえした。
「待てよ、高坂。行っちゃダメだ！　――高坂！」
腕を摑んで引き留めなければと思ったのに、手を伸ばすことを太一は一瞬ためらい、その一瞬でもう相手に手が届かなかった。
高坂の姿がバスの外へ消える。
とっさにあとを追って、太一は転がるようにバスを降りた。
遅い午後の金色の陽射しに目を射られて、思わず目をつぶった。背後で扉が閉まり、バスが

走り去る音がした。

それきりふっつりと、すべての音が消える。

太一はゆっくりと目を開けた。

しばらくそのまま立ち竦んで、……ああ前にもこんなことがあったなと、思った。

見知らぬ風景が、目の前に広がっていた。

直前までバスの窓から見えていた建物も、人の往来も、行き交う車も消えていた。夕刻に近い空は黄味の強い金色で、縁をほのかに紅に透かした雲がひたりと貼りついたように浮かんでいる。見上げれば眩しく、反対に地上は妙に薄暗い。

踏んでいるのは舗装された道路ではなく、埃っぽく乾いた土だ。白い土の路が、先まで伸びている。

路の両脇には、ずっと昔に建てられたような古めかしい木造の家屋と板塀。どの家も中は暗く、ひとけなくしんとしていた。空の色との対比でそれらはところどころ影に沈んでいっそう黒く、寂れた佇まいに見える。板塀の向こうでは、灰色の骨のように朽ちた木々が、曲がりくねった枝を空に伸ばしていた。

ここは人間の世界ではない。けれども異界ではあっても、妖怪の町ではない。妖怪の町ならば、もっと賑やかで活気がある。

まるで、一枚の古い写真の中にでも入り込んだみたいだった。セピア色というのだろうか。全体的に風景が飴色にくすんでいる。

数メートル先に、太一と同じように立ち尽くす高坂の背中が見えた。黒い学生服とベージュのコートの色彩が、このセピアの異界の景色の中に、違和感なく嵌め込まれている。自分もきっと同じように見えるのだろうと、太一は思う。

声をかけるより先に、高坂は足を踏み出した。白い路を歩き出す。太一は慌てて、足を速めて彼に追いついた。

「高坂」

返事はない。太一はその腕を摑んだ。

「待てってば」

それで初めて気づいたように、高坂は彼を見ると、顎で前方をしゃくった。

「あっちが交差点だ。早く行かないと」

「――あのさ、この風景を見て何も思わないわけ？　おかしいとか、ここはどこだとか」

高坂の反応に、太一は戸惑う。

バスを降りたとたんに見たこともない場所にいたのだから、驚かないはずがない。何も知らずに異界に入り込んだ人間が、少なくとも普通の感覚を持ち合わせているのなら、平然としていられるわけがないのだ。

だが高坂は、面倒臭そうに太一の手を振り解くと、言った。
「どうでもいい」
「――」
太一は小さく息を呑む。
（ヘンだろ、そんなの。どうでもいいなんて……）
そう思ってから、ハッとした。
自分も同じことを考えた。一番最初に空栗荘を訪れた時。バスを降りたらなぜか、妖怪の町にいた時に。
怖いとも思わなかったし、たいして驚きもしなかった。
いろんなことがどうでもよかった。関係ないと思っていた。そして、そんなふうに何も感じない自分は、心というものの大切な部分が欠けてしまっている人間なのだから、それが当たり前だと納得していた。
でも今、こうして高坂を見ていると、その反応がどれほど異様なものかがわかる。
（どうしたらいいんだろう？）
ふたたび歩き出した高坂を、もう一度引き戻すべきかどうか迷っていると、突然、携帯電話が鳴った。こんな場所にものすごくそぐわない呼び出し音が響く。誰かが電話をかけてきたらしい。

「高坂、電話」
出るつもりがないのか、太一が言うと、高坂はそれをポケットから抜き取って彼に押しつけた。しょうがないから、
「もしもし」
『あああ太一君！　今、どこにいるんですかぁ⁉』
おそるおそる電話に出た太一の耳に、珍しく慌てた柊二郎の声が飛び込んできた。
「えっとあの、それが……」
早退したけど電車が止まって、と自分たちの身に起こったことを手短に説明する。
『や、しまった。そっちで裏と表が繋がってしまいましたか』
「ここ、どこですか？」
『裏側の踊りヶ辻です』
やっぱり、と太一は思った。
「こんなところでも、携帯の電波って届くんですか？」
それ以前に、柊二郎は高坂の携帯の番号を知っていたのだろうか。
『気合いで頑張りました』
それはすごい。
『しかし二丁目交差点から繋がってしまうとは、予想していたよりもずっと、霊の呼び寄せる

力が強かったようです。さて、どうしたものか』
「すみません。俺、高坂を引き留めろと言われていたのに、役に立たなくて」
『いえ、それは大丈夫です。君はまだいくらでも役に立ちます。とにかくまずは落ち着くことです、太一君！』
「落ち着いてますけど」
『古都子さんが辻の場所を探してくれましたから、僕もこれからそちらへ……できるだけ、いそ……で、だから君も……さい』
急に声が遠くなった。気合いも限界のようだ。
「ここから抜け出す方法って、ないんですか⁉」
思わず太一は、携帯電話を握って声を張り上げた。
『……風が……』
「え？」
『風が吹きます。もうじき……だから……』
ふつっとそれきり、声が途切れた。
（風？　どういう意味？）
少し先を行く高坂の背中を見つめて歩きながら、太一は唇を噛んだ。
これでは戻り方もわからない。もしここが裏の賽河原町のどこかだとして、この路を出る

ことができたとして、それでも空栗荘（からくりそう）へ向かうには妖怪の町の中を通っていくことになる。高坂に何と説明すればいいのだろう。

（大家さんが来るって言ってるし、待ってたほうがいいのかな）

でも、きっと間に合わない。高坂を止められない。彼は相田環に会うことしか考えていないのだ。太一が何を言っても、耳を貸さないにきまっている。

一体どうすればいいんだろう。異界の側に来て、こんなに心細い思いをするのは初めてだ。自分一人なら、きっとどうとも思わなかったはずなのに。

（相田環に会ったら、高坂は）

――今度はケンカなんかしないで普通に話すことができたら。そうしたら俺（おれ）が環を傷つけたことも、傷つけた言葉も、きっとなかったことになる。

言葉は人を傷つけると高坂は言った。

「あ……」

ちりっと胸の中に何かが刺さった。

（だったら）

太一の耳にこびりついたままの、今も消えない、あの言葉は。

――触らないで。

傷ついたのだろうか。母親のあの言葉に傷ついたから、あの時自分は、あんなに怖かったの

だろうか。

もし、そうならば。歩きながら、歯を食いしばって自分の足先を見つめる。

（なかったことになんか……俺は……）

高坂が立ち止まった。

太一は顔をあげる。

白い路が少し先で交差していた。辻だ。——踊りヶ辻。

金色の空。路の両側に連なる薄暗い家屋。灰色にねじくれた樹木の枝。

くすんだセピア色の風景の中、車も通っていないのになぜか人間の世界の交差点と同じように信号機が立っていて、赤青黄と点滅を繰り返しているのが、ものすごく違和感があった。

辻に人影が見えた。こちらに気づいて、手を振る。

ブレザーの制服を着た、ポニーテールの少女。嬉しそうに笑っている。

「……環」

高坂が、呻くみたいに呟いた。

遅いよ、ヒノトはいつも待ち合わせに遅れるんだもん。

少女は高坂に向かって、ふくれっ面をしてみせた。太一には目を向けない。もしかしたら、太一のことは見えていないのかもしれない。

「ごめん」と、少女に向かって高坂は言った。「遅くなって、ごめん」
「すごく待ったんだからね。罰として、今日はヒノトが《みはま》の特製パフェをおごること」
「あんみつじゃなくて？」
「うん。パフェがいい。新作の抹茶パフェ」
いつの間にかふくれっ面が消えて、相田環はクスクスと笑った。高坂に手を差し伸べる。
「ね、早く。行こ」
「――行っちゃダメだ、高坂」
高坂が彼女に向かって足を踏み出したのを見て、太一はとっさに声をあげた。
「相田環はもう、死んでるんだ」
返事はない。
「ダメなんだ。『やりなおし』なんか、できないんだ。もしそんなことをしたら、彼女は死んだことに気がつかないで、どこへも行けないって大家さんが言ってた。もうずっと、ここを離れることができなくなるんだって」
――これは、高坂君が言うような『やりなおし』はできないことなんです。いえ、たとえできたとしても、やってはいけないことなんですよ。なぜなら、
なぜなら、これはもう起こってしまったことだから。

やりなおそうとするのは、彼女を偽ることだから。

——偽れば、彼女は本当のことを思い出すことができません。なぜ自分が死んだかもわからないまま、いつまでも異界の辻で迷いつづけることになる。成仏することもできず、ずっと高坂君を待ちつづけるでしょう。それは、とても悲しいことです。

——乗り越えて、先へ進むしかないことなんですよ。

だって、高坂君は生きているんですから。と、柊二郎は言った。

環の手を摑もうとしていた高坂は、ぴくりと動きを止めた。太一を振り返る。

「どこへも行けなくてもいい。俺が環と一緒に、ここにいる。これからずっと」

このまま二人でここに残ると、高坂は言った。

その淡々とした表情を見た時に、

(ああ……そうか)

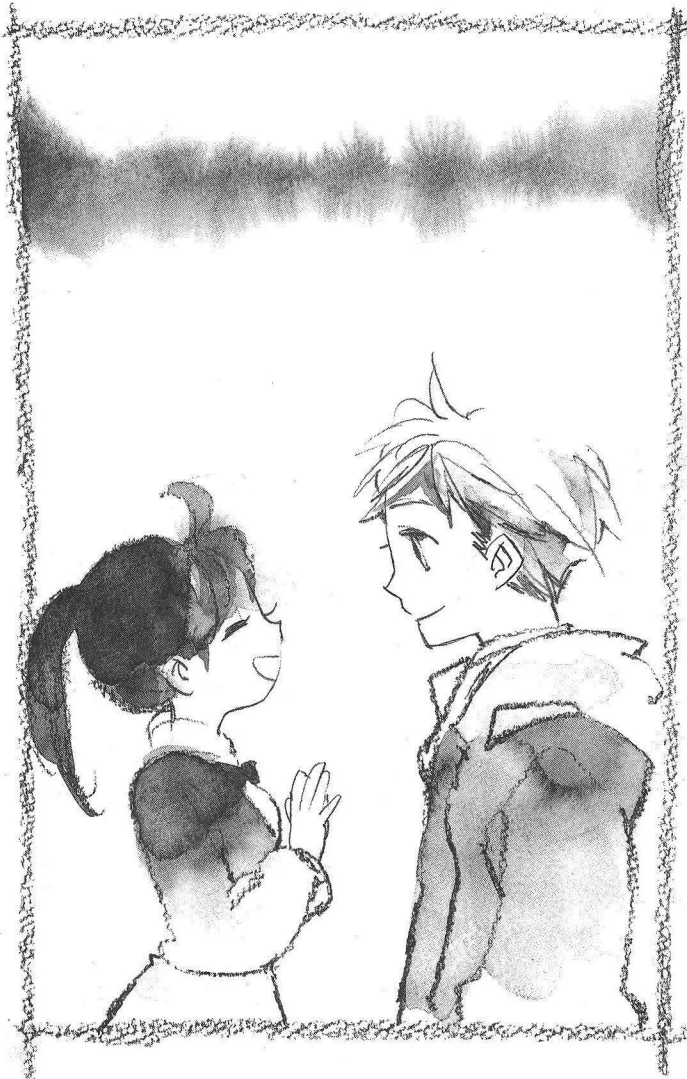
太一はようやく気づいた。

高坂を見ていて、時おりぞっとした。それは、高坂の心がとっくに、人の側の世界から離れてしまっているのがわかったからだ。

「学校とか家とか家族とか、どうすんだよ？　こんなところにいられるわけないだろ」

「どうでもいい、そんなもの」

「いいわけないだろ⁉」



太一は大きく息を吐く。そしてまた吸う。心臓が激しく波打って、頭の中がカッカしていた。無性に腹が立って、悲しい。

考えるより先に言葉が、堰を切ったように口をついて出た。

「自分が苦しくて、もう後悔するのが嫌だから、なかったことにしようっていうのか？　高坂が彼女を傷つけたのも泣かせたのも、それで他人と話すのが怖くなったのも、全部本当のことだろっ。自分がやったことを帳消しにしたいなんて、そんなの虫がよすぎるしずるいし、勝手すぎるよ！　高坂が言っているのは、自分のことだけだ。自分さえ楽になれれば、それでいいのかよ⁉」

――お母さん？

――触らないで。あんたなんか知らない。

もし母が今、あの時のことをやりなおしたいと思っていても、忘れたいと願っていても、太一には今さら「なかったこと」になどできない。

「ばあちゃんが言ったんだ。誰かを好きって思うのは、相手を縛ることと違うって。その人が気持ちのいいあったかい場所にいつもいて、笑っていてくれればいいって思うことだって。俺、わかんないけど、意味わかんなかったけど、でも高坂が彼女のことをそんなふうに思ってないってことはわかるよ」

何だろう。何なんだろう、これは。

一息に叫んで、太一は肩で息をついた。いつしか憤りは消えて、ただもう悲しかった。いつも逃げたいと思っていた。居心地のいい場所に逃げ込みたいと思っていた。空栗荘に。異界に。

でもそれはダメだと、いけないことだと太一を止める人たちがいる。今、こうして太一自身が高坂を引き留めようとしているように。

「阿川？」

「ここは、いていい場所じゃないんだ。高坂も、彼女も！」

高坂の表情に、初めて感情がよぎった。戸惑うように、太一を見た。

「なかったことになんか、ならないんだよ！　ダメなんだ、嘘ついたって、それで高坂の苦しいのや悲しいのがなくなったって、彼女にとってはなかったことになんか……！」

ヒノト、と環が呼ぶ。不思議そうに。

「どうしたの？　早く行こうよ」

高坂は彼女を振り返った。

「環。俺――」

「ヘンなの。今日は何かおかしいよ、ヒノト。違う人みたい」

「違う？」

「うん。いつもみたいに笑わないし、しゃべらないし。なんか暗いよ。どうかした？」

「――」

高坂は彼女を見つめて、顔を歪めた。笑顔を見せようとして、でも笑えない。そんな表情だ。

ややあって、そうかと低く呟いた。

「もう、一年経ったんだ。一年分、違う人だよな……」

「ヒノト？」

高坂はうなずいた。一度俯いて、そうして顔を上げた。

「――今度の日曜だけどさ、一緒に水族館に行くって言ってただろ。悪いけどそれ、キャンセルな。俺、行けないから」

まるで別人のような、いかにも軽い口調だ。

え、と環の顔がたちまち曇る。

「どうして？　ひどいよ、こないだもダメだって言ったじゃない。次は絶対に行くって約束してたのに」

「仕方ないだろ。部活があるんだから」

「だってもう三年で引退したから、関係ないじゃん」

「卒業までは後輩の指導をしようってことになってんだよ。いいだろ、べつに。俺たち、学校で会ってんだし。だいたい、毎日顔を見てんのに、なんで放課後にまで待ち合わせしなきゃなんないんだよ」

「だってそれは、ヒノトが教室ではあまり話しかけるなって言うから……」
「クラスのヤツらにいろいろ言われてひやかされるから、面倒なんだよ。恥ずかしいし、鬱陶しいし」
「ひどい……！」
環の顔がさっと青ざめた。
「わたしがヒノトと一緒にいると、そんなに恥ずかしくて鬱陶しいの？」
声が冷たく尖る。
「そんなこと言ってないだろ」
「言ってるよ。――わたしたち別々の高校に行くから、卒業したらもう今みたいに毎日は会えないんだよ？　だから今のうちに、ヒノトといっぱい会っていっぱい話をしたいのに」
「だからこうやって、環のメールがきたら、つきあってやってるだろ」
高坂は突き放す。
「もういい」
環は高坂を睨むと、ぷいと横を向いた。
「日曜日は、芦川君と水族館に行くから」
「芦川？　何だよ、それ」
「芦川君、わたしのこと好きだって。ヒノトはやめて、自分とつきあわないかって言われた」

「――へえ。じゃあ、芦川と行けよ。勝手にすれば」
環は驚いたように高坂を見た。今にも泣きそうな顔になる。それを横目で見ながら、高坂は容赦なく言った。
「いい加減に、自分の我が儘で他人を振り回すのはやめろよな。水族館だとか映画とか遊園地とか勝手に決めて、俺が行かないって言ったら怒って。自分の都合ばっかりじゃないか。そういうとこ直さないと、芦川にも嫌われるぞ」
「……ヒノト……ひどいよ」
「うるさいな。知るかよ。俺、もう帰るから」
ついに環の目に涙があふれて、ぽろぽろとこぼれ落ちた。
泣きながら、震える声を絞るように叫んだ。
「ヒノトなんか……ヒノトなんか大っ嫌い！」
その瞬間。ふうっと空気の色が変わった。
間近な日没を告げるように、金色の空がわずか、翳る。紅色に染まった雲が、ゆっくりと流れた。
止まっていた異界の辻の時間が、動き始めた。
俯いていた環が、顔を上げた。たった今まで頬を濡らしていた涙の筋が、乾いて消えている。

「……思い出したか？」
高坂は静かに問いかけた。
彼を一心に見上げ、環は少し悲しそうな顔でうなずいた。
「あの時わたし、ヒノトがもしかしたら戻って来てくれるかもしれないって思って、しばらく待ってた。でも涙が止まらなくて、頭がぼうっとしちゃって、走ってくる車を全然見てなかったの」
「ごめんな」
「わたし、もういないんだね」
「……本当に、ごめん」
空はさらに翳ってゆく。セピア色に染まっていた空気が、青い黄昏（たそがれ）の色を帯び始める。
信号機だけが時間の流れに知らん顔で、青、黄、赤と光の点滅を繰り返した。
「ヒノトともう、会えないんだ……」
ごめん、と高坂は言う。許してくれとは言わず、その言葉だけを何度も口にした。
「部活なんか休んだってかまわなかったんだ。環のことを我が儘だなんて本気で思ったことは、なかったんだ。芦川と一緒に行くって言われて、俺はつまらない意地を張ったんだ。ごめん。……ごめん」
その高坂を、太一は少し離れて見ていた。相田環が死んでから、どれだけの「ごめん」を高

坂は自分の中で言いつづけてきたのだろう。

「明日も明後日も、いつも会えると思っていたんだ。だから環のことをちっとも大切にしなかった。だから、平気で泣かせて……それで……」

高坂は腕を伸ばすと、環の肩を摑んだ。引き寄せて、そのままそっと壊れもののように彼女を胸に抱え込んだ。

「ごめんね、ヒノト」

「環？」

「そんなにいっぱい、ごめんって思わせてごめんね。……ヒノトは悪くないよ。わたしも、明日また会えるって思ってた。だからあの時、嘘ついたの」

高坂の腕の中で、相田環の姿は、少しづつ存在感を失い始めていた。黄昏に透き通るように、儚くなっていく。

「芦川君がわたしのこと好きだなんて、嘘。『つきあわない？』って一度言われたけど、芦川君は女子みんなにそう言ってるから。冗談で言ってるだけ」

「……うん」

「会いに来てくれて、ありがとう。わたしがメールを送ったら、ヒノトはいつもちゃんと来てくれたよね」

どんどん透き通っていく。環の声も、姿も。高坂にしがみついている手が、輪郭を失ってふ

わりと空気に溶けた。
「嫌いって言ったのも、嘘だよ。――大好き」
そして。彼女が声にした、その言葉だけが最後に残った。
「ヒノト、大好き」
人の魂は何になるのだっただろう。
夏には蛍に。春には蝶に。ミヨシが言っていた。鳥や魚になることもあるのだと、あとから教えてもらった。
太一は空を見上げた。
昏い金色に染まった異界の夕暮れの空に、淡い光を放つ一匹の蝶が軽やかに舞い上がって、消えていった。

「高坂」
何度もためらって、ようやく太一が声をかけたのは、空の縁にまだ黄金の糸のような輝きを残しながらも、夜の気配があたりをひたひたと満たし始めた頃だった。
返事はないかと思ったけど、こちらに背中を向けて佇んでいた高坂は、我に返ったように振り返った。
「悪いな。結局つきあわせた」

空気はしんと冷たくなって、吐く息が白い。
「それは、べつに」
太一は曖昧に首を振る。
(これでよかったのかな)
高坂は人間の側に残った。だから多分、柊二郎が言っていたのはこういうことだったのだろうけど。
「俺は、環が死んでから何度も、あのケンカのことを思い出した。一言一句、忘れないように。忘れるなんて環は許してくれないと思ったから、自分が言った言葉を、全部覚えていた」
「――」
傷つけた言葉を、もう一度繰り返さなければならなかった。彼女を逝かせるために。
そういうのはとても辛くて、そのぶんだけきっと高坂もまた傷ついたんだろうと、太一は思う。
こんな時は何て言えばいいんだろう。高坂は何と言ってほしいんだろう。とても難しい。
「――ありがとう」
聞こえた言葉に、太一は目を瞬かせて、高坂を凝視する。
高坂は笑っているように見えた。
「阿川って、なんかいろいろスゴイな」

「え？」
「あんなふうに、阿川も怒鳴るんだな。そういうイメージなかったから、ちょっと驚いた」
「俺は……」
自分でも少し驚いている。自分の中にあんな『言葉』があったことに。
それで、と高坂は周囲を見回した。
「どこなんだ、ここ？」
ものすごく今さらな質問に太一が首を竦めた時だった。
ふわりと、あたりに柔らかな光が降った。
夜の藍色に染まった空に、月が昇る。紗布を被ったように雲の裾をひく、大きな丸い朧月だ。
同時に、路の両側に朽ちたように黒々と連なっていた家屋の軒下や窓の下に、いっせいに光が灯って、よく見るとそれらはすべて火をいれた提灯だった。
塀の向こうの木々がざわざわと枝を鳴らす。
（なんだ、これ？）
それまで冷たく凍っていた空気が、いきなり浮き立つように光と音に彩られてざわめいていた。まるで何かのはじまりの合図みたいに。
太一はぽかんとして、その光景を眺める。
ふいに、彼を呼ぶ声がした。

「太一――――！」
振り向くと、路の向こうから跳ねるようにこちらに駆けてくる小さな影があった。
「アカネ⁉」
「太一、太一！　風が吹くよ！」
きゃあと笑い声をあげて、駆け寄った付喪の少女は、太一に飛びついた。
「その子は？」
怪訝そうな高坂に、「ええと、空栗荘に住んでいる子」と慌ててごまかしてから、太一は首を傾げた。
「どうして来たんだ？　大家さんは？」
「風が吹くの！　風が吹くから早く太一に知らせてって、柊二郎が言ったの！」
「風って？」
そういえばさっき、柊二郎がそんなことを言っていた。
「あのねあのね、アカネは知ってるよ。春の風なの。はじまりとおわりの風なんだよ！」
太一の腹のあたりにセミのようにしがみついたまま、アカネは嬉しそうに笑う。
「柊二郎は、来られないの。身体が入らなくて、足を突っ込んだけど通れなくって、だからアカネが来たんだよ。アカネは壺に入れるから」
何のことやらさっぱりである。ともかく大家が来られなくて、代わりにアカネが来たことだ

けわかった。

「ええと、それでさ。春の風？　風が吹くと何が――」

風が吹いた。

身を凍てつかせる鋭い北風ではない。柔らかく、水気を帯びて、命の目覚めを促す東の風。

路の向こうから吹き込んできた風は、まるで笑うような音をたてて、駆け抜けてゆく。いや、本当に笑っている。クスクスとしのぶような声が太一の耳元でくすぐったく弾け、大勢が高らかに楽しげに笑う声が提灯や枝を揺らしながら通り過ぎる。

生命は春には笑い、夏には滴り、秋に粧い、冬に眠る。

だから、春を告げる風は笑うのだ。

アカネは太一から離れてぴょんと地面に降りると、彼の手を摑んだ。太一を見上げて、ニコっとした。

「帰ろ、太一」

「え……」

「風はね、あっちこっちの世界に繋がっているんだよ。風はどこにでも吹くんだよ。だから、この風についていけば帰れるの」

アカネに手を引かれ、太一は高坂と一緒に東風の吹く先へと向かった。

頭上に朧月を、家々に吊された提灯の踊るように揺れる炎を両側に見ながら、異界の路を足早に歩く。

風は蜘蛛の糸にも似た無数の細い光の線を描き、波となってうねったかと思えばところどころで渦巻いて、木々の枝を搦め取る。とたんに灰色にくすんでいた枝は、息を吹き返したように若い芽を伸ばし、花の蕾を膨らませた。

「どう思う、これ？」

高坂が無言でいるのが気になって、太一が訊ねると、

「驚く」

肩を竦めて、高坂は答えた。

「でも、頭の中が麻痺しているのかもな。綺麗だとも思う」

「……うん」

確かに綺麗だ。異界の光景は、どうしていつもこんなに不思議で妖しくて美しいのだろう。

「阿川はどう思う？」

逆に訊かれて、太一はちょっと考えた。

「花咲かじいさんみたいだ。あそこの枝なんて、もう花が咲いてるし」

真面目に言ったのに、高坂は「ヘンなヤツだな」とさもおかしいことを聞いたように笑った。

そうしてしばらく行くと、四つ辻でもないのにまた信号が立っていた。そのまま行き過ぎよ

うとすると、
「ダメなの、赤信号だもん。危ないから渡っちゃいけないの」
アカネが手を引っぱった。
「でも……」
一本路だし自分たちの他に誰もいないのだし、だいたいこんなところに信号機があることのほうが、謎だ。
なのにアカネが「赤は止まれだもん」と言い張るから、仕方なしにその場で足を止めて待つことにした。
すいぶん待たされてから、信号はようやく青になった。
アカネが跳ねるように走り出す。後を追って一歩、踏み出したとたん。
ゴッと強い風が吹き抜けた。空気に頬を叩かれ、思わず太一は目をつぶる。風の笑い声が通り過ぎたあとに、いっせいに音が押し寄せた。
車の音。人の声。様々な雑音。
目を開けると、見たことのある町の風景の中にいた。硬いアスファルトの道路と、建物や店から漏れる照明。騒々しくあふれる日常の音に目を瞬かせて、太一は傍らのアカネと高坂を振り返る。
（ここ……）

目の前を、バスが走りすぎた。
そこは賽河原町二丁目の交差点だった。

8

あとで聞いたところによれば、あちら側の踊り子辻は、妖怪の町の中に出現していた。もっと言えば、『一銭玩具屋』という駄菓子屋の店の前に置いてあった壺の中に、だ。
「だから壺だって説明したのに、柊さんたらちっとも聞いていないんだから」
古都子が文句を言うと、柊二郎は情けない顔で頭をかいたものだ。
「まさかあんなに小さな壺だとは、思わなかったんですよ～」
「そのこともちゃんと言いました。アカネちゃんを連れて行って、本当によかったわ」
太一の身に起こった異変を知って、柊二郎と古都子が急いで妖怪の町へ赴いたまではよかったが、駄菓子屋に到着してみると当の壺は、それこそ小さな子供が潜り込めるほどの大きさしかなかった。
柊二郎では片足を突っ込むのがやっとで、思いあまって頭から壺をかぶろうとしたところを、駄菓子屋の主人である兎角に「阿呆なことはやめるがよろし」と呆れて止められたのだという。
というわけで、その事態を予測していた古都子が、アカネを壺の中に入れて太一のもとによ

こしたという顛末だった。

「こうなるとむしろ、二丁目の交差点であちら側の辻と繋がってくれて、よかったってことです。だって高坂君を壺のところまで連れて行って、中に押し込むなんて無理でしたからねぇ。あやうく環さんとも会えなくなるところでした」

と、柊二郎はしみじみと言ったものである。

ところで踊りヶ辻から戻ったあと、太一は風邪をひいてしまい、翌日から二日間寝込む羽目になった。

「やれやれ、言わんこっちゃない。春の風には気をつけなきゃいけないんだよ。風が邪って書いて風邪なんだからね」

お露さんはぶつぶつ言いながら、おかゆやうどんを作ってくれたり、リンゴをむいてくれたり、特製の苦い煎じ薬を飲ませてくれたりと、まめまめしく世話を焼いてくれた。

三日目には熱も下がったので、学校へ行った。いつものように休み時間に教室の窓から外を眺めていて、校庭の風景が少しだけ違うことに気がついた。

梅が咲いている。

常緑樹の緑や椿の紅といった冬の鋭い色彩の中に、春を告げる淡い色が芽吹きはじめていた。異界の辻で見た、光の糸がふわりふわりと冬枯れの枝に絡まっていく光景をぼうっと思い出

していると、傍らから声をかけられた。
「風邪、大丈夫か？」
高坂だ。
「うん。まだ少し喉が痛いけど」
「和泉が心配してた」
「うん」
あとで采奈から、休んでいた間のノートを借りようと太一は思った。
「高坂は平気？」
「ああ、俺はべつにどうもない」
基礎体力が違うんだなと思いながら、太一はまた校庭に目をやった。
高坂は彼の隣で、窓にもたれかかった。いつまでもそのままでいるので、
「……俺と一緒にいても、つまらないよ」
不思議に思って太一は言う。
「そうでもない」
「――」
「自分で言ってるほど、ズレてないよ。阿川は」
太一は少し驚いて、窓から身体を離した。相変わらず淡々とした寡黙な顔で、高坂は軽く肩

をすくめて見せた。
「それに誰だって、それほど相手のことがわかってしゃべっているわけじゃないと思う。俺がえらそうに言えたことじゃないが」
太一は黙っていた。こういう時に何と返答していいかわからないのが問題なんだけどな、と思っていると、突然訊かれた。
「和泉とつきあってるのか？」
「えっ」
これには普通に返事に困った。
「和泉は友達だよ」
「そうなのか」
「いつも話しかけてきてくれるから、和泉は特別で、友達なんだ」
友達だというだけで、自分にとっては特別で大切な存在だと、太一は思う。
ちょっと黙り込んでから、高坂はまた肩をすくめた。
「友達ってのは、そんな特別なものじゃないだろう」
「え……」
太一が戸惑っていると、高坂は相変わらず、言葉のひとつひとつを噛みしめるようにして、言った。

「和泉が前に言ってたんだ。阿川はいいヤツだって。――俺も、そう思う」

「――」

あれ、と太一は思った。

（なんか俺、……今、すっごい恥ずかしい、ような……？）

それでまた言葉を失っている間に、高坂は窓から身体を起こすと廊下に向かって声をかけた。

「和泉！」

太一と高坂が一緒にいるので教室に入るに入れず、でも気になるので、廊下でうろうろと行ったり来たりを繰り返していた采奈は、いきなり名指しされて飛び上がりそうになった。

「あああの、高坂君、呼んだ？」

精一杯何気なさを装って、教室の入り口から顔をのぞかせる。

「選手交代だ」

「え、あ、う……!?」

采奈と入れ替わりに、高坂は教室を出て行った。すれ違いざま、采奈に向かって満面の笑みで、「頑張れよ」と言った。

それを見送って、采奈は目を丸くする。

（うわぁ、高坂君が笑うの、久しぶりに見たぁ）

中学の時はよくあんな顔で笑っていた。何かいいことがあったのかな、と首を傾げてから、

采奈は太一を振り返る。
（そういえば私、阿川君が笑ったとこって見たことない）
どうして笑わないのかな、笑ったらきっと素敵なのに……などと考えながら、じーっと太一の顔を見つめた采奈だが、
「――あのさ、和泉」
「え、なに？」
ハッと我に返って、赤面した。慌てて太一の近くに寄る。
「今日の放課後、時間ある？」
「どして？」
「暇があったら、ちょっとつきあってもらいたいところがあるんだけど」
采奈は目をまん丸にした。ぶんぶんと何度も、首を縦に振った。
「行く！　もうぜんっぜん暇！　断然、暇だからっ！」

並んで歩くと、やっぱり采奈のほうが足が遅かった。彼女が時々、追いつこうと足を速めるのを見て、太一は少しゆっくり歩いた。
向かった先は、学校の最寄りの駅の近くにある雑貨屋だ。可愛い小物がいろいろ置いてあるらしく、店内はいつも女の子たちでいっぱいなので、男子は中に入りづらい。

でも今日は勇気をだして、采奈に誕生日のプレゼントを渡したいと太一は思ったのだ。

……当人を店に連れて行って品物を選んでもらうなんて、もしかすると格好悪いかな、とは思ったけど。どれだけ考えても采奈が喜ぶ物がわからなかったのだから、仕方がない。

「ここ？　私につきあってほしいところって」

店の前で、采奈はきょとんとした。

「あ、うん。この店、知ってる？」

「うん。学校の帰りに、友達とよく来るよ」

「じゃあ、あの……欲しい物、とか、ある？」

「え？」

意味がわからなかったようで、采奈は首を傾げた。

「和泉の誕生日……もう、だいぶ過ぎちゃったけど」

太一は思い切って言った。寒いので今日もはめてきた手袋に、目をやる。

「これ、もらったから。……お礼っていうか……でもずっと考えてたんだけど、和泉の欲しい物、わかんなくて。それで、あの、あんまり高い物とか、買えないけど……」

しどろもどろになる。やっぱりすごく格好悪い。どうして、もっとちゃんと伝えられないんだろう。

――ありがとう。手袋をくれて。いつも話しかけてくれて。好きだと言ってくれて、ありが

とうと。

それでも、ここへ来た目的だけは伝わった。誕生日、と呟いてから、采奈は大きく目を瞠った。

「ええっ⁉　もしかしてプレゼント、買ってくれるのっ？　本当に？」

「う、うん」

「うわあぁぁぁ」

どうしよう、と采奈は思った。すごく嬉しい。嬉しすぎて、頭の中が真っ白になってしまった。

「とにかく、店」

「ううう」

プレゼントプレゼント……と、頭の中でぐるぐる考えながら、采奈は店の中を歩き回った。夢みたいだ。太一から贈り物がもらえるのも、誕生日を知っていてくれたのも、彼女が欲しい物をずっと考えていてくれたことも。

だけど――。

（ど、どうしよう⁉）

急に、何が欲しいのか全然わからなくなってしまった。

友達とこの店に来た時には、あれが可愛いとかこれも素敵とかいっぱいあったのに、それが

ひとつも思い出せない。

（あ、マグカップ？　……は、割れたりしたらイヤだし。やっぱりずーっと持っていられる物がいいよね。このカエルのお財布も可愛いけど、でもでも阿川君になんだこれとか趣味が悪いとか思われたら困る）

「あの、もしかして他の店のほうがよかった？」

いつまでもうろうろしている栄奈を見て、太一はおそるおそる訊いた。

「そ、そんなことない！　欲しい物がいっぱいありすぎてっ、迷ってたのっっ」

よし、と栄奈は思った。

このままではいつまで経っても決められないから、

（目をつぶって、えいって指さした物にしよ）

「えい！　これ！」

ひと呼吸分くらい間をおいて、太一が「タヌキ……」と呟いた。

（え、タヌキ？）

栄奈は目を開けると、自分が指さした物を見た。

酒徳利をぶらさげた信楽焼のタヌキだった。正確にはそれをうんと小さくした、貯金箱である。可愛くない。

タヌキに罪はないけれど、少なくとも、好きな男の子に初めてプレゼントをもらう時にこれ



を選ぶ女子高生はいないだろう。

「……」

「……」

太一と顔を見合わせて、采奈は真っ赤になった。

「あのお、阿川君。――三回までやりなおしって、あり？」

「う、うん」

あと二回やりなおしをして結局、采奈が選んだのは小さなオルゴールである。

曲は『虹の彼方に』だ。

「本当にそれでよかったの？」

帰り道。リボンのついた包みを抱きしめて、ふわふわと歩いている采奈が今にも転びそうで、ちょっと心配しながら、太一は訊いた。

「うんっ」

「オルゴール、好きなんだ？」

「うんっ」

心ここにあらずといった感じで采奈がぼーっとしているので、大丈夫かなとは思ったけど、これでわかった。

（和泉は、オルゴールとおでんの大根と卵と油揚げに餅を入れたやつが好きなんだ）

喜んでいるみたいだから、ホッとした。これで、嬉しかった自分の気持ちを少しは采奈に返すことができただろうか。

ふわり、と風が吹いた。

思わず首をすくめるような、冷たい風ではない。かすかに花の香をのせた、柔らかな風。

もうすぐこの風が強く吹き荒れて、そうして本当の春がやって来る。

二章　菜の花いろの灯をともし

1

三月に入ると、空気は光を含んで日に日に眩しくなっていった。
暖かい日があったかと思うと、急に冷え込む日もあって、でもマフラーも厚いコートやセーターも、もうかさばって感じられる。
草木はゆっくりと萌え、瑞々しい若葉色の中にレンゲの赤紫やタンポポの黄色が顔をのぞかせて、間もなくの花の盛りを告げていた。

ある日、太一が学校から帰ると、お露さんが玄関のホールに積み上げられたガラクタを前にして、難しい顔で首を捻っていた。
「ただいま。――どうしたんですか？」
「ああ、いいところに帰ってきたよ。太一、あんたアカネを知らないかい？」

「アカネ？　いないんですか？」

お露さんは、ガラクタの山に半分埋もれているガラスケースを指さした。中は空っぽだ。アカネの本体である市松人形の姿がない。

「朝に見た時には、もうこうなっていたんだよ。昨日の夜はどうだったかねえ」

「夜はいました。俺が寝るまで、部屋で遊んでいたから」

「とすると夜中か朝方かね。建物の中は全部探したから、外へ行っちまったんだと思うんだが」

あれほど一人で外へ遊びに出てはいけないと言ったのに、とお露さんは皺だらけの顔をしかめた。

「困ったもんだ。遊びに行ったにしても、こんなに長い時間帰ってこないってのは、ちょっと心配だね。おかしな事にでもなっていなければいいんだが」

確かに朝だか夜中だかにアカネが姿を消したまま、この時間になってもまだ戻らないというのは妙な話だ。少なくとも太一が空栗荘に来てから、そんなことは一度もあったためしはない。

「今、ミヨシが探しに行っている。レンにも長老のところへ行ってもらったんだが、結局わからなくてね。もしかしたら妖怪の町のほうにいるのかもしれないから、古都子に連絡しようと思っていたところさ」

長老というのは、近くの神社に祀られている巨木のことだ。おそろしく古い樹で、賽河原

町のことは何でも知っている。町中の樹木と繋がっているから、アカネがいればすぐに情報が長老にも伝わるはずだ。

ところがその長老でも、アカネを見つけられなかったとすると——。

（どこへ行っちゃったんだろ？）

太一は首を傾げた。

「あの。俺も探してきます」

そうだね、とお露さんはうなずいた。

「帰ってすぐで悪いけど、ちょっとそのへんを見てみておくれ。あんたが行けば、あの子も姿を見せるかもしれない」

「はい」

太一は急いで自分の部屋へ行くと、制服を着替えて、それから思いついてアカネの好きな紙風船をジャケットのポケットに突っ込んで、外へ出た。

もちろんアカネの行き先なんて見当もつかないから、行き当たりばったりにあちこち歩き回っているうちに、いつの間にか太一は見慣れぬ道に入り込んでいた。

（あれ？　こんなとこ、あったっけ？）

まあ、いくら空栗荘の近くといっても、普段は全然通らない道だってあるわけだし、記憶に

ない場所があっても不思議はない。
だが――。
（なんかヘンだな……？）
何がとか、どういうふうにとは言えない。ごく普通の家々が建ち並んでいる、何の変哲もない道だ。妖怪の町みたいに、ことさらレトロな雰囲気が漂っているというのでもない。
なのに妙な違和感が消えなかった。
まるで肌でいつも感じている賽河原町の空気が、いきなり変わってしまったみたいだ。なんだか見知らぬ土地にいるみたいで、落ち着かない気分になる。
早く通り過ぎてしまおう、と足を速めた時だった。
――ねんねんころり　母の歌に
　月ものぼる夢の小道
歌が聞こえた。鈴を振るような、澄んだ響きで。
あんまり綺麗な声なので、思わず太一はあたりを見回した。道の少し先に、こぢんまりとした佇まいの洋館がある。赤いレンガの壁や張り出したテラスの柱に蔦や薔薇の蔓が鬱蒼と絡まっていて、見るからに古いけれども、人が住んでいるらしく荒れた感じはしない。
その洋館の、ペンキで塗られた木の柵に囲われた庭から、歌は聞こえていた。
柵ごしにのぞくと、砂糖菓子みたいな黄味色の花の房をいっぱいつけたミモザの樹があって、

その花を見上げるように一人の女性が立っていた。
太一は目を瞬かせた。
（外国人……？）
歌が途切れた。女性がふうっとこちらを向いて、太一と目があうとニッコリと笑った。
金色の髪。ガラス玉のような薄い緑色の目。襟元と袖のつまった、少し古風なモスグリーンのワンピースを着ている。
綺麗な人だな、と思ってから、太一は慌てて柵から身体を離した。気がつくとその女性が、すぐ目の前に立っていたからだ。
「こんにちは。何かご用？」
やはり鈴を振るような声で言う。よどみのない日本語だ。
「あの……歌が聞こえたから」
言い訳みたいに太一がもぐもぐ言うと、女性は微笑んだ。
「ああ、ブラームス」
「え？」
「子守歌です」
太一の中にある違和感が、急に心細さに変わった。どうしてだろう。行き先を見失った迷子のように、寂しくて不安でたまらなくなる。

目の前の女性は親しげに優しそうな笑みをたたえていて、悪い感じはしないのに、ここでこの人と話をしていること自体が何か違うのだという気がしてならない。
「すみません。俺、もう行かないと」
そう言って踵を返そうとした太一を、「待って」と鈴のような声が止めた。
「せっかくですから中に入って、一緒にお茶でもいかがですか？」
「……俺、今、人を探している途中だから。急いでて。ごめんなさい」
ええでも、と女性は困ったような顔をした。淡緑の瞳が翳る。
「少しの間、ここにいたほうが。あなたがどうしていらしたかはわかりませんけど、このままだと迷ってしまうでしょう」
迷うという言葉にドキリとして、太一は立ち竦んだ。不安な気分がさらに募る。
女性は小首を傾げて彼を見ていたが、またふうっと笑った。
「もしかすると、あなたが探しているのは、小さな女の子じゃありません？」
「え……」
「おかっぱで、クリーム色のワンピースに白いエプロンの女の子。ね、そうでしょう」
太一はきょとんとして彼女を見た。
「アカネを知っているんですか？」
「ああやっぱり、アカネちゃんね。ええ、もちろん知っています。だってあの子は今、うちで

遊んでいますもの」
「ええ⁉」
なんでアカネがここにいるんだろう、と戸惑っていると、女性は今度はクスクスと声をあげて笑った。
「ああ、アカネちゃんを心配してここへいらしたのね。すぐに呼んできますから……ええと、あなたのお名前は？」
「太一です。阿川太一」
「私は綸子です」
「りんず？」
「織物の綸子」
さらりと金色の髪を揺らして、女性は洋館の中へ消えていった。

「太一――！」
大きなガラスを嵌め込んだ玄関の扉が勢いよく開いて、アカネが外に駆け出してきた。柵の一部が掛けがねを使った木戸になっていて、それをよいしょと開いて道に飛び出す。きゃあと歓声をあげて太一にしがみついた。
「こら、ダメじゃないか。いなくなったりするから、みんな心配してたんだぞ」

ホッとしながらも太一がめいっぱい厳しい声で言うと、付喪の少女は首をすくめた。
「あのねあのね、アカネは綸子やタエさんとお友達になったんだよ。それでね、お手伝いしてたの。猫、探したんだけど見つからなくて、それで帰るの忘れちゃったの！」
（タエさん？　手伝い？　猫？）
何が何やらだが、ともかく最初の疑問から口にしてみた。
「タエさんて？」
「この家の住人です」
答えたのは、いつの間にかまた庭に姿を見せていた綸子だ。
「お年を召したご婦人で、足が悪いのでもうあまり家からは出られません。旦那様はずいぶん前にお亡くなりになりましたし、タエさんも一人で暮らしていると不自由なことがおありでしょうから、私がお世話をしていますの」
ということは、綸子はもともとこの洋館の住人ではないらしい。
（えっと、ハウスキーパーさんとかヘルパーさんとか、かな）
ごめんなさい、と綸子は表情を曇らせた。
「アカネちゃんが黙ってここへ来たと知っていたら、こんなに長く引き留めはしなかったのですけど。ここに誰かが訊ねてくるなんてめったにないものですから、少しの間でもアカネちゃんとおしゃべりができたら、きっとタエさんも喜ぶと思ったんです。でもタエさんから猫の話

を聞いて、アカネちゃんが自分もお手伝いすると言ってくれて。それで、さっきまで一生懸命に猫を探してくれていたの。だからどうか、アカネちゃんを叱らないであげてください」

「はあ。——猫って？」

あのね、とアカネが身を乗り出した。

「タエさんの猫。お砂糖みたいに真っ白なんだって。でもね、いなくなっちゃって、それでタエさんはすごく心配してるの。だからアカネは見つけてあげようと思ったの」

で、猫を探している自分が同じように探されていたことまでは、頭になかったらしい。

（あれ、でも……）

おかしいな、と太一は思った。もしアカネが猫を探して近所をうろついていたのなら、町中に生えている樹木たちがそれに気づかないわけがない。長老がアカネを見つけていたはずだ。

……まあ、そのことはあとでもう一度アカネに訊くとして。

「とにかく、もう帰るぞ」

「でもまだ猫、見つからないよ」

アカネは口を尖らせて、拗ねたように身体を揺らした。

「タエさん、かわいそうなの。一緒に暮らしていた猫がいなくなって、とっても心配してるんだよ」

「えっと……」

太一はため息をついた。仕方がない。
「じゃあ、俺も一緒にその猫、探してやるから」
週末で明日は休みだし。それこそレンに頼んで長老に訊いてもらえば、何とかなるかもしれない。
アカネはパッと顔を輝かせた。
「ほんと？　太一も探す？」
「うん。だから今日は帰ろう。空栗荘のみんなが心配しているから」
その言葉に反応したのは、綸子だった。はっとしたように目を見開くと、空栗荘、と呟いた。
「あなたは空栗荘の人なのですか？」
「え……」
その時である。
「太一！」
怒ったような声が聞こえて、見ればミヨシがこちらへ駆け寄って来るところだった。
「こんなとこで何しとるんや、おまえ!?」
息をきらせて太一の前で足を止め、ミヨシは怖い顔で彼を睨んだ。もっとも地顔からして目つきが鋭くて怖いので、本人がどの程度怖い顔のつもりだったかはわからない。
「あの、アカネがいなくなったってお露さんから聞いて、探してたんです。それでやっと見つ

けて……」

その太一にぴったりくっついているアカネに、ミヨシはこれ以上ない剣呑な目を向けた。

「ア、カ、ネ！」

怒鳴られてさすがに怯えたらしく、アカネは「きゃん」と太一の後ろに隠れるようにしがみついた。

「こらぁ！　どんだけ探したと思うとるんや!?　一人で黙って外へ出たらあかんて、あれほど言われとるのに、いつもいつもちょこまかとおまえは――っ！」

「いつもじゃないもん。それにアカネは、お手伝いしたんだもん」

「言い訳すな！」

カンカンだ。心配してたんだな、と太一は思う。ミヨシは誰かのことが心配な時、ひどく不機嫌になるのだ。

「でもミヨシさん、無事にアカネも見つかったんだし」

「アホ！　どんだけ甘やかしとんねんっ、そもそもおまえの教育が悪いんや、太一！」

「え、俺……教育係……？」

「おまえは、娘の躾もできん親バカの親父か、妹にめろめろのシスコン兄貴か!?」

人形にベタベタに懐かれる男子高校生と、果たしてどっちがマシだろうか。

アカネ、と今度は怒った声ではなく厳しい声で、ミヨシは言った。

「どんな理由があろうと、他人に心配をかけたんや。ちゃんと謝らなあかん」
その言葉で付喪の少女は、もじもじと太一の後ろから出てくると、神妙な顔をした。
「ごめんなさい」
ぴょこんと頭をさげた。
「わかったら、もうすな」
アカネをもう一度じろりと見て、それから——ようやく、ミヨシは綸子に目をやった。
「それで。あんた、誰や？」
柵のあちら側で一部始終を見ていた綸子は、慎ましやかにミヨシにお辞儀をした。が、そのまま何も言わないので、やむなく太一が説明する。
「綸子さんです。ええと、この家にはタエさんというおばあさんが一人で住んでいて、綸子さんはその世話をするためにここにいるんだそうです」
「あんた、外国の人か？」
見ればわかるだろうに、ミヨシは胡散臭げに訊ねた。
はい、とそれには綸子が応じた。
「でも私は日本で生まれて、ずっと日本で暮らしておりましたので、よその国のことは知りません」
どうりで流暢な日本語だ。

ミヨシはちらと彼女の背後の洋館を一瞥する。
「俺は何年もこの近所におるけど、ここにこないな家があったとは知らんかったわ」
「昨夜、越してまいりました」
「家ごとかい」
綸子はニコリと、少し謎めいた微笑を口元に浮かべて、それには何も言わない。
「わざわざこの町へ来たんや。目的があるんやろ？」
「はい。落ち着いたら、空栗荘の主様にご挨拶にうかがおうと思っておりました」
「ふん。用件は何や」
どうぞ、と綸子は一歩退がり、洋館のほうを手で示した。
「お客様を外に立たせたままでは、失礼にあたります。どうぞ、中へ。お茶にお招きしたいのですけれども、かまいませんか？」
「ええで」
驚いたことに、ミヨシはあっさりとうなずいた。
「おまえはどないする、太一？　先に帰っとくか？」
「アカネはタエさんと遊ぶー」
「あ、じゃあ、俺も行きます」
というか、なんか一人じゃ帰れない気がする。

そういうわけで、空栗荘の住人たちはその洋館に足を踏み入れることになった。

2

玄関からホールを抜けて客間に入ると、窓際の籐椅子に座っていた老婦人がにこやかに彼らを迎えた。

「タエさん！」

「あら、まあまあ。今日はお客様がたくさんいらっしゃること」

「あらまあ、アカネちゃん。この男の子たちは、アカネちゃんのお友達かしら？」

「うん！　こっちが太一で、あっちがミヨシなの」

高校生の太一も二十代のミヨシも、年配者にとってはただの「男の子」だ。

「よく来てくれたわね。でも、ごめんなさいね。足が悪くて、立ってお出迎えをすることができないの。ほら、もうこんなおばあちゃんなものだから」

確かに七十は過ぎていそうに見えるが、藤色のワンピースの肩にショールを羽織って、白い髪をきちんと結って、タエさんは穏やかで品のよい佇まいの人だった。

「どうぞ、好きなところに座ってくださいな。まあ、こんなに賑やかなのは久しぶり。綸子、今日はとっておきのお茶器を出しましょうね」

「はい」

気勢をそがれたらしく、ミヨシは力が抜けたように肩を落とした。タエさんをしげしげと見つめてから、小さく鼻を鳴らして、そのへんの椅子に腰を下ろした。

アカネはすっかりタエさんと親しくなったらしく、籐椅子にくっついて「あのねあのね」と話しかけている。

それを見ていて、太一はなんとなく安心した。違和感はまだ消えなかったけど、もしここがいてはいけない場所なら、アカネがこんなふうにここの人たちに懐くわけがない。

綸子が紅茶のポットと、焼き菓子を運んできた。白い布をかけたテーブルに並べて、お茶をカップに注ぐ。人数分あったけど、アカネは人形なので食べ物は摂らない。老婦人は椅子に座ったまま、ニコニコして彼らを見ているだけだ。

どうぞと勧められて、太一は干しぶどうの入った焼き菓子を齧った。美味しい。

そのあとしばらく、他愛のない会話がつづいた。会話といっても、話しているのはおもにタエさんで、アカネはちょこちょことあちこち動き回っているし、ミヨシは黙々と紅茶を飲んでいるしで、もっぱら太一が聞き役になって「はあ」とか「そうなんですか」とか相づちを打った。

綸子は客人に紅茶と菓子のおかわりを勧める時以外は、タエさんの傍らで、静かに微笑んで佇んでいた。二人の間にはふんわりとした空気があって、なんだかおばあさんと孫みたいだ

と太一は思う。

若い頃は苦労したけど、夫の事業が成功してこの洋館に住むことになった時は嬉しかったとか、庭のミモザが今は盛りだけれどももう少し経てば薔薇が綺麗に咲くのだとか、そんな話を一通り聞いたあとで、ミヨシが初めて口を開いた。

「それで、空栗荘に何の用やねん」

タエさんの手前、それまで辛抱強く黙っていたのだろう。

はい、と綸子は真顔になってうなずいた。

「アカネちゃんや太一さんには、さっきお話ししたのですけど。——ミーちゃんがいなくなってしまったのです」

「ミーちゃん？」

「猫です。それで、その猫を探していただきたくて」

ミヨシはしばらく無言でいてから、ものすごく疑わしげに言った。

「猫て、ニャーて鳴くあの猫のことか？」

「違うよ、ミヨシ。猫はね、シャーとかフーって鳴くんだよ」

それは威嚇なのでは。

「……。アカネ、おまえ猫に何したんや」

「可愛いから、抱っこしようとしたの」

多分、無理矢理に。子供のやりそうなことだ。
「ええとな、つまりあんたらが賽河原町へ来た理由は猫を探すためで、それを空栗荘の大家に頼むつもりやったていうんか？」
「はい。ミーちゃんがいなくなって、タエさんがとても心配しているものですから」
「いや、そういう意味やのうてな……」
ミヨシが頭を抱えていると、「まあ」とタエさんが声をあげた。
「あなた方も、ミーちゃんを探すお手伝いをしてくださるの？」
「あー、その」
「まあ、よかった。私は外へ出られないから、ミーちゃんを探しに行きたくても行けなかったの。でも、これできっと見つかるわね、綸子」
「はい。ミーちゃんはきっと戻ってきますわ」
「いや、その」
「ああ嬉しい。どうもありがとうね」
タエさんは、少女のように両手を胸の上で組んで、心から嬉しそうに笑んだ。
「実は私はもうじき、この家を引っ越さなければならないの。ここに一人でいて、いつまでも綸子に面倒をみてもらうわけにはいかないものね。でも、もしミーちゃんが戻ってきた時に、私がいなくなっていたら困るでしょう？　帰る場所がなくなってしまったら、あの子が可哀想。

だからここを離れる前に、どうしてもミーちゃんを見つけたかったの。ごめんなさいね、こんなことをお願いして」

「――」

ミヨシはむすっと黙り込んでしまった。

（でも、どうしてこの人たちは、そんなことを大家さんに頼もうと思ったんだろう？）

太一は内心で首を傾げた。

アカネはやる気満々だし、太一だって手伝うと約束したのだから、タエさんのために猫を探すくらいかまわないと思う。

だけど、いなくなった猫を見つけてくれなんて、わざわざ空栗荘の大家に依頼するようなことではないような気がするのだ。

（……ていうか、そのために賽河原町に来たって……それも、昨日？）

ひょっとすると、境界守というのはそういう猫探偵みたいなのも仕事のうちだとか。しかも空栗荘の大家であるところの時国柊二郎は、実はその世界では名人として有名だとか。

（あんな、いつも寝てばかりいる人が？）

なんだか頭の中がぐるぐるしてきてしまった。

さっきから、いろんなことが小さなカケラみたいにひっかかって、そのたびに「あれ？」と奇妙に思うのだけど、思い返してみるとよくわからない。

（庭のミモザ……もう少し経てば薔薇が……）

それは長い間この家に住んでいて、庭を見ていた人でなければ言えない言葉だ。うっかり聞き流していたけれど、タエさんがする話はどれもこれも、彼女がずっとこの洋館に住んでいたとわかるものばかりだった。

でもそれなら、この人たちが賽河原町へ来たのが最近のはずはない。

「猫、おらんようになったのはいつや？」

ミヨシが唐突に、ぼそっと訊ねた。

「それは昨日……あら、違うわねえ。一昨日だったかしら。ねえ、綸子？」

タエさんは口元に指をあてて、考え込む。いいえと、綸子が優しく言った。

「少し前でしたわ」

「ええそう、少し前だったわね」

ホッとしたように、タエさんは笑った。

「ミーちゃんはこの家に二年いたの」

「――それで、どんな猫や。一目見てわかるような特徴でもあるか？」

ミヨシが仏頂面で質問をつづけたので、太一は目を瞬かせた。

（もしかしてミヨシさん、案外、乗り気なのかな……？）

「ミーちゃんは白猫です。耳の先から尻尾の先まで、お砂糖みたいに真っ白な猫。それで、目

の色は金色でした」

綸子が答えたが、それだけではわからない。白くて目が金色の猫なんて、そのへんにいくらでもいそうだ。

「写真はないんか？」

ごめんなさいね、とタエさんが困ったような顔をした。

「ミーちゃんはカメラが嫌いな子で、写真を撮ろうとするといつも逃げてしまうの。でもね、それ以外はとても可愛くて賢くていい子でしたよ」

ミヨシはあからさまにため息をついた。

「……他に手がかりになるもんはないんかい」

「ミーちゃんがいつも首につけていたリボンなら、ありますけど」

思いついたように言うと、綸子は返事も待たずに客間を出て行き、すぐに戻って来た。手に空色のリボンを握っている。

「ああ、そのリボン」

タエさんは悲しげに微笑んだ。

「ミーちゃんがこの家に来た時に、私が首につけてあげたの。とてもよく似合っていたわね。でもミーちゃんがいなくなった時に、このリボンだけが庭に落ちていたのだったわ」

ミヨシは肩をすくめると、綸子が差し出したリボンを受け取った。胡散臭げにそれを一瞥し

てから、ふっと目を細めた。
　無言で綸子を見ると、彼女は小さくうなずいた。
「なるほどな。……そういうことかい」
「はい」
「これ、しばらく預かってもええか？」
「どうぞ」
　太一にはさっぱりわからない遣り取りをして、ミヨシは立ち上がった。
「帰るで、太一」
「え、でも」
「長居しすぎた。もう夕飯の時間や。帰らなお露さんにどやされるわ」
　言われてみれば、窓から見える空はすっかり夜の色だ。ここを訪れた時には、まだ明るかったのに。客間にはいつの間にか、柔らかな黄色い照明が灯っていた。
「あれ、アカネは？　――あ、こんなところで寝てる」
　姿が見えないと思ったら、付喪の少女はテーブルの下に潜り込んでくーくーと眠り込んでいた。
「ほら帰るよ、アカネ。起きて、タエさんたちにバイバイして」
　身体を揺するとアカネはむくっと起き上がって、目をこすりながらテーブルの下から這いだ

してきた。

「太一、おんぶ」

しょうがないから太一がおんぶしてやると、アカネは彼の背中からタエさんと綸子に「バイバイ」と手を振って、またことんと寝てしまった。

「まあまあ、アカネちゃん、くたびれちゃったのねえ」

タエさんが笑う。

「――あの、私も空栗荘に出向いて、主様にあらためてきちんとお伝え申し上げたほうがよろしいでしょうか」

玄関まで見送りに出た綸子が言うと、ミヨシは肩をすくめた。

「俺が伝えとく。あんたは、タエさんのそばにおらなアカンのやろ」

ええ、と綸子はうなずく。ミヨシと太一に向かって、深々と頭を下げた。

「それでは――どうか、よろしくお願いいたします」

洋館を出てしばらく歩くと、車の往来する賑やかな通りに出た。

(あ、ここ……)

太一もよく知っている通りである。空栗荘からたいして遠くはない。

アカネをおんぶしたまま、何気なく今出てきたばかりの道を振り返って、太一はぽかんとし

た。
「ミヨシさん」
先を歩いているミヨシを、慌てて呼び止める。
「なんや」
「今の道、なくなっちゃったんですけど」
あの洋館につづく道は消えていた。彼らが出てきたはずの場所は、ただの住宅の塀になっている。
だがミヨシは、そちらを一瞥しただけで面倒くさそうに一言、言った。
「それがどないした」
「……」
ということは、べつに不思議なことじゃないんだな、と太一は思った。
（賽河原町だし）
裏側の妖怪の町では建物や道がしょっちゅう入れ替わっているし、表の人間の町のほうでもそこにあるべき道が消えてしまったというのは、太一も以前に経験したことがある。
でも、だったら次はどうやってタエさんや綸子に会いに行けばいいのだろうと首を捻りながら、太一は足を速めてミヨシに追いついた。
「あの、やっぱり猫探しも大家さんの仕事なんですか？」

背中のアカネを起こさないように気をつけて歩きながら、太一が訊ねると、
「そんなわけあるかい」
前を睨むように見たまま、ミヨシはふんと鼻を鳴らした。
「でも……」
「けどこれは、大家の仕事や」
意味がわからずに太一が首を傾げていると、ミヨシはポケットから空色のリボンをつまみ出して、ひらひらと振って見せた。
「かすかにやけど、これには妖気が染みついとる」
「……妖気って」
「妖かしの気や」
ミヨシは低い声で断言した。
「このリボンをつけとったのは、猫やない。妖怪や」
妖怪？
（あ、だから大家さんの仕事なのか）と、すんなり納得してから、太一は驚いた。
「ええっ、じゃあ妖怪がこんな可愛いリボンをつけていたんですかっ？」
「おまえの驚くポイントはそこかいっ⁉」
というところで空栗荘に到着し、ミヨシがそのまま大家の部屋へ行ってしまったので、太一

はそれ以上は何も訊けなかった。

3

リボンをつけたゲテゲテでグチャグチャの真っ黒な化け物の夢にうなされて目を覚ますと、朝だった。休みの日は朝食をとる時間が、いつもより遅い。太一がのんびりと服を着替えて顔を洗って食堂へ行くと、他の住人は誰もいなかった。古都子とレンはもう仕事に行っているのだろうし、十遠見もこの数日は忙しいらしく姿を見ていない。

朝食のメニューは焼いた塩鮭と蕪の味噌汁。だし巻き卵。小鉢に盛られた蕗の佃煮が、ほろ苦くて春らしい。

いつものことながらお露さんのつくる食事は美味しくて、ご飯をおかわりして食べていると、ミヨシが食堂に入ってきた。

カウンターでお露さんからおかずを載せたトレイを受け取り、自分で茶碗に飯を大盛りにして、どさっと太一のそばに座った。

「おはようございま」

す、まで言い終わるより先に、ミヨシはぶっきらぼうに言った。

「猫、探しに行くで」

「……え」
「大家は、この件は俺にまかせるて言うとった。これで今月分の家賃はチャラや」
ミヨシは皿の上のものを片っ端から口に放り込みながら、言う。いつものことながら、すごい食べっぷりだ。ちゃんと噛んでいるのだろうか。
で、ミヨシがアルバイトでこの一件を引き受けたというのはわかったが、
「えっと、それでどうして俺も？」
「ええから手伝え。どうせおまえも、猫を探すつもりやったんやろ」
それは、猫は探すと言ったけれども。
「ミーちゃんは猫じゃなくて妖怪ですよね？」
「似たようなもんや」
似てるかな、と太一は茶碗を片手に首を傾げた。
「あ、もしかして化け猫？」
「さあな。猫が化けたのかもしれへんし、別の妖怪が猫に化けとったのかもしれへん」
「はあ」
こういう場合は、何から質問するべきだろう。
ちょっと考え込んで、太一は口を開いた。
「あの。……タエさんは、ミーちゃんが妖怪だって知らないんですか？」

「そらそうやろ。昨日の様子からして」
では、あの老婦人は妖怪を猫だと信じ込んで、一緒に暮らしていたのだ。可愛がって。二年間も。
そして今は、その猫がいなくなったと言ってとても心配している。
「どうしてその妖怪は、猫に化けたりしたんだろう」
知らん、と素っ気なく言って、ミヨシはご飯のおかわりに立ち上がった。おかずがほとんど残っていないのにどうするのかと思ったら、ご飯に塩鮭の皮をのせて上からお茶をかけた。
「え、皮も食べるんですか？」
「アホ。塩鮭は焼いた皮のところが最高にうまいんや」
お茶漬けをざかざかと半分ほどかっこんだところで、ミヨシは箸を止めた。真顔で太一を見る。
「――一応、言うておく。自分から人間に近づく妖怪は、危険なヤツが多い。相手に取り憑いて利用するとか、食うとか殺すとか、そういう魂胆でやっとるからな」
太一は味噌汁でむせそうになった。
「じゃあ、ミーちゃんも……？」
「そういう可能性もあるて話や。あの家におったヤツが何を考えとったかまでは、わからん。なぜおらんようになったのかもな」

大丈夫なのかな、と太一は少し心配になる。
「あの、もしかしてミーちゃんがもし危険な妖怪だったら、タエさんのところにもう一度連れて行くのはまずいってことなんじゃ……？」
「それは、そいつを見つけてからのことや」
ミヨシはお茶漬けの残りを流し込むと、「ごっそさん」と茶碗を置いた。
「それとな、あの女のほうは猫の正体が妖怪やて知っとったで」
「あの女って……綸子さん？」
太一は目を瞬かせた。
ミーちゃんが妖怪だと知っていた？　綸子が？
「だから大家を頼ろうとしたんやろ」
「あ……」
それなら綸子たちが賽河原町へ来たのも、納得できる。少なくとも、空栗荘の大家が猫探し名人だというよりは、よっぽど。
（だけどどうして、妖怪だってわかったんだろう）
いやそれより、猫じゃないと知っているのなら、なぜ綸子はタエさんに教えてあげないのかと太一は不思議に思う。
「おまえ、あの女のことはどんなふうに見えた？」

「どうって……」
唐突なことを訊かれて、太一は考え込んだ。
「綺麗な人、かな」
金色の髪も薄い緑の目も、とても綺麗だった。その色の取り合わせが、なんとなく花を思わせる。それも、最初に彼女と一緒に見かけたミモザのように華やかな印象ではなく、もっと控えめで淡やかな春の花のような。
「そうやない。そういう意味の見た目やのうて」
「えっと、それじゃ……優しそうで感じのいい人に見えましたけど」
タエさんのことも家族みたいに想って世話をしているのがわかったし、何より悪人ならアカネが彼女に懐くわけはないと思うし。
そうか、とミヨシはあっさりとうなずいた。
「まあ、確かに悪い気配はなかったわ」
どういう意味なのか訊き返すより先に、ミヨシはトレイを持って立ち上がった。
「十分後に、玄関の前で待ち合わせや。間違うなよ。妖怪の町のほうやで」
「え……十分⁉」
すっかり箸の止まっていた太一は、慌てて皿の上にまだ残っていたおかずをご飯と一緒に口に押し込んだ。

玄関を出ようとして、太一はあれっと思った。

（そういえば、アカネはどうしたんだろう）

猫を探すといって張り切っていたし、こういう時はすぐに姿を見せて一緒に行くと駄々をこねるにきまっているのに。

見回しても、積み上げたガラクタの中に市松人形のガラスケースはなかった。

不思議に思って、食堂から見送りに出てきたお露さんに訊くと、

「大家の部屋だよ」

という答だ。

昨日、空栗荘に戻ったアカネは、お露さんにお尻をペンペン叩かれて叱られた。こっそり外へ出たのはどうやら明け方で、本人いわく「呼ばれているみたいで身体中がむずむずしたんだもん」ということだったが、それで遊びに行って辿り着いたのがあの洋館というわけだ。

ともかく、勝手に外出した罰としてアカネは当分の間、ガラスケースから出てはダメということになったらしい。御札を貼られるのはいつものことだが、今回はさらにお許しが出るまで柊二郎がケースごとアカネを自分の部屋で預かることになった——というか押しつけられたというか——のだという。もっとも、グータラ寝てばかりの大家に見張り役が務まるかどうかは、疑問だが。

「あの子は、いくら言ってもすぐに外に行きたがるからね。一度、がつんとお灸をすえておかないとね」

お露さんはしかめっ面で言った。

お尻を叩かれて半ベソをかいていたアカネを思い出して、ちょっと可哀想かなと太一は思ったけれども、仕方がない。これから探しに行くのは、猫ではなく妖怪なのだし。もし相手が本当に危険なヤツで、そのせいでアカネがキレて暴走したら、とても困るし。

「行ってきます」

外へ出ると、ミヨシはすでに妖怪の町へつづく坂を半分ほども下りたところで彼を待っていた。太一の姿を見ると、早くしろと言わんばかりに顎をしゃくって、歩き出した。

「――どうやって探すんですか？」

走って追いかけて、追いついたところで太一が訊ねると、ミヨシは肩をすくめた。

「適当にそのへんのヤツをつかまえて、訊いてみたらええんとちゃうか」

つまり、行き当たりばったり。

「まあ、人間の世界にいたことがあって、変化の術が使えるヤツていうのは、妖怪の中でもそう多いわけやないし」

「変化？」

「別のモンの姿に化けることや。二年間も猫に化けとったくらいなら、そいつは相当、力のあ

る妖怪やろ」
「でも、もし賽河原町にいなかったら？」
ミーちゃんがこの町の住人とはかぎらないんじゃないかと思っていると、
「多分、おる」
ぼそっと返った声に、太一は思わずミヨシを見つめた。
坂の下まで来て、ミヨシは一度足を止めた。
「ずっと探しとって、賽河原町におるとわかったから、来たんやと思う。少なくとも、綸子はな」
（ずっと……？）
昨日から、太一はその言葉にひっかかっている。
「俺、ヘンだって思うんですけど。――タエさんも綸子さんも、ずっとあの洋館に住んでいたみたいなのに、賽河原町に引っ越してきたばかりだって言ってるし。なんか意味わからないっていうか、どっちが本当なんだろうって」
「どっちもほんまや」
「え？」
「おまえ、近所にあの洋館があるのを知っとったか？」
「……知りませんでした、けど」

「当然や。あの洋館は、賽河原町には実在してへん。あれは今も、どこか別の土地に建っとるはずやから」

ミヨシがさらりと言った言葉に、太一は目を丸くした。

「ところがあの建物の周辺だけ、賽河原町と空間が重なっとる。つまり、道が繋がったんや。それで、お互い行き来できるようになってしもた。意味、わかるか？」

「え、ええっと」

ぽかんとしている太一を見て、ミヨシは小さく息をつく。細かいことを説明するのは苦手なんや、とぼやいた。

「早い話、あの洋館におる時は、俺らはどっか知らんよその土地に行ってしもとるわけや。今こうして、妖怪の町に来とるようなもんやな。賽河原町でも、本来は普通の人間が行き来できん表と裏の世界が、ところどころで繋がってしもとるやろ。そういうもんやと思え」

「はあ」

「道が繋がったのが、多分一昨日や。けど、まさかそういうことを言うわけにはいかんから、綸子は引っ越してきたて俺らに言うしかなかったんやと思う」

――あの洋館が建っているのは、賽河原町ではないどこか別の場所。ここではない、よその土地。

それで太一が思い出したのは、洋館に至る道に入り込んだときにおぼえた違和感だった。

まるで迷子になったみたいな、見知らぬ場所を歩いているような不安と心細さ。空栗荘の近くにいるはずなのに、あの時確かに太一は、知らない土地の空気を感じていたのだ。

（それに……そっか、長老がアカネを見つけられなかったのも）

あそこが賽河原町ではないから、町の樹木たちはアカネの姿を「見る」ことができなかったのだろう。

「わかりました」

「わかったんかい」

太一はうなずく。つまり、下宿先を初めて訪ねたらそこが妖怪の町だった、というのと大差ない。薄売りを追いかけて河原を歩いていたら異界に入ってしまったり、彼岸花を持って霊道を通ったらどこかの墓地に出たり、という体験だってしているのだから、今回にかぎって驚くこともないんじゃないかと思う。

「納得したならええわ。ほな、行くで」

歩き出したミヨシにつづこうとして、太一は「あっ」と呟いた。

「すみません。ちょっと、まだ……」

「なんや」

「別の土地と空間が繋がったっていうのはわかったんですけど、それって偶然じゃないですよね？」

ミヨシは、何を今さらという目を太一に向けた。
「綸子がやったんやろ」
「あ、やっぱり」
これまでの話の流れからして、とっくに気づいているべきことだった。
「あのお。だったら、綸子さんて……もしかして」
「あの女は人間やない」
ためらいがちに言いかけた太一の言葉を引き取って、ミヨシは断言した。
「え、じゃあ、妖怪!?」
「付喪(つくも)やろ、あれは」
「……付喪」
九十九年の年月を経た器物に、命が宿った妖(あや)かし。
「な、何の？」
「正体はまだわからん」
（綸子さんが、付喪？）
あらためて太一は呆気(あっけ)にとられた。
「付喪なのにどうして外国人なんですかっ？」
「せやから、なんで最初にそこを驚くねん!?」

ああ、だからアカネがあんなに懐いていたのかなと、太一はふと思った。綸子が自分と同じ付喪だから。その前に「呼ばれているみたい」な気がして、洋館へ遊びに行ったのも、きっと。

（そっか。付喪なんだ）

結論。ペットが妖怪で、付喪が世話係というタエさんが、一番スゴかった。

妖怪の町に入ってすぐに、交番を見つけた。

「いっそ、お巡りに訊くのが早いかもしれへんな」

ミヨシはずかずかと交番に踏み込むと、机に向かっている警官に「おい」と声をかけた。振り返ったのっぺらぼうの鼻先に——鼻はないけれども——持っていたリボンを突きつける。

「これの持ち主を探しとるんやけど、知らんか」

はいはいとうなずいて、のっぺらぼうは一枚の紙をミヨシに差し出した。

「なんや、これ？」

『取得物件預り書』と書いてある。名前と住所と電話番号の項を、警官は指さした。記入しろということらしい。

「なるほど、これを出しとけば持ち主があらわれんかった時は、このリボンは俺のもんになるんやな……って、誰が落とし物を届けに来たんやっ、ボケっ！」

ミヨシは紙を丸めて、床に叩きつけた。

「このリボンについとる妖怪の気に心当たりはないかて言うとるんや。変化ができて、人間の世界に出入りしとったヤツや」

のっぺらぼうはリボンを受け取ると、人差し指と親指を顎に添えるという渋いポーズをきめて、考え込んだ。

「……」

リアクションがなかった。

「……」

さらに考え込んでいる。

「いや、わからへんのやったら、もうええわ」

さらにさらに考え込んでいる様子の警官に、ミヨシはげっそりと言った。

だがその時、天啓のごとくひらめいたらしく、のっぺらぼうは掌を拳でぽんと叩いた。昔の漫画なら、頭の上に電球が描かれている図だ。

「知ってるんですか？」

太一は思わず身を乗り出した。

のっぺらぼうは大きくうなずく。同じように二人に向かって身を乗り出して、

「……」

口がないからしゃべれない。

「無理せんでええから。筆談でええて。な？」
ミヨシが棒読み口調で親切なセリフを言うと、警官はすみませんというように頭をかいて、おもむろに紙と筆を取り出した。
（……鉛筆もボールペンもあるのに、どうして筆!?）
妖怪のこだわりって、よくわからない。
二人が見ている前で、のっぺらぼうは筆を墨汁の壺にひたすと、さらさらと紙に字を書いた。
黒々とした墨跡も鮮やかな、見事な達筆だ。
……達筆すぎて、全然読めなかった。
「あのな、のっぺらぼう」
ミヨシは警官の肩にぽんと手を置くと、次の瞬間、襟首を摑んで締め上げた。
「おちょくっとるんかっ、こらっ！」
自分より上背のあるミヨシに首を摑まれ、怖い顔ですごまれて、気の毒なのっぺらぼうはジタバタと手を振り回した。
もちろん、彼に悪気はない。町の平和を守るために日々奮闘している、真面目で親切なお巡りさんである。
「あ、あの、ミヨシさん、首が絞まってます絞まってますから！」
「シメとるんやから当然や！」

という騒ぎに気づいて、交番の前には人だかり、というか妖怪だかりができ始めていた。妖怪たちは野次馬根性旺盛である。

「――こらこら、何をしとるんじゃ」

いきなり、呆れたような声とともに一羽のカラスが文字通り交番に飛び込んできた。

机の上に舞い降りて、ぐるりと一同を見回す。

「あ、クロ爺。こんにちは」

太一が挨拶すると、クロ爺はやれやれとばかりに嘴を振った。

「一体何事じゃい、これは？」

「妖怪を探していて、お巡りさんが名前を書いてくれたんですけど、字が読めなくてミヨシさんがキレました」

このままだとのっぺらぼうの命が危ないので、太一は急いで説明した。

「ふん。相変わらず見境のない男じゃのう。――どれ、これがその名前か？」

クロ爺は机の上に置いてあった紙をのぞき込んだ。

「ほう、なるほど。こやつか」

「わかるんか⁉」

ミヨシは、摑んでいた警官の襟首をパッと離した。ようやく解放されたのっぺらぼうは、ぜいぜいと肩を上下させる。しかし鼻も口もないのに、どこで呼吸をしているのだろうか。

「なんて書いてあるねん」
「覚じゃ」
あきらかにもったいをつけて、クロ爺は言った。
「カク？」
「覚醒の覚。覚え書きの覚じゃよ」
と言われても、さっぱりその字には読めないのだが、それはともかく。
なんやねんそれ、と顔をしかめてから、ミヨシは思い至ったらしい。
唸るように言った。
「サトリか……！」
クロ爺はうなずいた。どこかおもしろがるような口調で、
「そう。覚と書いてサトリじゃ。そやつは人間の心を読む妖怪、サトリの化け物じゃよ」
ミヨシはしばらくカラスを睨んでから、げんなりと頭をかかえた。
「……くそ。またよりによって、ややこしいヤツが関わっとったわ」
「ややこしいんですか？」
太一が訊くと、ミヨシは渋い顔でうなずいた。
「まあな。知恵が回るうえに、そこそこ危険やな」
「――サトリに用なら、ヤツは五丁目の長屋に住んでおるよ」

クロ爺は肩をすくめるように、黒い翼を広げた。
「五丁目て、今はどのへんやねん」
「何なら案内してやってもいいぞ。そのほうが早かろう」
「ほな、頼むわ。行くで、太一。――と、すまんかったな、のっぺらぼう」
今になってミヨシが気まずそうに詫びると、皺になった襟元をせっせとなおしていたのっぺらぼうは、「気にするな」というように顔の前で手を振った。
のっぺらぼう全員がそうなのか、それともこの警官の個人的な性格なのかは知らないが、実に心の広い妖怪であった。

五丁目はけっこう遠かった。
最後のほうはごちゃごちゃした細い路地を何度も曲がって、右も左もわからなくなった頃、先導していたクロ爺がようやく空から降りてきた。
「ほら、そこじゃよ。確か右端の部屋だったか」
二人のそばの木の枝にとまって、目の前の木造の長屋を嘴で示した。
「おおきに。助かった」
「で、サトリに何の用かの？」
すまして訊いたところをみれば、好奇心から道案内をかってでたようだ。

「一緒に来たらわかる。どうせそのつもりやろ」
「まあな」
仏頂面で言ったミヨシに向かって、カラスはカッカッと笑うと、今度は枝から太一の肩に飛び降りた。おっとっとバランスをとって、おまえは肩が細いだのもっと肉をつけろだのと、文句をつける。
「おい、サトリ。おるか？」
ミヨシは長屋の引き戸を開けて、中をのぞき込んだ。
そのとたん、
「おぅ、なんでえ、ミヨシ坊じゃねえか。何しに来やがった」
聞き覚えのある声が返った。
（あれ？　……この声って）
「狢？」
「狢じゃな」
太一とクロ爺は同時に呟いた。
果たして、煙管を片手にのっそりと中から姿を見せたのは、格子柄の着物を着た若い男である。そういえば狢が人間に化けているのも、変化とかいうやつなんだろうかと太一は思った。
「おまえこそ、ここで何しとんねん」

ミヨシが呆れ顔になる。
「おいおいご挨拶だな。オイラが知り合いのところに顔を出して、何が悪い。――よう、兄さんとクロ爺も一緒かい」
「なんやおまえ、サトリと知り合いやったんか」
「ああ、昔っからの顔馴染みよ。で、あいつが何かやらかしたのかい」
などと言っているところに、家主があらわれた。
「――うるさいねえ。客人かい？」
戸口から出てきたその妖怪のなりを見て、太一は目を丸くした。
サトリは人間の姿をしていた。ずるずるした赤い着物を着て、腰までありそうな長い髪に赤い玉のかんざしをひとつ、挿している。女の格好をして身体つきも華奢だが、女なのか男なのかよくわからない。顔はといえば、細く裂けたような切れ長の目に、口も鼻も小さくて、なんだか全体がのっぺりしていた。のっぺらぼうのほうが、まだ特徴がありそうな顔だ。
「なんざんしょ。こんなところに人間さんとは。あたしゃべつに、悪さをしたおぼえはござんせん」
「この人たちは、空栗荘の住人だ」
狢が言うと、サトリは「おや」と呟いて、やはり手にしていた煙管をけだるげに吸い付けた。
「では境界守のお知り合いですかね」

ふっと煙を吹きかけられて、ミヨシは顔をしかめた。
「おまえがミーちゃんかい」
「これはまた奇態なことを。あたしはそんな名じゃございませんよ」
「これに見覚えがあるやろ？」
ミヨシが取り出した空色のリボンを受け取って、サトリはそれをつくづくと眺めた。
やがて顔をあげてミヨシを見る。瞳のない切れ長の目がちらと一瞬光って、合点したように妖怪はニヤリとした。
「なるほどね。あのばあさん、まだあそこにいるんだね」
「飼っとった猫がおらんようになって、心配しとるで」
「ふぅん」
「おまえが行かんかったら、タエさんはいつまでもあのままや」
「それでわざわざ、あたしを連れにいらしたわけですか」
サトリは笑った。
「ごめんこうむりますよ。そんな昔の話をされましても。こっちはそこまで人間に何かしてやる義理もございません」
当然反論するかと思いきや、ミヨシはむっつりと口を結ぶ。
あの、と太一はとっさに声をあげた。だって、ついこの間まで一緒に暮らしていた相手に、



そんな素っ気ない言い方はないと思ったのだ。

「俺……ちょっとくらい会ってあげたっていいと思いますけど。タエさんはもうすぐあの洋館から引っ越すことになってるから……それで、よけい猫のことを心配してて」

「引っ越し？」

サトリは目の前のミヨシから、太一に視線を移した。切れ長の目に、ふたたび光がよぎる。

「おやまあ、こちらの兄さんはいろいろご存じないらしい」

ニヤニヤして、妖怪は煙管を振った。

「ねえ、兄さん。あたしがあのばあさんのところから消えたのは、かれこれもう十年も前のことでござんして」

「え……」

太一は呆気にとられた。

十年？

（でも、綸子はミーちゃんは少し前にいなくなったって）

困惑する太一の肩の上で、クロ爺は「ふぅむ」とおもしろそうに唸ると、ひょいと地面に飛び降りた。そのまま、そっぽを向いて煙草をふかしている狢の足下に寄る。とりあえず傍観者をきめこんだらしい。

「こいつは素人や。ほっとけ」

ミヨシが割り込んだ。
「ともかく、タエさんは今もおまえのことを待っとる。ここにおるのがわかって、綸子が賽河原町に道を繋げたんや」
「その女のことは知りませんねえ。あたしは会ったこともない」
「洋館におる付喪やで」
「嘘はついちゃあ、おりません」
サトリは肩をすくめると、煙管とリボンを帯に差し込んだ。兄さん、とまた太一に声をかける。
「どうしてもと言うのなら、兄さんがそこに持っているものをいただけませんかね。それならあたしも考えないでもない」
「え、まさか、お金？」
それは十遠見の発想である。
「いえいえ、その上着の隠しにあるものを」
言われて太一はポケットに手を突っ込んだ。
（あ……）
思い出した。アカネを探しに行く時に、紙風船をこのジャケットのポケットに入れて、そのまま忘れていたのだ。

どうしてわかったんだろうと、不思議に思いながら、
「これ？」
折り畳んだままの風船を取り出して、太一が差しだそうとすると、サトリはニィと笑った。
「ついでに膨らましちゃあ、もらえませんかね」
「はあ」
息を吹き込もうとしたとたん、ミヨシが太一の手から紙風船をひったくった。
「アホ。呼気を妖怪に渡すヤツがおるかい！」
「コキ？」
「自分の吐いた息や。体内を巡ったあとの息やから、その人間の気を帯びとる。こいつの狙いは、おまえの生気を吸い取ることや」
「え、え？」
サトリは声をあげて笑った。
「これっぽちの大きさなら、ほんの二、三日、寿命が縮むだけですけどねえ」
「――次にまたこういう真似をしてみい。許さへんで」
サトリに向けたミヨシの声音は、ひやりと凍るようだった。
「おお、おっかない。ねえ、小さいほうの兄さん。これでおわかりでございましょう。あたしはね、人間の心を読んで、知った顔に化けて安心させて、その人間の生気を吸い取っちまうって

妖怪でして。人間にしてみりゃ、ロクなもんじゃござんせんよ」

まるで手品のように、握りしめたミヨシの手から紙風船をひょいとつまみあげると、サトリは自分で息を吹き込んで、それを膨らませた。ぽんぽんと手の甲の上で転がす。赤や緑や黄色の色紙を貼り合わせた風船が、宙に踊った。

なるほど確かに、ずるがしこく人間を騙して生気を吸い取るというのなら、サトリは危険な妖怪の部類だろう。

（もしかして、猫に化けてタエさんと一緒にいたのも――）

「一緒にいたのも、あのばあさんの生気を吸い取るためじゃなかったのか」

サトリは投げ上げた風船を、ふわりと受け止めて、言った。

「兄さん、今そう考えたね」

太一は目を瞠る。

（そっか、心を読むから）

「心を読むから相手の考えていることがわかるんだ。――ええ、そうでございますよ。どうだね、兄さん。これでもまだ、あたしをばあさんのところへ連れて行きたいかい？　本当は気味が悪くて、あたしのそばにいるのもイヤなんじゃござんせんかねえ？」

ぽん、と紙風船が宙を舞う。

「心を読まれて嬉しい人間なぞ、いやしませんでしょう。誰だって、心の中には触れられたく

ないものがある。人間のくせにこんなところへ来るくらいだ、ねえ兄さん、あんただってさぞかし心の中では――」

「おい、サトリ」

そっぽを向いていた狢が、横目でサトリを睨んだ。

「たいがいにしやがれ。さっきから聞いてりゃあ、つまんねぇことをごちゃごちゃと。その兄さんの事情なぞ、てめぇにゃ関係ねえだろう。どうもてめぇは、ひねくれてていけねえや」

サトリは鼻白んだように、笑みを顔から消した。

帯からリボンを抜き取って、ミヨシに突っ返した。

「ともかくごめんこうむります。じゃあ、あたしはこれで」

くるりと背中を向けた妖怪を見て、太一はふと思った。

(でも、タエさんのことは嫌いじゃなかったんじゃないかな)

家の中に入ろうとしていたサトリの足が止まった。太一を振り返る。

「なんでそう思うんです?」

(だって嫌いだったら、二年も一緒に暮らしたりしないと思うし)

兄さん、とサトリはため息をつくような声で言った。

「いくらあたしが心を読めるといったってね、手を抜かずにそういうことは、口で言っちゃもらえませんかねえ」

「あ、すみません。えっと、サトリさんはタエさんのことが――」
「いえいえ、それ以上はようござんす」
せっかく口で言おうとしたのに、サトリは素早くさえぎった。
ぽん。今度は掌の上で、紙風船を転がす。
「わかりましたよ。兄さんにはこいつをもらっちまいましたから。まあ、あたしの気が向いたらそちらに出向くということで、よしとしていただきましょうか。ではごめんなすって」
ぴしゃりと、長屋の戸が閉ざされた。

「なんでえ、オイラもおんだされかよ」
ぼやく狢も一緒に、一同はともかく長屋をあとにした。
「悪かったな、兄さん。オイラが謝ることじゃねえけどよ、あいつは人間の世界に長く暮らしすぎて、いろいろ屈折しちまってるんだ」
道すがら、すまなそうに言う狢に、太一は「はあ」とうなずいた。
「事情は薄々わかったがの」
太一の肩に戻ったクロ爺が言う。
「しかしサトリは、人間を殺したことは一度もないぞ」
「そうなんですか？」

「頭の回るヤツじゃからな。いつも殺さん程度に生気を吸い取る。殺してしまえば、人間たちも黙ってはおらんからのう。そこのところは計算ずくじゃ」
「ところで、ミヨシ坊。今回はずいぶんとおとなしかったじゃねえか」
煙管の先を振って、狢はミヨシを振り返った。
「何がや」
「力業なおまえさんのこった、ぶん殴ってでもサトリを連れて行くのかと思ったぜ」
からかうような口調に、ミヨシは肩をそびやかせる。
「妖怪に無理強いする気はあらへん」
「へえ」
「俺は、何がなんでも妖怪をどうにかせなあかん立場やないしな」
「だから半人前って言われるんじゃねえか」
かまへん、とミヨシは呟いたようだった。その時の彼の言葉の意味を、太一が知るのは少しあとになってからのことだ。
「オイラはおまえさんの、そういうとこが好きだ」
狢はからからと笑った。
「ところでサトリだがな。あいつはもう半分くらいは、その誰かさんに会いに行く気になっているぜ。ひねくれっちまってるから、素直になれねえだけさ。それでもまだ意地をはるような

ら、オイラが首根っこを摑んで引っ張り出してやらあ」
「えらく乗り気じゃのう、狢よ」と、クロ爺。
「なぁに、てめえでやったことの尻拭いは、てめえでやれってこった。――じゃあ、オイラはここで帰るとするぜ」
「ふむ。わしも退散しよう」
妖怪たちが去り、太一とミヨシも今日のところは空栗荘に戻ることにした。

4

翌日の日曜を、太一は何となく一日だらだらと過ごした。
夜になって、夕食をすませて自分の部屋にいると、階下で玄関の呼び鈴が鳴るのが聞こえた。ほどなくドアをノックされたので出てみると、お露さんだ。大家が呼んでいるという。
「出かけるから、上着も持って来いとさ」
「誰か来たんですか？」
猫だよと言って、お露さんはニッと笑った。
それで急いでジャケットを摑んで階段を下りていくと、ミヨシが玄関で彼を待っていた。戸口に顎をしゃくって、

「サトリが来た。これから洋館へ行くで」

玄関の戸は開いたままで、外から柊二郎の声が聞こえている。

靴を履いて玄関を出ると、驚いたことにそこは「こちら側」――人間の世界のほうだった。見えているのは妖怪の町に通じる坂道ではなく、道路に面した空栗荘の前庭である。

ということは、妖怪たちは境界守である柊二郎からすでに、あちらとこちらの境界を越える許可をもらっているのだろう。

ところで、どうして妖怪たちなのかというと、

「よう、兄さん」

なぜか柊二郎の隣に狢が立っていた。いつもの格子柄の着物ではなく、今日は落ち着いた黒っぽい着流しだ。

「なんでおまえがおんねん」

「そりゃねえよ、ミヨシ坊。こいつの気が変わって逃げ出さねえよう、ここまでついて来てやったんじゃねえか」

「――ふん。おもしろそうだから見物に行くと言ってきかなかったのは、どこのどちらさまでござんしたかね」

突っ慳貪な声がして、そばの植え込みから小さな影が出てきた。

金色の目をした、小柄な真っ白い猫だ。

「わっ、ミーちゃん……!?」

太一が思わず呟くと、サトリは猫の顔で露骨にイヤそうな表情を見せた。

「その呼び方はやめちゃもらえませんかねえ。ミーミー鳴くからミーちゃんだなんて、まったく人間さんの洒落っ気のなさと言ったら」

「おや。子猫みたいにミーミー鳴いていたんですか？　それにまた、サトリの化け物が思わずスリスリしたくなるほど可愛らしい姿になっちゃって、まあ」

柊二郎がへらっと笑って言うと、サトリは気分を害したように白い尻尾をぶんぶん振った。確かに可愛い。

「ふ、ふん。何か悪うござんしたかね。境界を越える前に、人間に見られても怪しまれない姿になれって言ったのは、あんたじゃないですか」

（ああ、だから二人ともこの姿なのか）と太一は納得した。

変哲もない着流しの男と猫ならば、うっかり人に見られてもまさか妖怪とはバレないだろう。

「何ならこんな馬鹿げた格好は今すぐやめて、もとの姿に戻ったって――うぎゃあぁ!?」

横からにゅっと伸びてきた手が、サトリの尻尾を掴んだ。

「猫っ、かわいーっ」

「あれ、アカネ？」

柊二郎の後ろからいきなりあらわれた付喪の少女を見て、太一は目を丸くした。

「もうガラスケースから出てもいいのか？」
「うん。柊二郎がいいって言ったもん」
こらこらアカネちゃん、と大家は苦笑した。
「今回は特別ですよ。帰ってきたら、ちゃんとまたケースに入ってもらいますからね」
そうしないと僕がお露さんにどやされます、と小声でつけ加える。
けれどもアカネは、うんうんと返事だけはするものの、猫をかまうのに夢中だ。逃げだそうとするサトリをうんしょっと抱き上げた。
「ちょ、ちょっと、これじゃ逆さまだって！　何するんだい、失礼だねこの付喪は！」
なるほど、これではどんな猫でも、シャーとかフーになるだろう。
「はい、アカネちゃん。そこまでそこまで。サトリが目を回してますから」
空栗荘の大家はアカネの腕から、ちょっとよれよれになった猫を取り上げた。
「いいですか、アカネちゃん。今夜外出していいと言ったのは、君がお友達に『猫を探す』という約束をしていたからです。誰かと約束をしたら、それは守らないといけません。――だからね、『もう黙って一人で外に行かない』という僕との約束も、これからはちゃんと守れますね？」
アカネは柊二郎を見上げると、こっくりと頭を動かした。
「うん。さっき、指切りげんまんしたもん」

「よろしい。では太一君たちと一緒に、お友達のところへ行ってらっしゃい」
「大家さんは行かないんですか？」
太一が訊ねると、柊二郎はふわっとアクビをして、だってこれはミヨシ君にまかせた仕事ですからと言った。
「僕は部屋に帰って、もっぺん寝ます」
「はあ」
人間と妖怪と付喪といういささか妖かし度の高い一行を、人の世の細い三日月がはるか空から見下ろしていた。

幸いなことに、途中の道に人影はなかった。正体がバレるおそれはないとはいえ、夜道を男三人に少女と猫が連れ立って歩いていたら、やはり目立つに違いない。誰にも見られないにこしたことはなかった。
「こっちだよ」
先に立ってぴょんぴょん跳ねるように歩いているアカネが、時おり振り返って道を示す。付喪どうしで惹かれあって、それで行き先がわかるのだろうか。
ひとつの角を曲がった時に、おやと誰かが呟いた。肌に触れる空気が、明らかに変わったのがわかった。

そこは、先を透かし見ることもできないほど暗い道であった。
闇の中に、ぽつりと小さく炎の輝きが揺れている。すぐにそれは近づいてきて、火色の光の輪の中に、角灯を提げた綸子の姿があらわれた。金色の髪が炎に明るく透け、影の落ちた瞳はいっそう緑の色が濃い。
「お迎えにまいりました」
「わーい、綸子！」
アカネが彼女に駆け寄った。
「ようわかったな、俺らが来ること」
ミヨシが言うと、綸子は微笑んだ。
「はい。懐かしい気配がいたしましたから」
その気配の主は、金の目を光らせていかにも胡散臭げに彼女を見上げた。
「さあて。あたしはさっぱりあんたに見覚えがござんせんが」
「私はよく覚えています。あなたがうちにいらした最初の頃は、何度も家から追い出そうとしました」
「ふぅん？」
「扉で尻尾をはさんだり、戸棚の物を頭の上に落としたり、納戸に閉じこめてしまったり。あなたが悪い妖怪ではないかと疑っていたのです。あの折は、申し訳のないことをいたしまし

た」

ちょっとサトリが気の毒になるようなことを言って、綸子は慎ましやかに頭を下げた。

「いい妖怪でもありませんがね」

サトリはそっぽを向いてから、何かに気づいたようにまた綸子に視線を戻した。しげしげと見てから、猫の顔でニヤリとした。

「ああ、わかりましたとも。そうだよ、あんたはいつもあのばあさんのそばにいたんだ」

「はい。ただ私は、あなたの前でこの姿になったことはありませんでしたから」

綸子はまた微笑みを浮かべた。

そうして彼女が踵を返すのと一緒に、角灯の光がふわりと回った。炎の光が行く手を照らす。

「どうぞ、こちらへ」

とたんに、視界がひらけた。

一面の、菜の花だった。

藍色の夜空の下、見渡すかぎりに広がる野原を埋め尽くして、黄色い花がみずから淡やかな光を放っている。風もないのに揺らめいて、ところどころで流れる霧のように光がたなびいていた。

その不思議な明るさと静けさに包まれて、遠く、赤いレンガの洋館がぽつんと建っているの

が見える。

ここは一体どこなのだろう。別の土地だというが、本当に現実の場所だろうか。まるで、幻想的な絵の中に嵌まり込んだみたいだ。

ぼうっとあたりを見回して、ああこれは綸子の色だ、と太一は思った。

明るい黄色の花と、瑞々しい柔らかな緑の葉。鮮烈なのではなく柔らかくて優しい、その春の色彩の取り合わせが、綸子を思わせる。

野原には細い道が一筋つづいていて、角灯を掲げた綸子が皆を先導して洋館へと向かった。時おり、菜の花の海に潜ってアカネがきゃあと笑い声をあげる。ミヨシは黙り込み、狢は神妙な顔で煙管をくわえ、サトリはぶつぶつと何か呟きながら一番後ろからついてきた。

やがて洋館の前まで来て、

(あれ……ちょっと……)

ヘンだと太一は思った。前に来た時と、家の印象が違う。雰囲気みたいなものが。

何だか、空っぽなカンジだ。

洋館の窓には明かりも灯っていない。まるでそこには誰も住んでいないみたいに。

わけのわからない寂しさにとらわれて、太一の胸がきゅっと鳴った。

「――綸子」

ふと気づくと、タエさんが玄関のポーチに立っていた。足が悪くて外に出ることもできない

と言っていた老婦人は、最初に見た時と同じ藤色の服の肩にショールを羽織って、笑って訪問者たちを出迎えた。

「まあ、アカネちゃん。また来てくれたのね。お友達も一緒に」

「見つけたよ、タエさん。あのね、ミーちゃんを見つけたよ！」

駆け寄ったアカネのおかっぱ頭を撫でようとして、タエさんの手がハッとしたように止まる。

「……ここまできて往生際の悪い。とっとと行きやがれ」

狢がこそっと囁いて、最後尾でぐずぐずしている猫の尻を足で押しやった。

「ミーちゃん？　まあ、ミーちゃん、よかった。帰ってきたのねえ」

老婦人は身を屈めると、「おいで」と猫に向かって腕を広げた。

サトリは「ちっ」と舌打ちしてから、思い切りよくタエさんのもとへ走った。

「おまえ、どこへ行っていたの？　心配したのよ。お腹が空いたでしょう。どこも怪我はしていない？」

タエさんは猫を抱き上げて、優しく撫でた。

「いい子ね。よしよし」

「み……みーみー」

猫の鳴き声が棒読みというのも、珍しい。

ぶっと狢の口から妙な音が漏れた。赤い顔をして肩を震わせている。その横っ腹をミヨシが

肘でつついた。
「笑ってやるなや。可哀想やろ」
「みんなでミーちゃんを探してきてくれたのね。どうもありがとう。——あら、綸子。この子のリボンはどこかしら。空色のリボン」
ミヨシが預かっていたリボンを「ほれ」と差し出すと、綸子は受け取って、猫の首にふわりと結んだ。
かわいー、とアカネが歓声をあげる。猹はついにくるりと後ろを向いてしまい、タエさんの腕の中でサトリは「覚えていろ」といわんばかりにその背中を睨んだ。
「ミーちゃんが戻って、これで安心なさったでしょう」
「ええ」
目の前で微笑み、問いかけた綸子に、タエさんはうなずいた。
「もう大丈夫ですか?」
「ええ、大丈夫よ。この子のことだけが心残りだったの」
老婦人は優しく大切そうにまた猫を撫でると、そっと地面に下ろした。
「あのね、ミーちゃん。私はもうここから出て行かなければいけないの。あなたも一緒に連れて行こうと思って、それで待っていたのだけれど」
タエさんは猫に向かって屈めていた身体を伸ばすと、綸子を見た。

「そうね。そんなことは無理だったわねえ。……まあ私ったら、なんてうっかりしていたのかしら」
「はい」
菜の花の灯す光が、洋館のまわりでさんざめいている。猫の目のような三日月は細く細く金色に輝いて、地上を見つめていた。
太一の胸が、きゅっとまた痛む。
「ごめんなさいね、ミーちゃん。せっかく帰ってきてくれたのに。あなたは一人で大丈夫かしら」
「みー」
「あなたがいてくれたから、毎日寂しくはなかったわ。——どうか、元気でね」
猫は口を開けかけて、でももう声を出さなかった。じっとタエさんを見上げた。
太一、とミヨシが低く囁いた。
「教えてへんかったけどな、タエさんは」
「……もうこの世にはいない人、なんですか？」
「知っとったんか」
「いえ。でも……」
とうに死んでしまっていた人なのだとわかっても、なぜか驚きはなかった。

彼岸と此岸をどれだけ隔てても、それを簡単に越えてしまう想いや願いがあることを、太一は空栗荘に来てから幾度も見てきた。

「今回、俺が大家から請け負った仕事は、タエさんを成仏させることやったんや」

そのためには、タエさんがただひとつ、この世に残してしまった願いを叶える必要があった。

――妖怪だろうが何だろうが、もう一度、彼女が一緒に暮らしていた猫をここへ連れて来なければならなかったのだ。

「綸子、あなたも。夫と私がこの家へ来てから、何十年もずっとそばにいてくれたわね。どうもありがとう」

「幸せでしたか？」

「ええ、とても」

唄ってもらえるかしら、とタエさんは言った。あなたがいつも唄っていた歌が聞きたいわ。

綸子はうなずき、鈴を振るような声で歌いはじめた。

――ねんねんころり　母の歌に
　月ものぼる夢の小道
ブラームスの子守歌だ。
――ひらりひらり　ひらり蝶々
　花のかげへ宿をかりに

繰り返し、歌いながら綸子は手を差し伸べる。
たった今までタエさんが立っていた場所に、掌に載るほどの大きさの、丸い光が浮いていた。それを両手で包み込み、一度胸に抱きしめるようにしてから、綸子は老婦人の魂を藍色の夜空へと解き放った。
「さようなら、タエさん」

野原を埋める菜の花が、ゆるやかに波打った。まるで燦めく光がこちらに向かって、幾重にも押し寄せてくるようだ。
「ありがとうございました」
綸子は皆を振り返ると、静かに頭を下げた。
「ようやくこれで、私も役目を終えることができます」
「役目って……？」
思わず太一が問い返すと、綸子は慎ましい笑みを口元にたたえた。
「この家の住人たちを見守ること。――この洋館に住む者が、いつも幸せであるようにと、それがあの人の願いでしたから」
「あの人？」
「――あの人は、異国から船に乗ってこの国へ来ました。あの人は教師でした。そして幼い

頃を過ごした故郷の家をそっくり真似て、この洋館を建てました」

胸に両手を置き、まるで歌うように、綸子はつづけた。

「あの人はこの国を愛していました。この国の女の人と結婚し、けれどもその人を亡くして、傷ついた心を抱えてこの国を去りました。その時に、あの人は願ったのです。自分が建てたこの家が、幸福な場所になるように。この先ここに住む者が、笑って満ち足りた日々を送ることができるように、と」

遠い昔の話です、と綸子は言う。

「そりゃあ、昔の話でござんしょうよ」

彼女の足下にいたサトリは、前肢をひっかけてリボンをするりと取り去ると、むくむくともとの姿に戻って立ち上がった。

赤玉のかんざしを髪に挿しなおしながら、素っ気なく、

「その家が、こうして付喪になっちまうくらいなんですから。まあ、あたしら妖怪にとってはたいした年月ではないにしろ、たっぷり百年は過ぎているんじゃありませんかね」

「えっ」とか「げっ」とか唸ったのは、その場にいた人間二人だ。

「じゃあ、綸子さんは」

はい、と綸子はニコリとうなずいた。

「あの人の建てたこの洋館、これが私の本体なのです」

家が付喪化したんか、とミヨシは呟く。
「気がついていなかったんですかね」
「アカネは知ってたもん」
「おまえさんがた、修行が足りねぇよ」
市松人形の付喪と妖怪が声をあわせる。
「うるさいわ。見た目にギャップがありすぎやろ。家に手足が生えとったほうが、なんぼかわかりやすいで」
そっか、と太一は洋館と綸子を見比べた。
（この家が綸子さんなんだ）
家も九十九年を経れば、付喪となるのか。
なんかスゴイ、と太一は思った。そうするとあっちこっちにある古いお寺とか建物なんかも、もしかしたら付喪なのかもしれない。
（奈良の東大寺とか、京都の金閣寺とか。時々、人間の姿になってたりしたら）
想像すると、ちょっとコワい。金閣寺なんて、ものすごく派手な人っぽい。
「えっと、百年以上前っていったら、明治時代……？」
「まあ、ありがちやな」
なるほど、綸子が外国人に見えるのは、彼女をつくったのが外国の人だったからか。

「あの人が去ったあとに、新しい住人がここへやって来ました。その人たちがいなくなれば、また別の住人が。長く住む者もいれば、すぐに引っ越してしまった者もいます。でもこの洋館で暮らしている間、彼らは皆、幸せそうでした。——あの人の願いが、ここには残っていましたから」

過ぎた日々の記憶をたぐって、綸子のガラスのような瞳が、ふと遠くを見る。

「そうして、タエさんはこの洋館の最後の住人でした。彼女が亡くなったあとには、ここに住む人はもう誰もいなかったのです」

どうして、と太一は訊ねた。なぜか、ドキリとする。

——役目を終えると綸子は言わなかったか。彼女の役目は、洋館に住む人々を見守ることのはずだ。

「古いからでしょう。今の時代には、住むにはもう不便な家になってしまったのだと思います。そろそろ取り壊すべきだと、私を見に来た何人もの人が言っているのを聞きました」

「そんな……じゃあ、この家がなくなってしまったら、綸子さんはどうなるんですか？」

言ってから、訊かなきゃよかったと太一は思った。

「消える」

ぼそっとミヨシが答えた。

まあなぁ、と狢も口を開いた。

「本体がなくなっちゃ、付喪は終いだからな」
その手から煙管を取って一口吸い付けてから、サトリは煙と一緒に言葉を吐いた。
「ばあさんが死んだのは、いつのことです？」
「あなたがいなくなってから、半年後に」
綸子は妖怪を見て、うなずいた。
「病気ですかね。ばあさんが倒れたのは、知っていましたよ。あたしはそばで見ていたもの」
「ええ。そのまま快復はしませんでした。もうお歳で、身体が弱っていたから仕方がなかったのでしょう。でも亡くなるまで、あなたのことを心配していました」
それには返答せず、サトリは黙って煙管を咎に返した。
太一はもう一度、洋館を見つめた。
空っぽな家。もう長い間、ここには誰も住んではいなかったのだ。
どうしてだろう。それを思うと、沁みるように胸が痛むのは。
「それで、あんたはどないする気や」
肩をすくめて、ミヨシは訊ねた。
「本当ならタエさんが亡くなった時に、私の役目は終わっていました。本当なら、その時に私はこの世界から消えてかまわなかった」
「せっかく付喪になったってのにかい？」と狢。

菜の花がまた揺れる。野原はいっそう明るくなって、まるで陽射しの中の陽炎のように、透き通った黄色い光がゆらゆらと空へ立ちのぼっていた。

綸子は微笑った。

「あの人の願いのために、私はここにいたのです。あの人もきっとこれで、喜んでくれる。それで私にはもう十分です。……でも」

「死んだばあさんの魂がここを離れなかったわけですか」

サトリはそっぽを向いて言った。

「はい」

「幸せだったんですかね。その、……あのばあさんの一生ってのは」

「ええ。子供はいませんでしたけど、仲の良いご夫婦で、その夫が亡くなったあとも静かに穏やかにここで暮らしておられました。それはあなたもご存じのはず」

「ええ、ええ。存じておりますとも。で、その幸せなお人が今まで成仏できなかったってのは、あたしのせいでござんすねえ」

一緒に暮らしていた猫がいなくなった。ただそれだけのことが、心残りとなって老婦人の魂をこの世に引き留めてしまったのだ。

あたしにはよくわかりませんね、たかが猫一匹のことで、とサトリは横を向いたまま言う。

「それであんたは、ここでタエさんの世話をしとったんやな」

「はい。たとえ亡くなった方でも、彼女がこの洋館の住人であることに、かわりはありませんでしたから」

でもできることならば、と綸子はうなずいた。

「タエさんの心残りを、取り除いてあげたかったのです」

猫に化けていた妖怪を探して、賽河原町までやって来た。洋館の最後の住人を、見送るために。

「来てくださって、ありがとう」

綸子を横目で見て、サトリは顔をしかめた。

「……あんたに礼を言われる筋合いはございませんね。ただのけじめってやつですよ。ばあさんにもう一度会いたかったわけじゃ、ござんせん」

ひねくれ者めと、狢が呟く。

その時だった。

それまで真っ暗だった洋館のすべての窓に、いっせいに光が灯った。菜の花の色をした明かりだ。

瞬く間に、野原に満ちた輝きが押し寄せてきて、建物を包み込む。熱のない、静かな炎のように。

「今はもうずいぶん変わってしまいましたけど、昔はこの洋館のまわりは広い野原でした。あ

なた方が目にしているのは、あの人の愛した懐かしい風景です。春には見渡すかぎりの菜の花畑。あの人は、この国の春が一番好きでした」

綸子は掌で光を一掬いすると、角灯に指を近づけた。いつの間にか消えていた角灯が、ふたたび明かりを灯す。それをミヨシに手渡した。

「これを持っていってください。つつがなく空栗荘へお戻りになるために」

そうして綸子は一足さがると、ワンピースの裾を両手で軽くつまんで、膝を屈めた。外国の言葉で何か言ったが、まるで不思議な呪文のように聞こえた。

もう行くのかい、と狢が言う。

「はい。……これでやっと、あの人に会いに行くことができます」

あの人の一番好きな季節に、あの人の一番好きな花と一緒に。

少女のようにはにかんだ、でも美しい笑顔で綸子は笑った。

さようなら。

鈴のような声は、光の中に溶けて。

次の瞬間。——彼女の姿はもう、どこにもなかった。

光が翳り、あたりは真っ暗になった。

気がつくと野原も菜の花も消えていて、ただしんとした夜の中、ミヨシが手にした角灯だけ

が輝いていた花の名残をとどめている。
そこは夜目にも寂しく荒れた前庭で、仕切りの柵の向こうは明かりのない路地だった。
太一は洋館を見つめた。
付喪として魂を宿していた建物は、今はもう古く朽ちかけた建物でしかなかった。誰も住んでいない家というのは、なぜこんなに空虚な感じがするのだろう。
（どうしてなのかな）
太一は思う。
どうして人ではないモノたちは、いつでも、こんなに簡単に消えてしまうのだろう。
娘に会いたがっていた『でんでん太鼓』も、戻るべき場所を探していた『言霊』もそうだった。まるで最初から、どこにも存在なんかしていなかったみたいに、それこそ瞬きひとつのうちに、いなくなってしまうのだ。
どうして。――そのことを、こんなに寂しいと思うのだろう。
ぼんやりしていた太一の手に、小さな指が触れた。
見ると、アカネが彼の手を摑んで、じっと見上げている。
「あのね、綸子は幸せだったんだよ」
付喪の少女は、大きな黒い瞳を瞬かせもせずに、そう言った。
「え……」

「ここに住んでいた人たちをずっと見守っているのが、楽しかったって。もうすぐきっと、自分をつくってくれた人に会えるから、それが嬉しいって」
「そう言ってたんだ」
「うん」
それでね、とアカネは内緒話をするように、爪先だった。身を屈めて耳を寄せた太一に、囁いた。
「アカネはいなくなったりしないよ。ずっと太一といるよ。でもね、もしアカネがいなくなっても大丈夫なの。太一のことを探して、うんと探して、またちゃんと会いに来るからね」
「……」
まるで、太一の胸の中にある痛みを知っているみたいに。
うん、と太一はうなずいて、アカネのおかっぱ頭を撫でた。
「行くで」
ミヨシはすでに木戸のところにいて、角灯を手荒に揺らした。
「おいおい、せっかくの火が消えっちまうぞ」
「はよ化けんかい、サトリ。その格好で帰る気か」
「ああ面倒だ。もうこのままでよござんしょう」
「アホぬかせ、誰かに見られたらどないするんや」

角灯の黄色い光が、滴のように地面に零れ落ちる。空栗荘へと戻る道すがら、彼らの辿ったあとには点々と、菜の花が咲いて揺れていた。

5

「じゃあ、オイラたちはこれで」

妖怪の町へ向かう坂の途中で、狢は見送りに出たミヨシと太一に会釈した。空栗荘の玄関を通過した時点で、着ているものはもとの格子柄の着物に戻っている。

「あぁぁ、まったく。一騒動でしたよ。あたしは当分、人間と関わり合いにはなりたくござんせん」

「バイバイ、ミーちゃん」

「いちいち失礼だね、このチビ付喪は。二度とミーちゃんだなんて呼ばないでおくれ。それとね、あんた、本物の猫はさっきみたいに無理矢理に抱っこするんじゃないよ」

手を振ったアカネに、いかにもイヤそうに顔をしかめて、サトリは言った。こちらももちろん、もとの姿になっていたが、結局最後まで男なのか女なのかわからなかった。

さよなら、と太一も妖怪たちに挨拶した。

「おうよ、またな」

「ふん。あたしはもうごめんだよ」
だが、踵を返して行きかけて、サトリは何かためらったみたいに見えた。
すいっと身を滑らせるように太一の前に立つと、
「あたしはね、男でもなけりゃ女でもありませんよ。今のこの姿だって、本当にそうかと言われれば、あたしにだってもうわからない。人の心を読んで、相手の思うとおりの姿になる妖怪でござんすから」
そうして赤い着物の袂を揺らすと、サトリは太一に向かって腕を伸ばした。
「――!?」
狢がぽかんと口を開け、アカネはきょとんとし、ミヨシが怪訝に眉をひそめた。
抱きしめられて、太一は目を見開く。
(え、ええ?)
その瞬間、ぞわっと気味悪く背中を這ったものがあった。
――ごめんね。許してね。
この腕を知っている。
息をするのも忘れて、太一は瞳だけを動かして、すぐそばにあるサトリの顔を見た。一瞬、頭の中が真っ白になった。
妖怪は、九歳で別れた彼の母親の顔をしていた。

心臓の鼓動が跳ね上がり、悲鳴をあげて太一は、サトリの腕を振り払った。
「……やっぱり、そうだ」
サトリはもとの顔に戻って、言った。瞳のない切れ長の目に、ちらと光がよぎって消える。
「あんた、他人に触られるのが怖いんだね。気持ちが悪いんだね」
何度も生唾を呑み込んで、太一はようやく息をついた。唇を噛んで黙っていると、かまわずサトリはつづけた。
「昨日会った時にねえ、どうも妙だと思いましたよ。兄さんの心がうまく読めなかった。いえ、表面的なことはわかるんですけどね、もうちょっと深いところにあるものが。でもね、なるほどあたしにゃわからなかったはずだ。——兄さん自身が気づいていないんだから」
「何、を？」
「自分の中にある傷を」
「——」
太一は妖怪を凝視した。
「物事ってのは、自分の見ているひとつきりが正しいわけじゃござんせん。あんたはもう、おっかさんに怯えるしかなかった小さな子供じゃないでしょう。何もかも、壊れるばかりじゃ、ありませんよ」
太一は首を振った。意味がわからない。

サトリは肩をすくめると、今度こそくるりと踵を返した。昨日の紙風船のお礼です、と呟くように言う。

紙風船のお礼はタエさんに会うことだったと思っていたのに、どうやら違ったらしい。

「よけいなことを申しましたかね。では、ごめんなすって」

「なあ、サトリ」

坂の下まで来て、狢はちらりと振り返った。ミヨシの持つ角灯の火がまだ見える。アカネがこちらに手を振っている。

「おめえ、あのばあさんから生気を吸い取るつもりだったのか？」

「あたしが人間に近づくのに、それ以外の理由があるもんかね」

赤い着物の裾を引きずるようにしながら、一足先を歩いているサトリが、素っ気なく応じた。

「ま、年寄りで吸い取る生気もほとんどないのはわかっていたけど、仕方がない。昨今は人間も用心深くなって、ちょうどいい獲物がなかなか見つからなかったんでね」

「けどよ、なんでまた、猫だったんだ？」

狢は心底、不思議そうだ。

「……あのばあさんには、会いたい人間が誰もいなかったんだよ」

「なんだい、そりゃ」

「ダンナは死んで、子供はいない。訪ねてくる知り合いもいない。確かに、不幸ってわけじゃなかったさ。あのばあさんは、思い出だけで十分満足していたんだ。でもさ、誰かに会いたいって欲がないのも、やっぱり寂しいことじゃないかねえ」

狢は煙管を取り出して、くわえた。もう一度振り返ったが、もう角灯も空栗荘も見えなかった。

「それで誰にも化けられなくて、とっさに猫になったんだ。猫なら怪しまれやしないと思ってさ。――そうしたら、まいったね。あのばあさん、庭にいたあたしをいきなり抱き上げて、まあ可愛いときたもんだ」

サトリは小さく鼻を鳴らす。

「あたしは、それまで知らなかった。――人間の手が、あんなにあったかいものだなんて」

帯から空色のリボンを抜き取って、サトリは顔をしかめた。結局、誰にも返せずに持ち帰ってきたものだ。ちょっと考えて、長い髪の毛の一房にそれを結わえた。

妖怪の町は、夜が更けるほどに賑やかだ。家々の窓には明かりが皓々と灯り、物売りの声がいつまでも響く。

通り過ぎた顔見知りに、煙管の先で挨拶してから、狢はふうっと煙を吐いた。

「本当はおめえ、ばあさんには手を出さなかったんだろ」

「さあ、どうだかね」

「まったく、ひねくれてるぜ、おめえはよ」
「……生気を吸い取ろうが吸い取るまいが、あたしのせいでばあさんが命を縮めたことにかわりはないさ。妖怪なんぞと一緒に暮らして、毒気にあてられちまったんだ。あたしもマヌケだね。ばあさんが病気になって倒れて、それでやっとそのことに気がついた。だからさ……」
そばからいなくなったってのに。サトリは呟いた。
「まさか、あたしなんかのために、あの家に居着いたまま成仏できなかったなんて」
ちょうど賑やかな通りを抜けたところだった。物売りの声が遠くなる。
ひらり、と小さな光が妖怪たちの目の前を横切った。黄色い花弁のひとひらが、風に舞ったように見えた。
——ありがとうね。
サトリは足を止めた。あっという間に消えた光の行方(ゆくえ)を追うように、目を細めた。
「イヤだね、これだから人間は侮(あなど)れない」
やがて、泣いているような顔で笑った。
「あたしのこと、わかっていたのかね。わかっていながら、ミーちゃんだなんて呼んでいたのでござんすか」
「こいつぁ、サトリの化け物もかたなしだ」
狢はニヤリとした。

「うるさいね。そういうあんたはどうなのさ、ええ狢？」
「オイラが何だってんだ」
サトリはふと、真顔になって狢を見た。
「ずいぶん、人間と懇意にしているじゃないか。でもあんた、人間に恨みがあったんじゃなかったのかい？」
狢は黙り込む。
「……そうだな」
しばし経って、煙管の吸い口を噛みしめると、低く言った。
「恨みを忘れたわけじゃねえ。確かに、ちょいとばかり深入りしすぎちまったかもしれねえな」

翌日、空栗荘の庭に一面の菜の花が咲き乱れた。
その光景を見て、一番喜んだのはお露さんだ。
食費が助かると言って、その日から朝に晩に、おひたしだの和え物だの炒め物だのスパゲティーだのと、菜の花をふんだんに使ったおかずが空栗荘の食卓を賑わすことになったのであった。

三章　春来るあやかし

1

三月の半ば。桜のつぼみが膨らんで、テレビでは毎日のように開花時期の予想が伝えられていた。今年の桜は、例年よりも少し早そうだ。

「ただいま」

学校から帰って玄関の戸を開けたとたん、太一は首を傾げた。

甘い匂いがたちこめている。焼きたてのお菓子の匂い。けっこう強烈だ。

（十遠見さんかな？）

国家公認術者はずっと仕事が忙しいらしく、このところはほとんど顔を見ていなかった。今日は早く戻ったのだろうか。

カバンを持ったまま食堂をのぞくと、果たして大皿に山盛りのクッキーを前にして、お露さんが渋い顔で茶を飲んでいた。

「おや、お帰り」
太一に気づいて、お露さんは湯呑みを置いた。
「早く手を洗って着替えておいで。今、十遠見がジンジャークッキーを焼いているから」
厨房をうかがうと、例によってスーツの上にフリフリのエプロンをつけた十遠見が、せっせと立ち働いているのが見えた。
「……珍しいですね。十遠見さんがこんな時間に空栗荘にいるなんて」
「昼前に戻ってきて、それからずっとあの調子で厨房を占領してるんだよ。そろそろ夕食の支度を始めなきゃいけないってのに」
お露さんはぶつぶつ言いながら、人のかたちをしたクッキーをひとつ、手に取った。
大きなクッキーだ。他にも星や動物のかたちをしたものもあって、凝ったことにゼリーや干しブドウや溶かして色をつけた砂糖で、マンガみたいな顔や模様がきれいに描いてあった。これひとつ作るのに、ずいぶん時間がかかりそうだ。
「あの男が作ると、なんでだかこんなものでもヒトガタに見えちまうねぇ」
ヒトガタというと、人間のかたちをした一種の御札のようなものである。人の身代わりとして使うのだと、いつだったかミヨシが言っていたが、一番最初に見た時にはトイレの表示みたいと太一が思ったことは内緒にしてある。
（いくらなんでもヒトガタって……、言われるとそう見えるから、すごくイヤだ）

お露さんはため息をつくと、果敢にもクッキーの頭部をばりっと噛み砕いた。タイヤキとひよこ饅頭は絶対に頭から食べるタイプだ。

ちょうどお腹の空く時間であるし、部屋に戻って着替えをすませると、ありがたくクッキーをごちそうになることにした。甘いものはそんなに好きではない太一だが、十遠見の焼く菓子はいつもとても美味しいと思う。

いただきますと厨房に声をかけたが、十遠見からの返事はない。作業に熱中しているのだろうが、なんだか鬼気迫るものがある。

「えっと、これ、お金はいらないんですよね」

「これで金を取るんだったら、逆に厨房の使用料をふんだくってやるよ」

太一は星形のクッキーをとって、齧ってみた。バターの風味とスパイスが効いていて、さすがにうまい。このあと夕食なんだからほどほどにしておくんだよと言いながら、お露さんが茶を淹れてくれた。

ヒトガタ、ではなくて人型のやつはさりげなくよけて食べていると、ぺったんぱったんとスリッパの音が近づいてきて、大家がぬぼーっと食堂に顔をのぞかせた。

「いやぁ、いい匂いですねえ」

「ふん。まったく、こういう時でなきゃ、自分から起きてこないんだからね」

お露さんが急須の中身を注ぎ足しに立ち上がった時には、柊二郎はすでに山盛りのクッ

キーの前で「いただきます」と手を合わせていた。
十遠見の焼く本職顔負けのケーキやクッキーの匂いにつられて、寝ている大家が飛び起きるという話は、どうやら本当だ。
「うほほほー」
よくわからない歓声をあげながらクッキーを頬張る柊二郎の前に、湯呑みを置いて、
「前にもあったね、こういうこと」
お露さんはぼそっと言った。厨房のほうを横目で見る。
「ええ」
ありましたね、と柊二郎はうなずく。
なんだかひっかかる言い方だな、と太一は思った。
「でも、十遠見さんがケーキやクッキーを焼くのって、そんなに珍しいことじゃないんじゃ……？」
まあ確かに、休日でもないのに昼間からクッキー作りというのは唐突だし、ずいぶん大量に焼いているし。何より、本人言うところの拝金主義者である十遠見がタダでお菓子を焼くというのは、ひょっとして天変地異の前触れではないかと思うが。
「今日のは、いつもとは違うってことさ」
お露さんはずずっと茶をすすった。

「ああ見えてわかりやすい男だよ。……どうやら、嫌な仕事をやらなきゃいけないようだね。お上の命令じゃ、仕方がないけど」

「嫌な仕事？」

太一が鳥のかたちのクッキーを取って首を傾げると、大家は困ったような笑うような顔をして、小さな声で言った。

「多分、妖怪を殺さなければならない仕事です」

その日、十遠見は大皿に山盛りふたつ分のジンジャークッキーを焼き上げた。

翌朝。

「はい、弁当」

「すみません」

「はい、クッキー」

「……え」

玄関で、弁当の包みと一緒にずっしりとクッキーを詰めた袋を持たされて、太一は目を丸くした。

お露さんは厳命とでもいうように、ぴしっと指を突きつけると、

「ここにいる連中だけじゃ、食べきれないからね。学校の友達にでもお裾分けしておいで」

「はあ」
というわけで昼休み、太一は迷うことなく采奈にクッキーを袋ごと渡した。
「わっ、どしたのこれ!?　あ、もしかして阿川君がっ？」
冬に鈴子さんのクッキーの一件があったので、太一は急いで首を振った。
「違うよ。昨日、十遠見さんが焼いたんだ」
「そなんだぁ。食べていいの？　きゃあ、これカワイイ！」
采奈がさっそく手に取ったのは、人のかたちのやつで、それを太一の目の前でぱくんと口に入れた。
（……足から食べるタイプ!?）
「うわぁ、これおいしー！　十遠見さんて、ケーキだけじゃなくてクッキーも上手なんだね」
「うん」
ふと、昨日の十遠見の様子を思い出した。焼き上がったクッキーの皿を黙って食堂のテーブルに置いて、黙って厨房の後片付けをすませると、そのまま何も言わずに自分の部屋に戻って行った。
それを見ていたら、なんだか喉がつまるような気がして、太一は結局クッキーをあまり食べられなかったのだ。
――妖怪を殺さなきゃならない仕事です。

柊二郎の言葉が耳について離れない。思い返すたびに、心臓がドキドキする。
（殺すって……どういうことだろう）
それはもちろん、妖怪の全部が人間に好意的なわけじゃなくて、危険なヤツもいるというのは、柊二郎やお露さんや他の空栗荘の面々からしょっちゅう聞かされていることだけれど。
（でも、親切でいいヤツのほうが多いと思うし）
人間よりも、ずっと。
「阿川君？　どうしたの、ぼんやりして？」
采奈に声をかけられて、太一は我に返った。
ちょっと不思議そうに小首を傾げてから、采奈はすぐに笑顔に戻る。
「ねえ、これ、みんなにもあげていい？」
「え、いいけど」
采奈は嬉々として、クラスで仲のいい女の子たちを振り返ると、「おーい」と声を張り上げた。
「阿川君がクッキーを持ってきてくれたの！　すっごい美味しいよ。カーコたちも食べない？」
呼ばれた女子数人は、顔を見合わせた。おずおずと近づいてきて、
「えっと、あたしらも？」
「あ、ありがとう」

だが采奈に勧められてクッキーを手にすると、彼女たちはきゃあと歓声をあげた。
「うそ、なにこれ？　かわいい！」
「クリスマスの飾りみたい」
「すごい。食べるのもったいなーい」
大騒ぎだ。
「もしかして、手作り？」
「え、阿川君が焼いたとか⁉」
「いや俺じゃなくて、とおと……知り合いが……」
しかし聞いているのかいないのか、女の子たちはやたらすごいすごいを連発する。
どう反応していいのか困っていると、今度は背後から声がした。
「俺ももらっていいか？」
高坂だ。太一の返事も待たずに、クッキーに手を伸ばす。
「なんだこれ。ショウガの味？」
だってジンジャークッキーだもん、と采奈。
へえ、と感心したように言って、高坂はあっという間にひとつ食べてしまった。
二月の一件以来、高坂はこんなふうによく、太一に声をかけてくるようになった。宿題のノートを見せ合うこともあったし、短いけど会話を交わしたりもする。部活に誘われた時には、

さすがに断ったが。相変わらず、自分と一緒にいてもつまらないんじゃないかと太一は思うけど、高坂は前よりもよくしゃべるし、笑顔を見せることも多くなった。

「お、クッキーじゃん」

「俺にも食わせろ、俺にも！」

近くにいた男子がわらわらと寄ってきて、最後に遠巻きにしていた女子が何人か近づいてきた。

「わー、阿川君とお菓子の取り合わせって、なんか意外」

「いっこ、もらっていい？」

なんだか、すごいことになってしまった。

「おいしい！　これ！」

「え、阿川が作ったのかよ!?」

「……ち、ちが……」

「すげぇ。俺の嫁になってくれ！」

「ええっ？」

「ちょっと男子、食べ過ぎ！　遠慮しなよ！」

「ずるいー、あたしなんてもったいなくて食べられないのにー」

クラスメートに取り囲まれ、矢継ぎ早な彼らの会話の中に放り込まれて、太一は困った。で



きることなら、こんなふうに注目されたくない。でも。

（……まあ、いいや）

思いがけず、そんな気分でもある。自分でちょっと驚いた。

とりあえずみんな、十遠見のクッキーを喜んでいる。それがわかっているから、この場では身構えずに、まるで片言みたいに少しだけどクラスメートと言葉を交わすことができた。

で、この光景を見て、やった、と思ったのは采奈である。

（みんな今まで、阿川君に話しかけるきっかけがなかったわけだから）

意外性の勝利だ。なぜかクラスの連中は、太一のことをとっつきにくくておっかないと思っている。だから、誰かも言っていたけど、太一とクッキー——それもとびきりカワイイ、手作りのジンジャークッキー——のミスマッチな取り合わせに、きっと驚いたのだ。

これで太一と他のクラスメートの距離が縮まれば、采奈はすごく嬉しい。

……まあ、ぎゃあぎゃあ言ってお菓子を取り合っている一部男子を見ると、ただの餌付けのような気がしないではないが。

（い、いいよね。それはべつに）

だけど。その時采奈は、ふと気づいてしまった。いや、実は前々からずっと気になっていたことなのだけど。

太一は笑っていなかった。

クラスの子たちの輪の中にいて、それを嫌がっている様子でもないのに、ニコリともしていない。だから、太一のまわりだけ空気が違う。やっぱりいつもみたく、ぽつんと独りでいるように見えてしまう。

（どうして笑わないのかなあ）

太一の笑った顔が見たい、と采奈は思った。

2

川沿いの桜並木は、遠目にうっすらと赤みをおびて見えた。つぼみが膨らんできたせいだ。あと数日もすればいっせいに開花して、あたりの風景を春爛漫の桜色に染めることだろう。

遊歩道の鉄柵の横を歩きながら、時々足を止めて、ミヨシは桜の枝を見上げた。

傍目には、花が咲くのを心待ちにしているように見えるかもしれない。実際、散歩している人々の中には、彼と同じように立ち止まって桜を見上げている者たちもいる。彼らは純粋に楽しい花見の算段でもしているのだろうが、生憎とミヨシには殊勝に桜を愛でる趣味はない。いや、心安らかに花見ができるならありがたいのだが、いつもそれどころではないのだ。

「かなわんなぁ、毎年毎年」

恨み言のように呟いて、ミヨシは鉄柵にもたれかかった。水の流れを見下ろす。

川の両端に植えられた桜の樹は、柵を越えて水面に届きそうなほどに枝を伸ばしていた。ちょうど、そのひとつを摑み取ろうとして、水の中から黒い手がにゅっと出てきたところだ。

「こらっ！」

ミヨシが怒鳴りつけると、手は慌てふためいて水面に沈んだ。ついでに、近くを通りかかった通行人たちも大声に驚いて、ずざざっといっせいに彼のそばから退いたが、知ったことではない。

この川は異界のモノたちの通り道である。川岸と遊歩道の境に巡らされた鉄柵が一応、人と異形を分かつ結界の役割を果たしているが、春にはそこにあちこち綻びが生じる。

桜のせいだ。

ことさら人々の思い入れが強い樹であるせいか、桜は魔性になりやすい。花が咲く頃は特に、妖かしたちを魅き寄せてしまう。今みたいに、咲くまで待てない気の早いヤツもいることはいるが。

うっかりすると花のついた枝を辿り、柵を越えて、異形のモノたちが侵入する。そうさせないために気をつけて見張っていなければならないから、のんびり花見もできやしない。

「だいたい、大家の仕事やないか。なんで俺が見回りをせなアカンねん」

という文句も、毎年言っているわけだが。

今日のところはここまでにしといたる、と川面に向かって捨て台詞を残し、柵から離れたと

ころで、誰かが彼の名前を叫んでいるのが聞こえた。
「ミヨシさんミヨシさん、ミヨシさ――んっ！　こんにちはぁ――っ！」
少し先の橋の上に、両手を大きく振り回している人影があった。少しは人目というものを気にしろと言いたくなる。
和泉栄奈だ。
「……なんでいつも、あない無駄に賑やかなんやろ？」
ミヨシは大きくため息をついた。

「よかった。ちょうど空栗荘へ行くところだったんです」
遊歩道のベンチに並んで腰を下ろして、栄奈がまず言った。橋の上から全速力でこの場所まで駆けてきたので、まだ少し息を切らしている。
「あー、太一やったらおらんで。今日は土曜日やから、実家のほうへ行っとる。明日の夕方に戻るんとちゃうか」
「あああの、そうじゃなくて、阿川君は関係なくて、いえあの、全然関係ないわけじゃないんですけどっ」
栄奈はいきなり顔を赤くすると、わたわたと両手を振った。
「実は私、他の下宿人の方に、お訊ねしたいことがありましてっ」

「なんや」
「え、えーとえーと、えーとえーとえーと――」
あと何回「えーと」がつづくのかと思っていたら、栄奈は意を決したようにベンチの上で居住まいを正し、ミヨシを見た。
ものすごく真剣な顔だ。
「阿川君の笑った顔って、見たことありますか？」
「は？　太一の笑った顔？」
さすがに虚を突かれて、ミヨシはもたれかかっていたベンチの背から身体を起こした。
「待て。その質問の意図はなんや」
「意図はありませんっ。ただ知りたいだけですっ」
「そ、そか。知りたいだけか」
「はい！」
「……見たことないわ」
身を乗り出していた栄奈は、がくーっと肩を落とした。
「そうなんですかあぁぁぁ」
「そこまで落胆することか？」
「べつに私、落胆なんて、してませんよおぉぉ」

している。どう見てもしている。

「私、学校で阿川君が笑ったところって、全然見たことがなくて。でももしかしたら、空栗荘で一緒に住んでいる人たちの前では普通に笑っているのかなって思ったんです。……そうだったらいいなって」

ミヨシは肩をすくめた。

「なんでそんなことが、気になるんや」

「え、だって……」

采奈は口ごもった。

だって。やっぱりヘンだと思うのだ。笑わないなんて。

人間は可笑しいことや楽しいことや、幸せなことがあったら、自然に笑うものだと思う。それはきっと、呼吸をするのと同じくらい当たり前のことなんじゃないだろうか。少なくとも、采奈にとってはそうだ。

でも采奈だって、笑いたくない時はある。ひどく落ち込んでいたり、腹が立っていたり、とにかくそういう気分の時は、ふだんなら大笑いすることでも全然笑えない。

もしかしたら、太一もそうなのだろうか。今まで気にしてなかったけど、もしかしたら太一には、心の底から可笑しかったり楽しかったり幸せだったりすることが、ないのだろうか。

「まあ、太一はな。あんまり大げさに騒いだり驚いたりせえへんヤツやから。喜怒哀楽の表現

が他人より淡泊ていうか」

淡泊というのは、ミヨシなりに気を遣った言い回しだ。彼が出会った頃の太一は、感情なんか何もないように見えた。誰に対しても興味も関心もまるでないみたいだった。

だいぶマシになったな、と口の中でそっと呟く。

太一を見ていて采奈が心配するのは、だからまあ、ミヨシもわからないではない。

「私も阿川君を見てて、そうなのかなってずっと思ってたんです。感情をあまり顔に出さないタイプなんだろうなって。だって、阿川君は本当はすごく優しくて、思いやりがあって、他人のことでも一生懸命になれる性格で……っ」

ミヨシはカリカリと頭をかいた。

「まあ、根っこはお人好しやな」

「はい？」

「いや、独り言や。……それで？」

「だけど最近、違うんじゃないかなって思うんです。阿川君が笑わないのって、私が考えていたのと全然べつの理由なのかもしれないって」

そう思うようになったのは、高坂のことがあったからだ。

本当は何があったかなんて、采奈は知らない。でも昔はあんなに笑っていた高坂が、無口になって笑わなくなって、それは去年死んだ交際相手のことが原因だったのだと、今ならわかる。

だって高坂は、以前みたいにまた、笑うようになったから。
性格が変わったのかな、なんて采奈はとても簡単に考えていた——でも、そんな理由じゃなかったから。
「あんまり気にせんほうが、ええんと違うか」
「うーん」
「今のままでも、たいして困らへんやろ。逆にそんなふうに気にされたら、太一は困ると思うで。俺も、笑うのは苦手やから言うんやけど」
そういえば、と采奈は首を傾げた。
「ミヨシさんはどうして、いつもそんな怖い顔をしているんですか？」
あのなとミヨシは唸る。
「好きで物騒なツラをしとるわけやないて。俺は生まれつきこういう顔なんや」
「……」
「今、何を思うた？」
「え、いえ、あの、生まれた時からそういう顔だったら、お母さんはさぞ驚かれたんじゃないかと」
「アホ。なんぼなんでも俺かて、赤ん坊の時はもうちょっと可愛かったわ！」
そりゃそうだ。しかしおぎゃあと生まれた瞬間から仏頂面だったと言われても、ミヨシの

場合うっかり信じてしまいそうである。
（でもミヨシさんは、笑ったらきっと、すごくカッコイイと思うんだ）
じーっとミヨシを見つめてから、采奈はハァとため息をついた。
「そだ。こうなったらいっそ、阿川君をくすぐってみるとか！　そしたら笑うかも！」
「やめとけ。それはほんまにヤバいから」
悲壮な表情で両手の指をわきわきと動かしていた采奈は、ハァァとさらに長いため息をつく。
そうして、ぽつっと呟いた。
「でもやっぱり、阿川君が笑うとこを見てみたいなって思うんです」
すぐにじゃなくてもいいから。いつか、でかまわないから。
「――ほんまに太一のことが好きなんやな」
ミヨシが何気なく口にしたとたん、采奈はぴしっと硬直した。
「あ、あの、あのあのっ」
「ん？」
「どどど、どうして、知ってるんですかっ？」
「はあ？」
知っているも何も、彼女が太一を好きなことくらい見ているだけでわかる。誰だって。
「まさか内緒のつもりやったんか？」

呆れて言うと、采奈の顔がかーっと真っ赤になった。頭から湯気でも出そうだ。
「――」
「――」
しばらくの間、二人して黙り込んでから、ミヨシは頭を抱えた。
「悪い。失言や。俺は、このテの話は苦手やった」
「いいいいえっ、私のほうこそ、すみませんっ」
「あのな」
「はいっ」
「……いやー、桜のつぼみが見事やなー」
「はいっ」
せめて花が咲いてりゃよかったのにと、ミヨシは唸った。色気のかけらもない灰色の枝を、恨めしげに見上げる。
これはもう、諦めるしかない。
「――それで太一は知っとるんか？　その、あんたの気持ちのことやけど」
はあそれが、と采奈の口調はあやふやだ。
「一応、告白はしたんですけど……」
「へえ？」

「告白だって気づいてもらえませんでした」
「う……、あいつならありえるな」
二人同時にため息を落とした。
「なんでまた、あんな難儀なヤツに惚れたんや」
「それは、あの……」
采奈はまた赤くなって、俯いた。
「ひ、一目惚れ、かな……？」
――あれは入学式から三日後のことだった。
休み時間に、教室でぽつんと皆から離れて、窓から外を見ている男子生徒がいた。教室の空気はまだぎこちなくて、同じ中学の出身者で固まっていたり、近くの席の子と自己紹介みたいな会話を交わしていたり、特に女子にとっては誰と一緒にお弁当を食べるかが当面の重大事だったりしたわけだが、その男子生徒はそんな雰囲気にはきっぱりと背中を向けていた。
だから、最初は好奇心だったのだ。話しかけたらどんな反応をするのかな、と思って、その時書いていた小説のネタ集めも兼ねて、声をかけてみた。
その男子――阿川太一は、幾つか言葉を交わしたあと、いかにも会話が億劫そうにふいと横を向いた。
あ、意外と睫毛長い、とその横顔を見て、采奈がまず思ったのはそんなことだった。小さな

発見にちょっと嬉しくなった。それにパッとは目立たないけど、よく見るとこのコけっこうきれいな顔をしてる……。

その時、急に胸がきゅうっとなったのだ。

心臓がドキドキして、自分でもわけがわからなくて、采奈は彼の横顔をずっと、バカみたいにぼーっと見ていたような気がする。本当は短い時間だったのかもしれないけど。

だから、あの時だ。太一のことなんてまだ何も、これっぽちも知らなかったのに、それからいつも気になって目で追っていて、それで好きなんだと気がついた。

「あー、なるほどな」

どうにももぞもぞする気分で、そこまで話を聞いていたミヨシは、

「……てことは、最初は顔に惚れたんか？」

何気なくまた失言をかましました。

「違います！　だって私、時代劇が好きで、それはうちのおばあちゃんが古い時代劇のファンで子供の頃から一緒にテレビで観てたからなんですけど、とにかく私の好みの男性のタイプはチョンマゲと刀と着物の似合う渋い中年でっ、同年代の男の子なんて子供っぽいし頼りないってずっと思ってたし、今時の顎の細い顔がいいだけのアイドルなんて全然興味なくて、だから、断じてっ、阿川君の睫毛に一目惚れしたわけじゃありませんっ――っ！」

「そ、そか。わかった。睫毛でも顔でもないねんな」

拳を握った栄奈に猛然と抗議されて、ミヨシは慌ててうなずいた。

「……でも、そのあと阿川君とはなかなか話ができなくて。二回目に話せたのは、この川で阿川君とミヨシさんが、南米産ホタルモドキを獲ってた時。わあ、やったって、もうすっごく嬉しかった」

ああ、あの時な——とミヨシは呟く。正確には捕獲したのはホタルモドキではなく、人間の魂だ。

「それから阿川君とは、よく話をするようになったんです。といっても、私が一方的に話しかけてたから、もしかしたら迷惑かなって思ったけど、阿川君はそんなことないって言ってくれたし」

そうやって会話を重ねれば重ねるほど、太一のことがもっと、どんどん好きになった。

ミヨシは上着のポケットに両手を突っ込んだ格好で、ベンチの背にもたれて空を見上げた。春の陽射しがやたら眩しい。

こういう時に気の利いたフォローをしてやれる人間ではない。それは自覚している。

「……まあ、頑張れや」

やっと、そう言った。

「太一はちょっとややこしいヤツやねん。けど確かに性根の悪いヤツやないし、空栗荘の俺らもそれはわかっとる。あんたとそんだけ話ができるんやったら、あんたには心を許しとるてこ

とやろ。大事なことは、そのうちちゃんと太一が自分で言うと思う。せやからあんたは、これからもあいつのそばにおったってくれ」

栄奈は目を瞠った。しばらくミヨシの言葉を繰り返し考えて、やがて大真面目な顔で「はいっ」と大きくうなずいた。

跳ねるようにベンチから立ち上がって、ミヨシにぺこっと頭を下げた。

「和泉栄奈、頑張ります！　――あの、いろいろ聞いてくださって、ありがとうございました」

この人も、本当は優しい人だと栄奈は思った。顔はおっかないけど。

「いや～、ミヨシ君もけっこういいこと言いますね～」

「うわあぁ⁉」

栄奈を見送って、やれやれとベンチから腰を浮かしかけたミヨシは、唐突に聞こえた声に仰天して飛び上がった。

声は背後――つまり川のほうから、それもずいぶん低い位置で聞こえた。

おそるおそる見回すと、なんと柊二郎が鉄柵を両手で摑んで、首だけを遊歩道の縁からにゅうっとのぞかせている。川岸のコンクリートの土手にぶらさがっているらしい。

一見すると『檻の向こうのしゃべる生首』みたいで、ちょっとホラーな光景だ。

「おいこら大家！　何しとるんや、そんなとこで⁉」
呆れ返ってミヨシが言うと、失敬なと声が返った。
「僕だってたまには、ちゃんと仕事をすることもあるんです」
生首状態で、いばって言うことではない。
「桜の見回りやったら、いつも俺がやっとるやろ。――しかも他人の話、立ち聞きしとったんか」
「いえいえ、立ち聞きなんて滅相もない」
「まさか、ぶらさがって聞いとったから『立ち聞き』やないてボケか？」
「……」
そのようだ。
「で、いつから聞いとった？」
「ミヨシ君が、赤ん坊の時はもうちょっと可愛かったというあたりから」
「うう」
「いいですね～、若人の恋愛は初々しくて。しかしまさかミヨシ君が、女子高生の恋愛相談を引き受けるとは」
「皮肉を言うとる暇があったら、いい加減に登ってこいや。いつまで打ち首獄門みたいな真似、しとるねん」

「あははは。……実はそのことで、ひとつご相談が」
「ああ？」
「僕の腕の力では、これ以上よじ登るというのは無理です。なんかこのへん、足をひっかける場所がないんですよねえ。というわけですみませんけど、上に引っ張り上げてもらえないでしょーか？」
だったら先にそう言え。

「――例の妖怪の侵入ルートがわかりましたよ」
ミヨシの手を借りてようやく鉄柵を乗り越えた柊二郎は、ぽんぽんと手をはたきながら言った。
「この川沿いに、人間の世界からあちらの妖怪の町へ逃げ込んだようです。気をつけてはいたんですが、境界を越えられてしまいまして」
「けど、この界隈にはそれらしい痕跡はなかったで」
「それが賽河原町じゃないんですよ。もっとずっと下流です。そこの桜がどういうわけか一本だけ早咲きで、もう三分ほど開花しているんですが、その枝を伝って川に下りたのは間違いありません。妖かしの気配があたりに残っていましたから。……ええそれはもう、ナメクジが這ったあとみたいにベッタリと」
しかし賽河原町以外の場所なら、たとえ川辺に下りても異界と道が繋がることはないはずで

ある。

ミヨシがそう言うと、柊二郎は「ええ、まあ」と歯切れ悪く応じた。

「確かに賽河原町の外からでは道は繋がりません。普通はね。けれどもあちらの住人が助力した可能性はあります。中から呼び込めば、あるいは、まあ……あっちとこっちを繋ぐことも、絶対にできないこともない、かもしれません」

ミヨシは肩をそびやかせた。険しい声で、

「今さらやろ。妖怪を追う人間と、人間に追われる妖怪と、あっちの町の連中がどちらを助けるていうたら、わかりきっとるわ。——それでも、相当力の強い妖怪やないと、境界は突破でけへんのとちゃうか」

「おもに体力の面で、力は有り余っているみたいですよ。おつむは、どうもあまりよくなさそうですが」

「正体がわかったんか？」

ええ、と柊二郎はうなずいた。

「昨夜遅くに、十遠見さんのところに連絡がありました」

一度川面に目をやって、空栗荘の大家は「帰りましょうか」と、ミヨシを促した。

歩き出してから、言った。

「牛鬼です」

ミヨシは束の間、黙ってから、
「……それで十遠見は？」
「朝からあっち側に行ってます。九割方、賽河原町の裏に逃げ込んだのだろうと言われていましたが、この川から侵入したのがわかりましたから、牛鬼があっちの町にいるのはもう確実ですよ」
柊二郎はため息をついた。「そうでなければよかったのに」という思いが、ありありと滲んでいる。
「殺すんやろ？」
「十遠見さんは、そう指示されているでしょう。牛鬼は危険きわまりない妖怪だというのが、お上の判断らしいので」
憂鬱げに、柊二郎はつけ加えた。
「妖怪を追う人間と、人間に追われる妖怪と。――どちらを選ぶといわれたら、人間は前者を選ぶしかありません」

3

今年になってから、太一は週末に時々、実家に帰るようになっていた。啓介に呼ばれること

もあったし、自分から顔を出すこともあった。

父親とその再婚相手のいる家は、ちょっと前まで太一にとって息苦しくて逃げ出したいだけの場所だった。でも今は、少し違う。家にいても、以前よりは楽に息がつけるような気がする。

……というか、気詰まりになっている暇がないというか、退屈しないというか、べつの意味で前より気苦労が増えたというべきか。

何しろその再婚相手の鈴子さんは、一言で言えばずいぶん素っ頓狂な人だった。

もと漫画家で、世間の常識にかなり疎くて、マイペースで他人の話をあまり聞いていない。思い込んだらどこまでも突っ走るタイプ。しかもとってもポジティブ思考——というのが、啓介が言うところの『鈴子さん評』だが、これが大袈裟でも何でもなくてその通りだったのだ。

啓介に「大事な話がある」と電話で呼び出された今回も、それは遺憾なく発揮された。

「……あの。鈴子さん」

「なに？」

「これ、何ですか？」

夕食時。目の前の皿に付け合わせの野菜と一緒にのっているその物体を見て、太一はつい訊いてしまった。

実際、何だかわからない。大きさもかたちも草鞋みたいな、薄茶色の塊である。

「おから入りハンバーグ」

「……」
父と息子は思わず顔を見合わせた。
そうかなるほど、ハンバーグか。で、挽肉はどこだろう？
「それは、その……力作だな」
と啓介が、ずいぶん婉曲な表現をした。
「そうでしょう？　おからはすぐにポロポロ崩れちゃうから、このかたちにまとめるのにかなりの創意工夫が必要だったわ」
鈴子さんは瓶底メガネの奥の目を、嬉しそうに輝かせた。
そして、ぐいっとテーブルの上に身を乗り出すと、
「太一君は麻って知ってる？　ものすごく成長が早い植物で、あっという間に四メートルは伸びるの。忍者はその麻を植えて、毎日飛び越す訓練をしていたんですって」
いきなりの熱弁に、太一は「はあ」としか答えられない。
しかしなぜ、麻の話？　そして忍者？
「そうやって忍者は、最後には四メートルもジャンプする、驚異的な跳躍力を身につけるのよ。だから私も思ったの。大切なのは無理をすることじゃなくて、毎日の少しずつの努力の積み重ねだって」
「……」

理屈はそうでも四メートルを跳ぶのは無理だろう、とか。だいたい忍者は本当にそんな訓練をしていたのだろうか、とか。『だから』というのは、脈絡としてどこに繋がるのかとか。

ツッコミたいところはいろいろあるが、ともかく。

……その話とハンバーグと、一体どんな関係が？

「これからは、修業の方法を変えることにしたわ。いきなりミンチ一〇〇パーセントに挑んでも、返り討ちに遭うだけよ。でもお肉がちょっぴりだけなら、私だって触れるようになったの。だから――」

つまり、こういうことだ。

最初は挽肉ちょっぴりのおから入りハンバーグ、次はそれよりもう少し挽肉の多いおから入りハンバーグ、さらに挽肉の量を増やしたおから入りハンバーグ……、と伸びてゆく麻を忍者が飛び越えるがごとくに、少しずつ努力と肉の分量を積み重ねていけば。

「いつか必ず、ミンチ一〇〇パーセントのハンバーグを手でこねても平気な日がくるのよ！」

鈴子さんはひどい偏食で、特に肉類が大嫌いで触れることもできない。

それなのに太一の好物のハンバーグを上手に作ろうと奮闘してくれているのは、ありがたいし嬉しいし、感謝しなければいけないと思う。

だが。

――今からでも、ハンバーグが好物というのは嘘だったと、鈴子さんに言ったほうがいい

んじゃないだろうか。
この時太一は、心底そう思った。
（それとも、他にも好きなものがあるから、そっちが食べたいとか）
無難なところで、何がいいだろう。卵は大丈夫なはずだから、卵焼きあたり。
（でも帰ってくるたびに、卵焼きばかり出てくるのはちょっと……）
しかし、何を言っても無駄だろう。ここまで盛り上がっている鈴子さんは、他人の言葉は右から左に素通りだ。
まだ何か熱弁をふるっている鈴子さんを尻目に、父と息子は箸をとって黙々と食事をはじめた。
鈴子さんの名誉のために言っておくと、ハンバーグだと思わなければ、そこそこ食べられるシロモノではあった。

翌日。家を出ようとすると、啓介が「駅まで一緒に行こう」と言った。
「おまえに話があるんだ」
そういえば電話でそんなことを言っていたなと思い、太一は黙ってうなずいた。
午後もまだ早めの時刻だ。今日もよく晴れて、三月の陽射しは眩しく暖かい。
通り道には、桜よりも早い桃と紫木蓮が花を咲かせていた。沈丁花の香りも、光の中に

漂っている。

歩き出して少し経ってから、啓介は口を開いた。

「母さんから、連絡があった。――おまえに会いたいと言っている」

太一は傍らの父親の顔を見た。

母さんが。おまえに会いたいと。

言葉が頭の中でぐるぐる回る。けれども、何も言えなかった。その言葉に、何の実感もわかなかったからだ。

「……鈴子さんは知っているの？」

「知っている。だが、どうも彼女の前では話しづらくてな」

なぜ家にいる間に話さなかったのかと思ったら、やはりそういうことだったらしい。

「正直言って、おまえにはこのことは黙っていようかと思った。真理子に今会うことが、おまえにとっていいことなのかどうか、俺にはわからない。会うことで、おまえがまた傷つく結果になったら――」

傷。最近、その言葉を聞いた。

（サトリが）

――兄さん自身が気づいていないんだから。

――自分の中にある傷を。

きっと、そうなのだ。自分は傷ついたのだ。あんたなんか知らないと叫んだ、母親の言葉に。触れようと伸ばした手を、振り払われたことに。多分。

でも。

（そんなこと……）

どうでもいい。そんなことは、どうでもいい。どうでもいい……！

胸の中がざわざわした。気持ちが悪い。

「だけど、鈴子に言われた。決めるのは太一君だと。本当のことを伝えないでなかったことにしてしまうのは、おまえを守ってやることとは違うと」

「――」

「会うか会わないかは、今ここで決めなくてもいい。真理子もすぐにとは言っていないから」

太一は大きく息を吸って、吐いた。

「母さんは、今どうしているの？」

「遠くへ引っ越して、一人で暮らしている。何年か前から仕事もしているそうだ。今度、精神科医の勧めで、何か資格を取るための勉強も始めると言っていた」

精神科医、と太一は呟いた。

結局何も答えずに、その日はそのまま、啓介と別れた。

迷う、というのとは少し違う気がした。母親に会いたいか会いたくないかといえば、どちらでもなかった。

ただ、胸の中でざわざわと、何かがずっと騒いでいる。

きっとそのせいだ。帰りのバスを降りたら、そこはまたも、妖怪の町のほうだった。

（えっと、……空栗荘はどっちだろう）

賽河原町の裏側へ来て困るのは、方角がさっぱりわからないことだ。

仕方がないので、道を訊ねることのできる相手を探して歩き出す。だが、

（……ヘンだな）

しばらくうろうろと歩き回ってから、太一は首を傾げた。

何かヘンだ。通りに妖かしたちの姿がない。いつもならまだ陽の高いこの時刻でも、異形たちが行き来して、物売りの声なども賑やかに響いているのに。

妖怪の町はガランとして、静まり返っていた。

（どうしたんだろう）

ともかくこのままでは空栗荘に帰り着くことができないわけで、太一は途方にくれて立ち尽くした。

と、その時である。突然、

「太一か？　こんなところで、何をしておる⁉」

頭上からばさばさという羽ばたきの音とともに、声が降ってきた。
「あ、クロ爺」
ホッとして太一が見上げると、カラスは翼を広げてそばの塀の上に舞い降り、呆れたような慌てたような甲高い声を放った。
「馬鹿者！　よりによってなぜこんな時に、こっち側に来たんじゃ!?」
「……こんな時って」
「知らんのか？」
太一はぽかんとする。その顔を見て、「ふむ」と唸るとクロ爺は黒い頭を振った。
「本当に知らんのか。ああ、やれやれ」
「俺、バスを降りたらまたこっちに来てしまって……、何かあったんですか？」
「まあな。……いや、しかし……」
クロ爺は塀の上でせわしなく、ひょいひょいと足を踏みかえた。心なしか、苦り切ったような顔だ。鳥の表情ってよくわからないが。
「わしが言うことではあるまい。帰ってから、柊二郎に訊け。ともかく今日は、すぐに帰れ。――確か、甚五郎の工房がこの近くにあったはずじゃ。古都子を呼んで来てやるから、ここで待っていろ。いいか、絶対にここを動くではないぞ」
言うやいなや、クロ爺は翼を打って空へと飛び上がった。よほど急いでいるのか、あっとい

う間に黒い点になって空に吸い込まれる。
わけがわからなくて首を捻りながらも、太一は言われたとおりにその場で待っていた。
動くものの姿のないこの町の風景は、なんだかひどく不気味だった。

「太一君！」
それから十五分ほどして、古都子が息を切らして駆けつけてきた。
「よかった。――知らせてくれてありがとう、クロ爺」
「これ以上面倒なことになっては、かなわんからの」
クロ爺は古都子の肩にふわりと降りて、肩をすくめた。
「ほれ、早く太一を空栗荘へ連れて行け。……途中の道では、十分用心するんじゃぞ。まあ、おまえさんなら心配はいらんと思うが」
「うん。気をつける」
ではな、と相変わらずせわしない様子で、カラスは飛び去った。
「じゃ、帰りましょ」
いつもと変わらない表情で、古都子は太一に向かってニッコリする。走って来たせいで緩んだのか、頭部を包むバンダナの結び目をきゅっと結びなおして整えながら、「こっちよ」と歩き出した。

彼女のあとを追いながら、そういえばこちら側の町で古都子と一緒に歩くのは初めてだなと太一は思った。

「すみません。わざわざ来てもらっちゃって」

「いいわよ、たいしたことじゃないから」

「でも古都子さん、仕事中だったんじゃ……」

「大丈夫。ちょうど息抜きしようと思っていたところだったの」

古都子の明るい声も口調も、やっぱりいつもと変わらなくて、それでよけい太一は訊ねるのをためらった。

クロ爺は柊二郎に訊けと言ったけれども、きっと古都子も事情は知っているはずだ。こうして歩いていても、あたりはしんとしたまま。妖怪たちの姿はない。

「あの……みんなどこかへ行っちゃったんですか？　誰もいないけど」

「いるわよ。家に入って、出てこないだけ」

さらりと言葉が返る。

「どうして？」

「関わりたくないからでしょうね。巻き添えを食うのは、ごめんなんじゃない？　クロ爺はまあ、高みの見物をしていたみたいだけど」

太一はちょっと息をつめた。

あの、と思い切って訊いた。

「どういう意味ですか？　何があったんですか？」

古都子はすたすたと歩いてゆく。ずいぶん早足だ。その隣に、太一は肩を並べた。

答えが返るまでに、少しだけ間があった。

「……牛鬼っていう妖怪がいてね、それが人間を殺したの。この数ヶ月で、何人も。報道はされなかったけど」

太一は目を瞬(またた)かせた。

「殺したって、……どうして？」

「人間を食べる妖怪だからよ。空腹になったから餌(えさ)を獲(と)ったってことでしょうね。だからもちろん、こういう事件を起こすのは今回が初めてじゃないけど、牛鬼は一度満腹すると百年くらいはおとなしくしているから、これまでは人間の側も見過ごしてきた部分はあったんだと思う。でも今は、人が殺されましたはいそうですか、ではすまない時代だから」

人間を食い殺す妖怪を、放置しておくわけにはいかない。牛鬼は、危険な妖怪として『処分』されることになった。

「それで逃げた牛鬼は、どうやら賽河原町に逃げ込んだらしいの。こっちの妖怪の町にね」

「え……」

「十遠見さんが今、牛鬼を追っているわ。賽河原町は彼の担当だから。つまり、牛鬼を殺すの

は彼の役目なわけ」

――妖怪を殺さなければならない仕事です。

ジンジャークッキーの強烈な香りとともに、柊二郎のその言葉を太一は思い出した。

「でも、お腹がいっぱいになったら百年くらいは、おとなしいんでしょう？」

何も殺さなくても、と思う。いや、でも、人間が何人も死んでいるのだ。その人たちのことはどうでもよくて、妖怪をかばうのはヘンだ。おかしなことのはずだ。

自分の気持ちをどこに置いていいのかわからなくて、太一は混乱する。

――そうじゃない。

気がついた。そうじゃなくて、十遠見にとってこの仕事は……。

「満腹したかどうかは、まだわからないわ。牛鬼は、一度にけっこうな人数を食べるらしいから。それに、たとえ今回は満腹だとしても、いずれは必ずお腹が空いてまた同じことをする。それが百年後だとしても、人間を必ず殺すとわかっている妖怪を放っておくことはできない、という判断を下した人たちがいるの。十遠見さんの上にいる人たちがね」

「そんなの……」

「人間の側だけの一方的な言い分よね？　でもね、太一君。どんなに妖怪たちのことを知ったつもりになっていても、私たちは人間なの。彼らにとっても、そうなの」

「――」

きっぱりとした古都子の口調に、太一は何も言えなかった。こんな時に、自分が口にする言葉は、ただ薄っぺらいだけのような気がした。

関わり合いになりたくなくて、妖怪たちは外に出てこないという。関わりたくないのは、この騒動にだろうか。妖怪を殺す人間にだろうか。

ちょうど角を曲がったところで、薄紅色の色彩が視界に飛び込んだ。

桜だ。古びた板塀のあちらに植わった一本の樹が、通りに枝を差しかけている。午後のわずかに低くなった陽射しの中で、表の世界よりも早く、ぽつぽつと三分咲きほどに開いた花弁は朧に灯る光のようだ。

「こっちではもう、桜が咲き始めたのね」

古都子は呟いた。

「人間の世界よりもこちらのほうが、こういうのはいつも少しだけ早い気がするわ」

そういえば、春を告げる風もこちらから先に吹いた。

と、通り過ぎようとした太一たちの目の前で、いきなり桜の枝が揺れた。まるで目に見えない手で枝先を摑まれたみたいに大きく上下して、しかもそれ一度きり、ひたりと静止した。

「……え」

何だろう今の、と怪訝に思ってから、傍らの古都子が足を止めたことに太一は気づいた。

「古都子さん？」

「レンじゃなくても、今のはわかりやすかったわ」
「何が？」
「教えてくれたの。――危ないって」
「え、え？」
太一君、と呼んだ古都子の声は静かで、でも細い糸を張ったみたいに鋭かった。彼女のこんな声を、初めて聞いた。
「私のそばから、絶対に離れないで」
そうして、古都子は振り返った。太一も同じように、視線を後ろに向ける。
二人の視線の先、十メートルほど距離を置いて、黒い人影が立っていた。
人影、だ。つまり人間の輪郭をしている。小太りの小柄な男のように見えた。人間ではないとわかるのは、頭の左右に二本の太い角が生えていることと、全身が煤を塗りたくったように真っ黒であることだ。
その黒い妖怪は、二人が見ていることに気づいて一度立ち止まったが、すぐまたトコトコと近寄ってきた。散歩でもしているような、どこかのんびりとした足取りが逆に不気味だ。
「古都子さん、……あれって」
ええ、と古都子は妖怪を凝視したままでうなずいた。
「あれが、牛鬼よ」

人間を食い殺す妖怪？　あれが？

その瞬間、いろんな思いがいっぺんに太一の頭の中を巡った。

想像していたのよりずっと小さいとか、どう見てもおっさんだとか、角があるのは牛だからなのか鬼だからなのか、そんなことよりどうして自分たちの後ろを歩いてきたのか、牛鬼は危険な妖怪で、それがここにいるということはつまり――。

「やっぱり見つかってしまったわね」

「え、やっぱり？」

「牛鬼は鼻がきくの。私たちの匂いを嗅ぎつけたのよ。……太一君、私の後ろにいて」

「でも」

「いいから」

妖怪との距離が五メートルほどまで縮まった時、古都子はぴしりと強い声を放った。

「消えなさい」

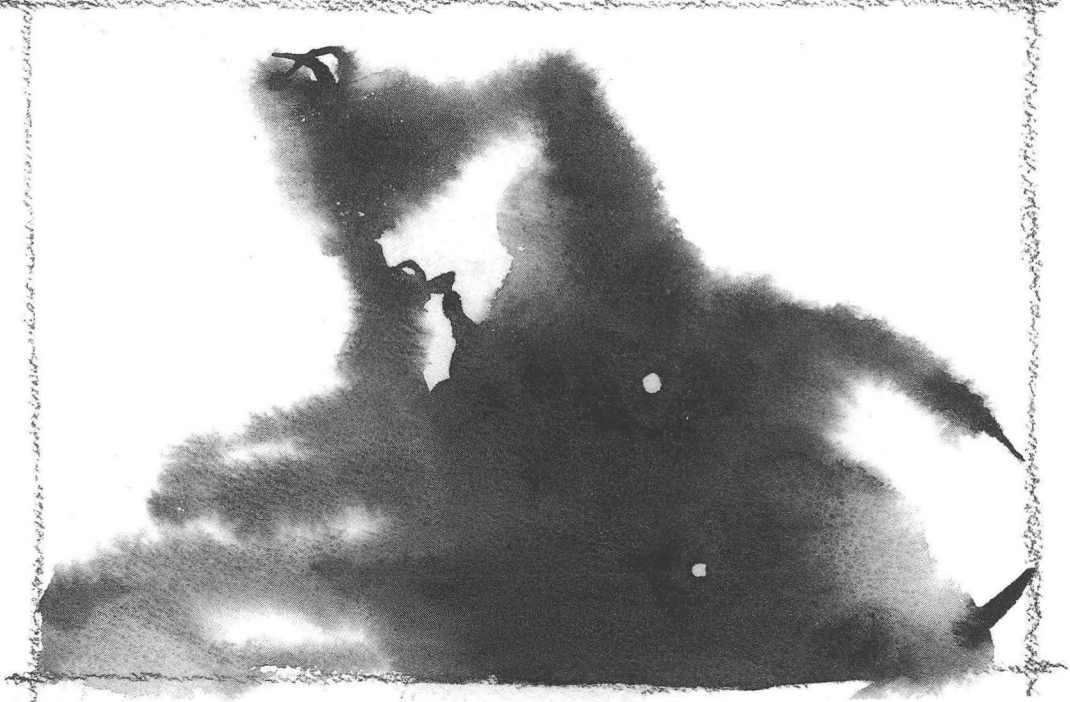
だが牛鬼は耳を貸す素振りもなく、足を止めなかった。

「人間、人間。こんなところに人間がいるよぅ」

おっさん顔に似合わない、子供のように高い声で言った。

「おいしそうだ。齧らせておくれよ。お腹がとても空いているんだよ」

むしろ悪意の感じられない物言いに、太一はぞっとした。



（まだ、満腹じゃなかったんだ……）

「わからないの？　それ以上近づいたら、痛い目を見るわよ」

ふふぅ、うふふふぅ……。

牛鬼は笑うように息を吐いた。その口が、ふいにめきっと裂けた。

「う、わっ⁉」

太一は目を見開いた。

それまで人間の輪郭をしていた妖怪の身体が、瞬時に膨れあがった。腕であった部分を地面について、四つ足になる。牛よりも一回り大きい、真っ黒な化け物に変じた。赤く裂けた口の中に、刃物のような牙がのぞいている。

「食べさせておくれよ。お腹が空いたんだよぅ」

高い声だけは、もとのままだ。

次の瞬間、牛鬼は動いた。口から涎をたらして、突進してきた。

太一は息を呑んで硬直した。古都子が彼を背中にかばう。

風が疾った。白く光る風だ。

（え……？）

目の前までせまっていた牛鬼の身体が、突然、ぐらりと揺れた。そのまま横倒しに、地面に叩きつけられた。

風はゆるりと渦を巻き、白銀の毛並みを逆立てた獣の姿となる。こちらも子牛ほどの大きさはありそうだ。

地に足を踏ん張って牛鬼を睨みつけ、ぐるる、と喉から凄まじい威嚇の声を発した。

（……犬!?）

牛鬼と自分たちの間に割って入ったその妖かしを見て、太一は呆気にとられた。

古都子が彼の腕を掴む。

「早く。今のうちに逃げるわよ！」

「え、は、はい」

走ろうとして、つんのめりかけた。足が震えている。それでも、膝から崩れそうになるのを懸命にこらえて、太一は駆け出した。

地面に転がったまま、「なんだよう、なんだよう」と蹄をばたつかせていた牛鬼が、むくむくと起き上がった。

「ああ、逃げたらダメだよ」

白銀の獣が、牙をむいてその前に立ちふさがる。

古都子と一緒に細い路地に逃げ込む寸前、振り返って太一が見たのは、唸り声をあげて牛鬼に飛びかかった異形の犬の姿だった。

「――あの犬、妖怪ですか!?」

「犬神よ」

走りながら、古都子は応じた。

「い、いぬがみ……？」

「うちは犬神憑き（つ）の血筋なの。あのコは私に取り憑いているモノよ。名前は帯刀源之丞彦根丸（たてわきげんのじょうひこねまる）。愛称は源さん」

こんな時に愛称まで紹介されても。

「あのコがいるから、妖怪たちは私に悪さをしかけてこない。犬神は怒らせると怖いと知っているから。――そうでなければ、私だってこちら側の世界に毎日出入りすることなんて、とても無理よ。危険すぎて」

「でも、古都子さんは妖怪と仲がいいんじゃ……？」

人間なのに妖怪の町の工房に毎日通っている。不思議ではあったけど、それは古都子が特別に誰よりも、この町の妖かしたちと仲が良いからなのだと思っていた。

「親しいかどうかは関係ないの。悪意なんてこれっぽちもなくて襲ってくる連中もいるわけ。それだって彼らの道理なのよ。だから、妖怪とつきあうには――」

彼らは人間とは『違う』ものなのだと。それは、わかっていなければならないのだと。

何度も聞いたことだ。太一が空栗荘に来てから、何度も。

ずっと、意味なんてわからなかったけれども。

角を曲がると大通りに出た。
「ここを突っ切れば、空栗荘まではすぐよ。頑張って」
「大丈夫です」
肩で喘ぎながら太一がうなずいた、その時だった。
すぐ目の前に、黒い巨体が地響きをたてて落ちてきた。
「逃げたらダメなんだよぅ」
牛鬼は口を裂いて笑う。
「源さん！」
古都子が叫んだ瞬間、追ってきた犬神が風を巻いて牛鬼に襲いかかった。黒い巨体の首筋を噛みちぎる――寸前、牛鬼が逃げた。
がちん、と犬神の牙が虚しく空を噛む。
鈍重な見てくれに反して、牛鬼の動きは驚くほどに素早かった。一瞬のうちに犬神から離れ、ふうぅと黒い霧のようなものを口から吐いた。
「毒気よ。吸わないで！」
「え？」
「牛鬼の十八番よ！　息を止めて、走って！」
慌てて鼻と口を手で押さえたが、少し遅かったかもしれない。古都子につづいて走りだそう

として、太一は転んだ。痛みは感じなかったが、急に息苦しくなって倒れたまま咳き込んだ。

「――太一君⁉」

古都子が振り返り、駆け戻ろうとした。が、身をひるがえした犬神に阻まれる。うむを言わさず彼女の身体を背中に掬い上げた犬神は、毒気を避けて跳躍した。

「待って、源さん！　太一君が！」

当然といえば当然なのだが、犬神にしてみれば古都子さえ無事なら、あとはどうでもよいのである。

「う……」

ごほごほと咳き込みながら、それでも必死で太一が身体を起こすと、真ん前に牛鬼のおっさん顔があった。なぜか、ふたたび縮んで人間の輪郭に戻っている。

大きいままのほうが人間を食べやすいんじゃないかな、と麻痺した頭の片隅で、太一はぼんやりと考えた。

地面に座り込んだままの彼の前で、いただきます、と牛鬼は手を合わせた。嬉しそうだ。あんぐりと口を開ける。がこんと下顎が外れたみたいに、真っ赤な口が大きく広がった。

ああ、これなら頭くらい簡単に入りそうだと、太一は思う。

しかし牛鬼は、そこでふと、動きを止めた。

「おんやぁ？」

不思議そうに目を丸くする。
金色の光がひらりと舞った。蝶だ。一匹の蝶が光の鱗粉をまき散らしながら、ひらひらとまとわりつくように、牛鬼の顔の前を飛んでいる。
牛鬼はきょとんとして、蝶を目で追った。
（……あれ、この蝶って）
金色の蝶。前にも見たことがある。本当は蝶ではなくて、人間の魂の化身だ。
すぐに飽きたらしく、牛鬼は煤色の顔をしかめて手で蝶を追い払った。
太一の命が延びたのは、ほんのわずかの時間だ。――だがそのわずかな時間が、結局、彼を救った。
「じゃあ、食べるよぅ。いただきま――」
その瞬間。牛鬼の身体がボウと音をたてて、炎に包まれた。

熱のない炎だった。しかし牛鬼には、灼熱の痛みがあったのだろう。
「ぎゃあぁぁ！」
妖怪は地面を転げ回った。火を消そうとして暴れる。
「そこから離れろ！」
へたりこんだまま呆然と牛鬼を見ていた太一は、その声でようやく、こちらに走ってくる十

遠見に気づいた。

立ち上がろうとしたが、足が動かない。じたばたしていると、いきなり背後から襟首を引っぱられた。そのまま勢いよく引きずられる。

「ごめん、太一君。源さんがやっと戻ってくれて」

古都子の声。

首をねじ曲げて後ろを見ると、犬神が彼の服の襟をくわえていた。

「す、すみません」

通りの端まできて、ぽいと放り出された太一を、古都子は心配げにのぞき込んだ。

「無事？　毒気にやられてない？」

「う、うん」

目がかすむし、全身ががくがくする。息苦しくて、胃がむかついて吐きそうだ。そのどれが妖怪の毒気のせいなのか、よくわからない。

「見逃してくれよう。見逃してくれよう」

牛鬼は頭を抱えて地面に突っ伏していた。火は消えたが、身体からぷすぷすと煙があがっている。黒い背中を芋虫のように丸めて、妖怪は叫んだ。

「お腹がへったんだよ。ペコペコだったんだよ」

十遠見は牛鬼の前に立った。

その顔を見て、太一は息をつめる。いつもあまり表情のない人だけど、今の十遠見は能面のように無表情だ。

牛鬼はますます身を縮めると、おいおいと泣き出した。

「これからは、ちょっぴりだけにするからさ。全部は食べないからさ。人間の腕を一本とか、足を一本とかで我慢するから」

国家公認術者は、それには答えなかった。

「ナモサマンダボタナンキリク……」

口の中で低く唱えながら、指を組み、さらに組みかえる。

「ヒツチリカロラヒウンケンソバカ」

すっと雉ぐように片手を振った。

「以漸悉令滅」

ぴしっ。

十遠見の立っている場所から、青白い電流のような光が伸びた。地面を伝い、牛鬼に向かって一直線に走る。

「イヤだよう、イヤだよう、イヤ――」

牛鬼の泣き声が途切れた。

その身体が青白い光に呑まれた、次の瞬間。

ざあああぁ。

風に吹き払われる灰のように、牛鬼の輪郭は崩れ、跡形もなく散って消えた。

さわさわと空気がざわめいていた。

気がつくと、家の中に閉じこもっていたはずの妖怪たちが、いつの間にか路地の角や物陰に集まってこちらを見ていた。戸や窓の隙間からそっとのぞいている者もいる。

ざわめきは、彼らがひそひそと囁き交わす声だ。

しかし視線を向けると、妖怪たちはさっと姿を隠す。戸も窓もぴしゃりと閉まった。

「立てるか？」

十遠見が太一を見て訊いた。

「は、はい」

どうにか立ち上がることはできたが、足がふらつく。むかむかして、太一は思わず口元をおさえた。

「牛鬼の毒にやられたのなら、早く手当をしたほうがいい」

「そうね。柊さんに診てもらわないと」

古都子はうなずいてから、低い声でつけ加えた。

「十遠見さんが間に合ってよかったわ」

「牛鬼は気配はとらえやすいが、動きが並外れて速い。おまけに一カ所に留まっていないから、追いつくのにかなり手間取った。一応、捕獲するために足止めの呪を町の方々に仕掛けておいたんだが」

無駄だったな、と十遠見はスーツの埃を払うような仕草をしながら、淡々と言った。

「あの」と、太一は小さく声をあげた。「牛鬼は……死んだんですか？」

「ええそう」

あっさりとうなずくと、源さん、と古都子は呼んだ。

犬神はいかにも不承不承というように、のっそりと太一に近づくと、身を低くした。

「え……」

背中に乗れということらしい。

「そんな、俺、歩きます」

「それで途中で倒れたら困るでしょ。あ、それとも私が、おぶってあげようか？」

いいです、と太一は慌てて首を振った。

（女の人におぶってもらうなんて……!?）

他人に触れられるのがイヤだとかいう以前の問題である。

「二千円で私がおぶるのはどうだろうか」

「それもけっこうです」

そうだな、と十遠見は唇の端を歪めた。笑ったのだろうか。
「どのみち罠のために仕掛けた呪を、今度は全部解いておかなければならない。私はすぐには戻れないので、君たちは先に空栗荘に帰ってくれ」
十遠見が踵を返そうとした時だった。
「――よう。ずいぶんと派手な捕り物だったな」
投げつけるような声がした。
そちらを見ると、狢が少し離れた板塀の前に立っていた。煙管をくわえて、まるで芝居でも見物しているみたいに、ニヤニヤしていた。傍らにろくろっ首もいる。
その笑い顔を見たとたん、太一はなぜかぞっとした。
「およしよ」
引き留めようとするろくろっ首の手を振り払い、狢はぶらりとした足取りで、太一たちに近づいてきた。
物陰に隠れていた他の妖怪たちが、今度は何事かというように、あちこちからまた顔をのぞかせる。
バサバサと頭上で翼を打つ音がして、クロ爺が塀の上に舞い降りた。だがカラスは何も言わずに、むっつりと黙ったままその場を見つめた。
「相っ変わらず容赦ねえなあ、十遠見。何もあんなにきれいさっぱり消しちまうこたぁ、なか

ろうに」

そばまできて、狢は足を止めた。さっきまで牛鬼がいたあたりを、顎でしゃくる。

「でもまあ、しょうがねえか。妖怪に餌にされて食われちまっちゃ、人間様も立つ瀬がねえよ、なあ？」

煙管を片手に、狢はまたニヤリとする。

十遠見を横目で見て、ふいにその笑みを消した。

囁くような低い声で言った。

「……オイラの嬶と子供を殺したのも、おまえみてえな術者だったよ」

憎しみのこもったその言葉と、妖怪の冷たい眼差しに、太一は息を呑む。

十遠見は、指先でメガネを押し上げた。

「逆恨みだな。私がやったことではない」

「ああ。ずいぶんと昔の話だ。――だがな、おまえを見てると思い出す。そっくりなんだよ。妖怪を消すくらい屁とも思っていねえっていう、そのツラがな」

「妖怪が人間の女を妻にすることが、そもそもの間違いだ」

「そうかい」

どうしてだろう。

太一は犬神にしがみついていた手に力をこめた。

胸がきゅっと痛んで、なんだか泣きたくなった。狢や、遠巻きにしている妖怪たちの姿を見ているのが、苦しかった。

異界は人間の世界よりもずっと不思議で美しく、人でないモノたちは人よりもずっと気安い。どうして、ものすごく勝手にそんなふうに思っていたのだろう。

――彼らは『違う』。異形は、人間とこんなにも距離を隔てたモノたちだ。

「クソッタレ野郎」狢は、喉の奥から唸った。「十遠見。二度とてめぇのツラは見たかねえ」

術者は肩をすくめた。

「だったら問題を起こさないことだな。こちらとしても、こういうことは迷惑だ」

「……おまえら人間は、全部が全部、どうしようもないクソッタレさ」

「ねえ、狢。そのへんにしてもらえない？　太一君の具合が悪いの。早く空栗荘に戻って、杉さんに診てもらわなきゃいけないんだけど」

古都子がきっぱりと割り込んだ。

狢は十遠見から彼女へ、それから太一へと視線を巡らせた。冷たい目をしたまま、口を閉ざすと背中を向けた。

ふと見ると、クロ爺はやはり黙りをきめこんでおり、ろくろっ首はうなじのほつれ毛をしきりにかきあげながら気まずそうに人間から視線を逸らしており。妖怪たちは肩を怒らせて歩き去る狢を見送って、いつまでもさわさわと囁き交わしていた。

4

犬神に背負われて空栗荘に戻ると、古都子から事情を聞いたお露さんがすぐに布団を敷いてくれた。

その時にはもう全身がだるくて、足はふらつくし気分は悪いし、それでもどうにか寝間着に着替えて横になっていると、じきに柊二郎が部屋に来た。

空栗荘の大家は、太一の額に手をかざしてぶつぶつとお呪いのような言葉を唱えてから、大丈夫ですよと優しく言った。

「それほど大量の毒気を吸ったわけではないようです。でも、二、三日は寝ていたほうがいいでしょう」

「春先には風邪で、今度は牛鬼の毒かね。よく寝込む子だよ」

水差しと白湯をお盆にのせて運んできたお露さんが、気難しい顔で言う。

「まあ、災難だったさ。軽くすんで、まだしもだ」

そのあと、柊二郎が持ってきた枯れ草みたいな味の丸薬を飲まされて、このままおとなしく寝るように言われた。

お呪いと薬が効いたのか、気分の悪いのは治まったが、夜になって熱が出た。

うとうとと寝ているのか起きているのか自分でもわからない状態で、太一は幾つも夢を見た。異界の町で迷って空栗荘への道を訊きたいのに、声をかけようとすると妖怪たちは皆、どこかへ隠れてしまう。牛鬼が子供のように泣いている。闇の奥から黒い手が「おいで」と彼を手招きし、そうかと思えば得体の知れない怖ろしいものが追いかけてくるから必死で逃げた。「母さんがおまえに会いたがっている」と啓介があらわれて言い、「ごめんね」と母親が彼を抱きしめた。その母親の顔が、サトリだったり他の化け物だったりしてよくわからない。何がそんなに怖いの、と誰かが訊く。

何が。——自分は一体、何が怖かったのだろう?

夜中に目をさますと、アカネが枕元に座って、太一の顔をのぞき込んでいた。

部屋の中は暗かったが、付喪の少女のまわりだけ燐が燃えるように空気が淡く光っていて、心配そうな顔をしているのがよくわかった。

「太一、大丈夫?」

小さな手が額に触れた。冷たくて気持ちいい。

「——安心しろ。私が守ってやる」

男のように太い声。それはアカネではなく、知っているべつの誰かの声だったが、太一は不思議には思わなかった。

うん、とうなずいて、また目を閉じる。そのまま朝まで、今度は夢を見ずにぐっすりと眠っ

た。

次の日には熱は下がったけれども、まだ起き上がることはできなかった。どうせもうすぐ春休みだ。それまでは授業もあってないようなものだから、終業式までの三日ほどは学校を休むことにした。

お露さんが作ってくれたお粥を食べたあと、ちょっとうつらうつらしていただけのつもりなのに、気がつくと夕方になっていた。

「――太一君、起きてますか？」

ドアが開いて、柊二郎が顔をのぞかせた。

「やあ、よかった。ミヨシ君と古都子さんがかわりばんこにお見舞いに来ていたの、知ってます？　あ、やっぱり知らなかったですか、そうですか。二人とも太一君はまだ寝てるって言うもので、起こしたらまずいかなと思っていたんですけど。――はい、この薬を飲んで」

柊二郎が差し出したのは、昨日とはべつの丸薬だ。口に入れると、とてつもなく苦い。うっと顔をしかめながら太一は、水差しの水と一緒にそれを喉に流し込んだ。

「これ、何の薬ですか？」

「毒消しです。今日のはそれに加えて、滋養強壮効果もあります」

柊二郎はすまして言う。

「気分はどうですか。痛いところとか苦しいところとか、あります？」
痛みはないが、身体がまだ重くてだるい。なんだか痺れた感じもする。
太一がそう言うと、柊二郎はうなずいた。のんびりした口調で、
「心配しなくても、それもじきによくなりますよ。もうあと何回かは毒消しの薬を飲む必要がありますけどね。なにしろ牛鬼の毒気は強烈なもので」
軽く吸い込んだだけでこれなら、確かに強烈な毒だ。思い切り吸っていたら、どうなっていたろう。考えたくない。
「大丈夫。きっと明日には、起きられますよ」
「はい」
太一はまた横になると、掛け布団を顎まで引っぱり上げた。柊二郎は布団の傍らに座ったまま、じっと太一を見ている。
自分が何か言うのを待っているのだと、太一は思った。
「大家さん、俺……」
「ええ」
「怖かった、です」
「牛鬼がですか？」
「……牛鬼も怖かったですけど……」

単純に襲われたことも怖かったが、もっと怖かったのは人間を食い殺そうとしていながら牛鬼には悪意がほとんど感じられなかったことだ。

そして、さらに怖ろしかったのは――。

「妖怪は、本当は人間を嫌っているんですか？」

「その言い方はいけませんよ、太一君」

静かな声が返った。

「え……」

「妖怪の一言で括っちゃいけません。皆、それぞれです。それぞれにいろんな個性があって、事情も抱えている。そういうところは人間と同じです。我々だって、たった一人の言動で『人間は』なんて括ることはできないでしょう？」

「それは、そうですけど」

柊二郎はしばらく考えて、ねえ太一君、と言った。

「たとえば、熊が人里に降りてきて人間を襲ったとします。人間はその熊が危険だというので、捕まえるか殺すかしますね。でもそれは、誰が悪いんでしょう。山に食べ物がなくなって、お腹を空かせて麓に餌を探しにきた熊でしょうか。その熊が二度と人間を襲わないように、射殺しなければならなかった人間でしょうか」

「――」

「誰が、何が悪いかなんて、正しい答はきっとありません。今回の牛鬼の件もそうです。人間とそうでないモノが共存するためにできることなんて、せいぜい別々の場所に住んで、お互いの領域に入り込まないことくらいでしょう。だから、境界は必要なんです。あちらとこちらを隔てるための」

あっちとこっちが交われば、妖怪にとっても人間にとっても悪いことのほうが多い——ミヨシがそう言っていたのを思い出した。

でもね、と大家は微笑(ほほえ)んだ。

「人間の道理は妖怪たちには通じないといっても、世の中のすべてが道理だけで動いているわけじゃないですから。彼らの感情は、やっぱり人間のそれにとても近いものなのだと、僕は思っています」

「そうなんですか？」

「彼らを理解したつもりでいれば、間違えます。でも、異形(いぎょう)が人間とは違う存在だとわかった時に初めて、共感できる部分もあるということに気づくんです。だって……」

だって彼らは、ずうっと人間の隣にいたモノたちですから。

柊二郎が部屋を出て行ったあと、太一は彼の言葉を、いつまでもぐるぐると考えつづけていた。

「ねえ、お露さん。今日の献立――」
食堂で夕食のトレイを受け取った古都子が、メニューを見て首を傾げた。
「なんだい。文句があるのかい？」
厨房からお露さんがむっつりと言い返す。
「ううん、そうじゃないけど。……組み合わせが何か不思議じゃない？」
今日の夕食は、ケチャップたっぷりのオムライスにコロッケ、肉じゃがときゅうりの酢の物だ。おまけにオムライスにはお子様ランチみたいに、爪楊枝で作ったお手製の国旗まで立っている。
「全部、十遠見の好物さ」
古都子はもう一度献立を一瞥して、「ああ、そういうこと」とうなずいた。
「――今日は、工房へは行かなかったんですか？」
席につくと、先に夕食を食べはじめていたレンが彼女に訊ねた。
「うん。何日か休むことにしたわ。やっぱりあいうことがあると、私もしばらくはあちらの住人たちと顔をあわせづらいし」
そうですか、とレンは顔を曇らせる。
「十遠見さん、落ち込んでますね」
「わかる？」

レンは酢の物をつついていた箸を置くと、自分の胸を軽く摑んだ。
「そばにいると、かなり痛くて。いつもは感情のフラットな人だから、よけいにキツイです」
「そう」
「あの人、本当は妖怪のことが好きなんでしょう?」
古都子はオムライスをスプーンに大盛りにして、口に運んだ。呑み込むのに、しばらくかかる。そうして、小さくため息をついた。
「うん。きっとね。ああいう力のある人って、子供の頃から妖かしは身近な存在だったはずだから。なまじ優秀で今の仕事をすることになったんでしょうけど、そうすると逆に、本人には辛いこともたくさんあると思う。ミヨシみたいにイヤなことはイヤだって言えるような、フリーな立場じゃないものね」
「ええ」
レンも吐息をつく。ふたたび箸を取り上げてから、天井を見上げた。
「あの。彼の具合はどうなんですか?」
「太一君? さっき柊さんに訊いたら、順調に快復しているって。明日にはもう起きられるだろうって言ってたわよ」
「そうですか。よかった」
「気になるなら、あとで部屋へ行ってみたら?」

「はい。でも」
レンは目を伏せた。
「どうかしたの」
「彼も、今はちょっと、いろんなことで混乱しているみたいで。不安だったり苛立っていたり、……悲しかったりで、近くにいくと胃のあたりをぎゅっと摑まれるみたいに、やっぱりすごく痛いんです」
古都子は、そう、と小さく呟いた。
それからオムライスに立っている旗を、指でつまみあげて首を捻った。
「ねえ、これ。どこの国旗かしら？」
「端っこに小さく国の名前が書いてありますよ。えっと、僕のは……トリニダード・トバゴ」
「カーボベルデ？　どこ、それ!?」
その国の皆様には申し訳ないが、お露さん力作の国旗は、日本人的にはかなりマニアックだった。
「おい、十遠見」
ちょうど食堂へ向かおうとしていたミヨシが、団欒室から出てきた十遠見を見つけて、しかめっ面で声をかけた。

「ケーキ、つくれや。クリームたっぷりのやつ」
「なんだ藪から棒に？」
十遠見はメガネに指を添えると、胡散臭げにミヨシを見た。
「急に食いとうなった」
「かまわないが、材料費と手間賃はもらうぞ」
「なんぼやねん」
十遠見はしかし、ふいと横を向いて「いや、いい」と言った。
「気色わる。払うて」
「なら一万円」
「げ、いきなり高っ」
十遠見は肩をすくめる。そのまま行き過ぎようとした。
「待てや。――おまえ、そんだけがめつかったら、貯金も相当あるんやろ？」
「たいしたことはない。公務員の安月給ではな」
「お露さんに聞いたで。おまえの夢はケーキ屋になることやて」
「それがどうかしたか」
「仕事やめるために、金を貯めとるんやろ。はよ、ケーキ屋になれや」
十遠見は黙り込むと、何とも言いがたい顔でミヨシを見つめた。

ややあって、
「よけいなお世話だ。それに、ひとつ訂正させてもらう」
「なんや」
メガネをきらりと光らせると、十遠見は心持ち胸をそらせた。
「ただのケーキ屋ではない。――私の夢は、可愛いケーキ屋さんになることだ」

5

その翌日には、柊二郎が言ったとおり太一の身体もずいぶん快復していた。起きて普通に食事ができるようになったし、だるさや痺れもほとんど感じなかった。
ところで太一の部屋の窓の外には、大きな桜の木がある。窓に向かって差し伸べられた枝は、今にも咲きだしそうな瑞々しいつぼみに覆われて、明るい春の陽射しをいっぱいに散らしたかのようだ。
昼ご飯を食べたあと、太一が寝間着のまま部屋で雑誌を読んでいると、その桜の枝が窓を叩いた。
とん、とん。
最初は何の音かわからなかった。

とん。

ガラスが鳴って、それで枝が揺れていることに気づく。太一は雑誌を置いて窓に近づくと、それを大きく開いた。

よく晴れた、暖かな日だ。風もないのに、窓から顔を突きだした太一の鼻先をくすぐるように、枝がふわふわと動く。

(何だろう?)

確かこの桜には、引っ越して来たその日に苦情を言われたおぼえがある。レンが通訳してくれたが、ガラスに枝がぶつかるのが煩わしいので窓を開けておけとかなんとか、そういう話だった。

「じゃ、窓はこのままにしておくから」

今日はあったかいからいいか、と思いながら頭を引っ込めようとすると、枝にぱちんとはたかれた。

「え、もしかしてガラスのことじゃないの?」

何のクレームだろう、と首を捻っていると、今度はかすかに声が届いた。

(にーさん)

(ちょっと出て来ておくれな)

虫の羽音くらいに小さな声だが、聞き覚えがある。もちろん桜が声を発したわけではない。

（にーさん、にーさん）

太一は急いで服を着替えると、部屋を出た。

果たして玄関の外は、あちら側の世界だった。

見れば坂の半ばほどで、ろくろっ首がこちらに向かって手招きしていた。近づいていくと、上空からクロ爺が舞い降りてきて、彼の肩に乗った。

「ああ、よかったよ。樹霊に言伝てしたものの、にーさんが出てきてくれるかどうか心配でねえ」

ろくろっ首は、紅を塗った唇をきゅっとあげて、艶に笑った。

「どうしたんですか？」

「その前におまえさん、牛鬼の毒にやられておったが、具合はもういいのか？」

肩の上でクロ爺が訊く。

「ええ、まあ」

「ふむ。ならば、悪いが頼まれてほしいことがあるんじゃよ」

「俺に？」

実はねえ、とろくろっ首は自分の頬に手をやって、首を軽く傾けた。色っぽい仕草だが、そのまま首が伸びるか落ちるかしそうなので、やめてほしい。

「狢のことなんだ」

何だろう。狢がどうかしたのだろうか。

最後に見たあの妖怪の、冷たい目が脳裏に浮かんだ。

「あいつは出て行くって言うんだよ。この町からさ」

「え……!?」

太一は驚く。

「狢はあれで融通のきかんところがあっての。皆して止めたが、聞きゃせんのだ。しかし今さら、長い間住み慣れた土地を離れていいことはあるまい。顔見知りがいなくなるのは、わしらとしても寂しいことじゃしのう」

「それってやっぱり、牛鬼のことがあったからですか?」

「まあ、そうだろうけどさ」ろくろっ首は、かたちのいい眉を寄せた。「でも、あればかりが原因てわけでもないんじゃないかねぇ。このところずっと、珍しくふさぎこんでいたから」

「――」

「やさぐれて町を出て行って、あげくに人間と関わっていざこざでも起こしたら、目もあてられん。何しろヤツは昔、人間に憎まれたことがあるからの。その点が一番心配なんじゃ」

カラスは黒い頭を振る。

(憎まれた……?)

それは。

（もしかして、狢が十遠見さんに言ってたことと関係あるのかな。……嬶って、えっと奥さん？と、子供が……って）

「それでおまえさんに頼み事というのはな、町を出るのを思いとどまるように、狢を説得してくれんか。おまえさんの言うことなら、あいつも聞くかもしれん」

え、と太一は目を丸くした。

「俺が？　どうして？」

なぜ自分なのだろう、と思う。妖怪が説得してもダメなものを、太一が何か言ったところで狢が耳を貸すわけがない。

「だったら大家さんのほうがいいんじゃないですか？　それとか、空栗荘の他の人たちでも。だって俺、こっちの世界のことも狢さんのことも、そんなに知らないし」

「他の者では無理じゃろう。たとえ柊二郎であってもな。どんなにわしらを知っておっても、人間だもの」

「俺も人間ですけど」

「いや、それはもちろん、そうなんじゃが」

クロ爺は困ったように嘴を振り、太一はますますわけがわからなかった。

ろくろっ首が、これ見よがしにため息をついた。

「あのね、にーさん。狢は、あんたのことは好きなんだよ。いつも何かと世話を焼きたがっていただろう？　にーさんのことを気にかけていたんだ」

「はあ」

思い返せば確かに、狢には何度も助けてもらったり面倒をみてもらったりした。きっぷがよくて朗らかで、親切な妖怪だと思っていた。……だからよけい、最後に見た狢の言動が胸に刺さった。

「でもどうして、俺のこと……」

「おまえさんが初緒の孫だからじゃよ」

クロ爺は翼を打つと、太一からろくろっ首の肩へ飛び移った。やれやれ、というように首をすくめた。

「狢は初緒に惚れておった。口には出さなんだが、大方そういうことだったんじゃろう。だから孫のおまえさんのことも、放っておくことができんのだ」

「惚れっぽいんだよ、あのトンチキは。それもたいてい、人間の女に惚れちまう。そういう性だから仕方がないんだろうけどね」

太一は言葉を失って、目の前の妖怪たちを見つめた。

「だからにーさんが何か言ってくれりゃ、あいつも考え直すかもしれない。——ねえ、頼むよ。アタシらと一緒に狢のところへ行っておくれな」

「今から？」
「そうだよ」
どうしよう、と太一は思った。
説得なんて自分には無理だ。きっと拒絶される。……もうすでに、狢は人間に対する敵意を隠そうともしていなかったじゃないか。
それに。
妖怪の町へ、彼一人で？　十遠見やミヨシみたいに術が使えるわけじゃないし、古都子みたいに犬神が守ってくれるわけでもない。
妖怪と一括りにしてはいけないと柊二郎は言ったけど、だったら牛鬼みたいな妖怪は他にもいるかもしれない。思い返せば今までも、行き逢い神と遭遇したりヒダルガミに取り憑かれたり、影走りに悪さを仕掛けられたり。危険な目にいっぱい遭っていたのに、どうして平気でいられたんだろう。
（俺、一人でなんて）
足がすくむ。
太一は空栗荘を振り返った。今、あそこに帰ることだってもちろんできる。でも。
（どうすればいいんだろう）
混乱しながらまた視線を戻すと、妖怪たちは太一を見つめていた。

「にーさん、アタシらが怖いかい？」
ろくろっ首が寂しげに微笑んだ。
「それはそうだね。牛鬼に食われちまうところだったんだから。考えてみたら、怖くて当たり前だ。人間は妖怪を怖がるものなんだから。……ただ、にーさんがあんまり普通の顔をして、アタシらと会ったりしゃべったりしていたもんだからさ。ついね、こんな頼み事までしちまって」
申し訳なかったね、と言った。
「うむ。無理強いはできんな」
クロ爺も萎れたように翼を垂らしてうなずく。
「そもそも狢に対する義理など、おまえさんにはないのじゃから」
太一は唇を噛んだ。
「……妖怪は」
「何だい、にーさん」
「妖怪は、人間が怖くはないんですか？　それに、こないだみたいに牛鬼が消されたのを見て、人間に対して腹が立ったりするんじゃないですか？」
ろくろっ首とクロ爺は顔を見合わせた。
「そうだね。怖くないと言ったら嘘になる。でもアタシらは、人間とはずっとこういう関係で

やってきたんだ。確かに、人間とつきあうには覚悟がいる。でも、いったんこうと覚悟を決めちまえば、たいしたことじゃないさ。――アタシらはにーさんとは違うモノだ。だけどさ、違うってことがそんなに悪いことかねえ？」

太一は目を見開いた。

これまで彼が言われてきたのと、まったく同じことを、妖怪の側からろくろっ首は言った。言って、何でもないことのように笑った。

「俺……」

足はまだすくんでいる。だけど、ひとつ気がついた。

前に踏み出すよりも、後ろに退がることのほうがイヤだった。

――自分にはずっと、もうずっと長い間、妖怪たちよりも怖いものがあったのだ。

「狢さんのところへ、行きます」

妖怪の町へ向かって、太一は歩き出した。

「昔、狢がまだ人間の世界に住んでいた頃の話さ」

道すがら、ろくろっ首は太一に言った。

狢は人間の女を妻にした。女は自分の夫が妖怪であることを知っていたが、他の者は知らなかった。暮らしぶりは平穏で子供にも恵まれたが、ある時里に術者がやって来て、狢の正体を

暴いた。術者と里の者たちは、妖怪と契ったというので女を殺し、子供も殺した。狢だけが、命からがら逃げたのだという。

「御一新の前のことだったかねぇ」

「ごいっしん？」

「明治になる前じゃよ」と、クロ爺がろくろっ首の肩の上で言った。

人間よりずっと長生きの妖怪たちは、時間の観念も人間よりずっと悠長であるらしい。

「ともかくあいつはその時の恨みを、牛鬼を見て思い出してしまったんじゃろう」

妖怪たちが案内したのは、狢が釣り場にしているという川縁だった。

「おう、あそこじゃ」

クロ爺が嘴で示した先で、ちょうど狢が魚籠と釣り竿を手に、川から引き揚げようとしているところだった。

こちらに向かって歩き出して、太一たちの姿に気づいたようだ。足を止める。

「おやま、狢じゃないか。偶然だねぇ。たんと釣れたかい？」

かまわず自分から相手に近寄って、ろくろっ首は声をかけた。

「……偶然たぁ、笑わせら」

狢は剣呑に顔をしかめた。

「何をしにきやがった」

「散歩だよ。こちらのにーさんと一緒にね」
ふんと鼻を鳴らして、狢は横を向く。
「ここを出て行くなって話なら、たくさんだぜ。オイラはもう決めたんだからよ」
「狢よ。おまえさんはどうしてそう、意固地なんじゃ」
「は、よけいなこった。わざわざこの兄さんまで引っ張り出してきて、説教をたれようってのかい。――おい、兄さんよ」
狢はじろりと太一を一瞥した。相変わらず冷たい目だ。
「おめえも酔狂だな。こんなところまで、のこのこと。牛鬼に殺されかけて、ちったあ懲りたかと思ったが」
「えっと、あの、俺……」
太一はしどろもどろで言った。
言いたいことはあるはずなのに、どんなふうに言葉にしていいかわからなかった。頭の中が真っ白だ。
「……いなくならないでください」
「はぁ？」
「町から出て行くって、聞いたから」
「そんなこたぁ、兄さんの知ったこっちゃねえよ。オイラがどうしようとな」

「でも俺、狢さんのことが好きですから」
狢は鋭く目を細めた。「けっ」と呟くと、釣り竿と魚籠を、投げ捨てるように地面に置いた。
次の瞬間、太一は胸ぐらを摑まれた。目の前に狢の顔がある。
「まだわからねぇのか」
ぞっとするような声で言うと、狢はばらりと人間の輪郭を崩した。
たちまち、鼻先の尖った毛だらけの獣の顔があらわれる。狢は口を真っ赤に裂いて、ニイィと笑った。鋭い歯がぞろりと光っている。
おい狢、とクロ爺が声をあげ、なにするんだよとろくろっ首が咎めた。
「うるせえ。——兄さんよ、オイラだって牛鬼とたいして違いはねえんだぜ。人間を餌にしてねえってだけでな。その気になりゃ、おめえの喉笛を食いちぎるくらい、造作もねえ。いつ何時、兄さんをばっくりいっちまうかわからねえぜ?」
太一は思わずぎゅっと目をつぶった。怖ろしくて、足が震えた。
ふいに突き放されて、よろけた。目を開けると、狢はもとの人間の顔に戻って、彼を睨んでいた。
「もう聞いているんだろ、オイラがなんで人間を恨んでいるのか」
太一はうなずいた。
「消えっちまえ」

吐き捨てて、狢は踵を返す。――が、歩きだそうとして動きが止まった。
狢は怪訝に振り返ると、太一を見た。
「おい。……何してやがる」
太一はとっさに手を伸ばし、妖怪の格子柄の袖を摑んでいた。
なぜそんなことをしたのか、太一自身もよくわからない。しかし気がつくと、袖を摑む指に、ぎゅうっと力をこめていた。
「放せよ」
「あの、俺」声が震えた。「お礼、まだ言ってなくて」
「はぁ？」
「牛鬼に襲われた時、蝶が飛んできて……金色の蝶で、それで俺、助かって……あれ、狢さんの蝶ですよね？」
狢は一瞬押し黙ってから、「知るかよ」と呟いた。
「他にもいろいろ親切にしてもらって、……でも俺、ちゃんとありがとうって、言ってなかったから」
「――」
「ありがとうございます」
狢は太一から目を逸らすと、「クソ」と小声で言った。

「いいから、放せって」
「すみません」
それでも太一は、袖を放さなかった。
そうやって摑んでいるものを、さすがに振り払うことはできず、狢は困惑の色を浮かべる。
「おい、兄さん」
手を放したら壊れる、と太一は思った。
何だって、壊れるのだ。誰かとの絆とか、関係だとか。そんなものはある日突然、簡単に狂って壊れて、失くしてしまえばもう戻らない。
確かなものなんて、何ひとつない。
どうせ失うのなら最初から、他者との関わりなんてなくていい。誰も何も自分には関係ないし、どうでもいい。誰かの気持ちなんてわからなくていい。わかりたくない。
——そう、思っていた。ずっと。
母親との絆すらあんなに呆気なく消えてしまうのなら、他の人間との関係なんてもっと脆いに違いない。だから、いつも心のどこかで信じてなんかいなかった。誰かが、自分のことを想ってくれるなどとは。
やっとわかった。
彼の中の傷は、誰の想いももう、信じられなくなっていたことだ。



本当は、何かを手に入れることが怖かった。それが壊れて、失ってしまうことが怖かった。——誰かに「おまえなどもういらない」と言われてしまうことが、太一は一番怖ろしかったのだ。

「俺……今度のことで、妖怪は怖いって確かに、思ったけど……でも、本当は妖怪より怖いものがあって……そのこと、今まで全然わかってなくて……気がつかなくて」

目の前の狢の顔がぼやけて、こぼれた。

おい、と狢はうろたえた声をあげた。

「何を泣いてやがんでぇ」

「自分で何もしないで、仕方がないとかどうしようもないとか……そんなの、もう、イヤだ」

「——」

妖怪たちは黙り込んだ。

勇気を出して手を伸ばせば、届くものも伝わるものもあるのだと、空栗荘へ来てから知った。振り払われても何度でも、手を伸ばせばいいのだと。

失っても、やりなおしができなくても、先に進むことはできるのだと、教わった。

——何もかも、壊れるばかりじゃ、ありませんよ。

彼の心を読んで、サトリが言った言葉だ。

「大家さんが言ってました……人間と妖怪は違うものだけど、でもやっぱり近いものなんだっ

て。……人間と妖怪は、ずっと一緒にいたから。俺、その違うってところから、ちゃんとわかんなきゃ、いけない、けど……」

違うということも、近い存在なのだということも。それは多分、頭で考えてもわからないことだ。

感覚とか感情とか——そういう、心の部分でなければ。

だから、理解することは太一にはとても難しい。今まで他の人間の感情ですらわかろうとしてこなかった、彼には。

だけど。

空栗荘に来てからいろいろな事があって、出会った妖かしたちのさまざまな想いに触れた。伝わってきたことだって、確かにあった。

与えてもらったものも、たくさんあったのだ。人間にも、妖怪にも。

——なのに何ひとつ、自分は返していなかった。いつも当然の顔をして、与えてもらうばかりで。

想われたいのなら、想うことだ。相手を大切に想うことだ。

もう十分、彼のことを想ってくれていた人たちに、自分も同じだけのものを返したいと太一は思った。栄奈に、手袋をもらって嬉しかった気持ちを、同じように返したいと思った時のように。

初めて、本当に初めて、そう思った。

——わかりたい。

どうでもいいと投げ出すことは、もうしたくない。今はダメでも、明日ダメでも、何度も間違えてもいいから。

「兄さん、頼む。放してくれ」

狢の声はもう懇願に近い。冷たい表情は消えて、今はただ困ったように太一を見ている。

「俺、さっき、狢さんのことを怖いと思いました。狢さんが人間を恨んでいることだって、わかりました。……でも、じ、事情はいっぱいあるけど……狢さんの都合だって、あるけど……俺は、狢さんのことが好きだって、それは、きちんと伝えないといけないから……」

「って、よけいに引っぱるな。痛てぇって」

「……ぶっ」

その時、唐突にろくろっ首が噴き出した。あははは、と口元に指の背を当てて笑い出す。

「ああ、おかしい。どうするのさ、狢。袖に取りすがられて涙ながらに『好きだ、行かないでくれ』って、あんたその相手をそれこそ袖にしちゃ、男が廃るってもんじゃないか、ええ？」

「うるせえ、オカチメンコ」

「羨ましいねえ、アタシも一度でいいから、惚れた男にそんなふうに言われてみたいもんだ」

こいつは惚れた腫れたの話じゃねえと、狢は渋い顔をした。

「なあ、狢よ。太一はおまえさんが妖怪でも、人間を恨んでいても、おまえさんのことが好きなんじゃと」

クロ爺が真面目くさって言う。

「ああぁ、クソ！」

狢は空を仰いで、唸った。

「わかったよ、行かねえよ。どこにも行かねえから、後生だから放してくんな。気がついてねえみたいだから言うけどよ、兄さんがさっきっから摑んでる袖はオイラの毛だ。着物に見えているのは、オイラの毛皮なんだよ。兄さんがぐいぐい引っぱるもんだから、もう痛いのなんのって」

太一はきょとんとして、自分が握っている袖と狢の顔を見比べた。そうしてようやく、

「あ……？」

パッと手を放した。

ろくろっ首はまだ笑っているし、クロ爺もクックックと翼で顔を隠して妙な声を漏らしているものだから、太一は思わず赤くなった。

「ごめんなさい。俺、知らなくて」

「まったくよ。兄さんは何でも知らなすぎだぜ」

ぶつくさ言って、狢はため息をつく。

そうして思い出したように、道ばたに放り出してあった釣り竿と魚籠を拾い上げた。ちょっと考えてから戻ってきて、魚籠を太一に差し出した。

「持ってきな」

「え？」

戸惑いながら受け取って中を見ると、ウナギが三匹、入っていた。

「たっぷりってわけにゃいかねぇが、ひつまぶしにでもすりゃ、空栗荘の連中で食えるだろ」

「いいんですか？　もらっても」

「おうよ」

狢はいったん口を閉じる。言葉を探すように黙ってから、真顔で太一を見下ろした。

「なあ、兄さん。正直なとこ、オイラにゃ未だにわからねえんだ。――自分が、人間を好きなのか嫌いなのか」

「――」

「恨んじゃいるさ。だが、オイラの家族を殺したのが人間なら、惚れた女も人間だった。だから今でもどっちつかずだ。川面の浮きみたいにふらふら、ふらふらと。そんでたまに恨みを思い出しちゃ、自分でもどうしていいかわからなくなる。いっそ、人間と関わらなきゃ楽なんだろうが。……どうも、そうもいかねぇようだしなあ」

「……はい」

「十遠見が悪いわけじゃねえのは、わかってんだ。けど、それもやっぱりうまくいかねぇ。どうしてもあいつに、八つ当たりをしちまう」
「はい」
「ま、いろいろと勘弁な」
釣り竿でぽんと自分の肩を打つと、狢は今度こそ背中を向けた。
あの、と太一は慌てて言った。
「魚籠はどうすればいいんですか？」
「返しに来りゃいいだろ。いつぞやの蝶の時みたいに、オイラに会いに来ればいい。いつでもかまわねえからよ」
後ろ向きに手だけ振って、狢は遠ざかっていく。その姿を見送って、
「素直じゃないのぅ」
クロ爺が呟くと、ろくろっ首はまた笑みをこぼした。
「照れているんだよ、あれは」

「――いくら元気になったからって、まだ毒が完全に消えたわけじゃないんだよ。起きてもかまわないとは言ったが、勝手に一人で出かけていいとは一言も言っていなかったはずだけどね。具合がまた悪くなったら、どうする気なんだい!?」

空栗荘に戻ってきたとたん、太一は玄関の前で仁王立ちになっていたお露さんにとっつかまって、小言をくらった。

すみませんと首をすくめながら、でもどうしてお露さんはこちら側で待っていたんだろうと、太一は不思議に思う。

（もしかして、妖怪の町に行ったことがとっくにバレてたとか……？）

彼を送ってきたクロ爺とろくろっ首が、「まあまあ」と取りなしにかかったが、こちらも容赦のない小言の返り討ちにあった。

「だいたい、あんたらがいけないよ。こっそりこの子を連れ出すなんざ、長い間生きてるくせに、分別ってもんが少しも身についていないのかい」

妖怪たちは苦笑して、身を縮めた。

「おお、こわ」

「やれやれ、矛先がこっちに向いたわい。藪蛇にならんうちに、退散じゃ。――ではまたな、太一」

彼らが逃げるように引き揚げていったあと、太一は「狢さんからです」と言って、魚籠をお露さんに手渡した。

「ふん。ウナギだね。……狢からだって？」

「はい。――ご心配をおかけして、すみませんでした」

まったくだよ、と厳しい顔でお露さんは言ってから、
「それで、大家はどこだい？」
「え？」
「あんたを探しに、妖怪の町へ出て行ったんだけどね。会わなかったのかい」
「はあ」
あのグータラ、一体どこをうろついているんだかと、お露さんは町の方角に目をやって肩をすくめた。

グータラこと空栗荘の大家が戻ってきたのは、それから一時間ばかり経ってからのことである。
「どこへ行っていたんだい。太一はとっくに戻ってるよ」
「そうですかー」
夕食にはまだ早いので、食堂には誰もいない。
柊二郎はテーブルの前に「よいしょ」と腰を下ろすと、へらへらと言い訳した。
「あちらには知り合いが多いもので。ついつい、引き留められて世間話などを」
「何しに行ったんだかね、この役立たずは」
お露さんはお茶を淹れると、柊二郎の前に置いた。

「夕飯はひつまぶしだよ」
「知ってます。――狢に会いましたから」
「ふん」
「町長のところへ、転出届けを取り下げに行く途中だとか言ってましたねえ」
「引っ越しでもするつもりだったのかね、あいつは」
「そんなところです」
柊二郎は美味しそうに茶を飲みながら、窓に目をやった。
もう春分だ。いつの間にか陽がのびて、食堂に射し込む明るい光がゆっくりと移ろってゆく。
「啓介から電話があったよ」
自分も茶を一口飲んで、お露さんが言った。
「ああ、太一君のことを心配しているんでしょう。一昨日も彼から電話をもらいましたから」
「太一が牛鬼の毒にあたったことは、啓介には言っていないんだろう?」
「言ってませんよ。たいした症状でもないのに、わざわざ心配させることもありませんし。――彼は彼で、前の奥さんのことでちょっと問題がありましてね。それで、太一君のことが気がかりみたいで」
そうかい、とお露さんは呟いた。
「もうじきかもしれませんね」

日だまりの静寂に、柊二郎はぽつりと言葉を落とした。
「何がだい？」
「いや、桜が咲くなあと思って」
「ごまかすんじゃないよ」
柊二郎はお露さんを見ると、微笑んだ。晴れやかな、でも少しだけ寂しげな色の混じった笑顔だ。
「もしかしたら、もうじき……太一君は、ここを出て行くのかもしれないと思ったんです」
「いい意味でかい？」
「ええ」
お露さんはうなずく。
手にしていた湯呑みに目をやって、それならいいさ、と言った。

6

明日から春休みに入る。
終業式が終わったあと、校門のところでぽつぽつと咲き始めた桜の樹を見上げていると、
「よっ」と声をかけられた。

高坂だ。

「じゃ、四月にな」

片手をあげて挨拶すると、通り過ぎて行った。

それからほどなく、栄奈が校舎から出てきた。目ざとく太一の姿を見つけて、子犬みたいにぱたぱたと駆け寄ってくる。取り残された女子たちが、「またね」と手を振った。ついでに太一にも「バイバイ、阿川君」「またクッキー、よろしく」と声を送ってきた。

「今日、もし時間があったら空栗荘へ来ない？」

駅に向かって歩き出してから、太一は栄奈に言った。

「え？　うん、行く！　でも、どして？」

「今日、十遠見さんがケーキを焼くって言ってた。ミヨシさんのリクエストで。それでミヨシさんが、和泉も誘ってこいっていうから」

ミヨシなりの栄奈に対する気遣いであるようだ。

「あ、それじゃ一度家に帰って荷物置いて、服を着替えてから行っていい？　すぐに行くから」

「うん」

（やたっ）

栄奈は心の中で拳を握った。

（すごい嬉しいかもっ。それにケーキも、今日までならぎりぎりオッケーだし）

実をいえば彼女は、春休みいっぱいは大好きな甘いものを絶対に食べないと決めていた。そうやって自分の好きなものを断てば願い事が叶うという――『願掛け』があると祖母から教えてもらったからだ。

その願い事の内容はというと。

（神様、どうか二年のクラス替えの時に、阿川君と同じクラスになれますように！）

歩きながら栄奈は両手の指をぎゅっと組み合わせて――それは神様が違うだろうというツッコミはさておき――、ついでにぎゅっと目もつぶって祈った。

で、当然のことながら、つまずいてバッタリと転んだ。

「い、痛い」

「だからさ、和泉はどうしていつもコケてるの？」

「ううう」

首を傾げながら、太一は彼女に手を差し出した。ただ何気なく、引っぱり起こしてやろうと思っただけなのだが。

栄奈は目を丸くしてその手を見つめ、それから大慌てで両手を制服にこすりつけた。そんなにしなくても、と思うくらい一生懸命に拭って、太一の手を取った。

「あ、ありがとう」

「……うん」

あれ、と太一は思った。

采奈の指が手に触れたとたん、いきなり心臓がドキリとした。

何だろう。どうしてだろう。采奈の手が離れたあとも、そのまま鼓動がおさまらない。

（あ、あれ？　あれえ？）

制服についた埃をぱたぱたと払ってから太一を見上げて、采奈は不思議そうな顔をした。

「どうしたの？　阿川君、顔が真っ赤だよ」

「え!?」

あ、と采奈は声をあげた。

「もしかして熱？　熱がでた？　阿川君、昨日まで風邪で休んでたもんね。もしかして、ぶり返しちゃった!?」

学校を休んだ理由がまさか妖怪の毒で寝込んだせいとは言えないから、無難に風邪ということにしておいたのだが。それはともかく。

「大丈夫？」

采奈は掌を、ぺたんと太一のおでこにくっつけた。もう一方の手は自分の額にあてる。

「あれ、でも、おでこはそんなに熱くない、かな？」

「――」

太一は硬直した。
いつもみたいに、他人に触れられてぞっとしたのではない。むしろそうならなかったのが、おかしい。こんな時は不快感で悲鳴をあげたり、反射的に飛び上がったりするのに。
そのかわりに、一瞬、息がつまった。
「和泉、あの……、みんなが見てる」
「え？　あっ」
通り過ぎてゆく通行人や他の生徒たちの視線に気づいて、采奈は慌てて太一から離れた。
「ご、ごめん」
「……いいけど」
熱なんかじゃない。
太一は歩き出した。
「あれ、阿川君？」
采奈の声を背中に聞きながら、どんどん足を速めた。
足もとがふわふわする。ふわふわ、ふわふわ。まるで地面がないみたいだ。
「わっ」
「……阿川君。なんでそんな何もないところで、転んでるの？」
一生懸命に後ろからついてきていた采奈が、路上で転倒した太一を見て、きょとんとした。

「和泉に言われたくないよ」
顔をしかめて起き上がって、ああそうか、と太一は思った。
（そうだったんだ……）
誰かと一緒にいて、足もとがふわふわすることってあるんだ。どうして栄奈がいつも転んでばかりいるのか不思議だったけど、こんなふうに心臓がドキドキしていると、足が全然ちゃんと動かなくなるんだ。
地面に座り込んだまま呆然としている太一を、栄奈が身を屈めて心配そうにのぞき込んだ。
「阿川君、なんかヘンだよ。どしたの？」
「うわっ⁉」
栄奈の顔がすぐそばまで近づいてきたので、太一は弾かれたように立ち上がった。
ごつんっ。
「きゃん！」
「いてっ」
なんでそういうことになるのやら、はずみで頭と頭がぶつかって、二人して「いたた」とうずくまる羽目になった。
「きゅ、急に立つんだもん」
「ご、ごめん」

額をおさえて涙目になっている栄奈に急いで謝って、――その時だった。
ふつっ、と太一の中で、何かが小さく音をたてた。
胃のあたりから胸へ、喉もとまでこみあげてきたものが、とてもくすぐったくて。
「ふ……」
自然に、笑い声になった。
「はは、あはははは……」
栄奈は目を大きく見開いた。
太一も驚いて、彼女を見た。
二人して、地面にしゃがみ込んだまま、顔を見合わせてしまった。
「あ、阿川君、今……笑った？」
「え」
「笑った？　笑ったよねえ。うそ、阿川君が笑った！」
栄奈は歓声のような声をあげる。
「もっぺん！　ね、もっぺん見たい！　笑って！」
もう一度と言われましても。
でも、栄奈の顔を見ているとまた、くすぐったくてたまらなくなった。
「ふ、ははは……、和泉の顔ったら」

「え、顔？　ヘン？」

「ヘンじゃないけど……」

くるくる、くるくると、采奈の表情はなんてよく変わるんだろう。大きな目が動いて、唇を尖らせたり、笑ったり、泣いたり、真っ赤になったり。素直で、わかりやすくて。まるで、子供みたいだ。

――今までだって彼女は、ずっとそうだったのに。

ずっと、彼にありったけの想いをくれていたのに。

何も気づいていなかった。気づいていないふりで、逃げていた。――怖かったから。

想いを受け取って、でもそれが壊れてしまうことが、とても怖かったから。

太一の心を覆っていた不透明な薄い殻がゆっくりと剝がれて、世界が急に鮮明になっていく。

これまで受け取ることを拒んでいた想いが、胸に沁みていった。

大丈夫。もう、怖くない。

采奈と並んで歩きながら、太一は考える。

彼女がそばにいてくれることが、嬉しかった。采奈を見ると、いつも胸の中がふわっと、軽く暖かくなった。

自分の「好き」はどんなだろうと、思ったことがある。



（なんだ）

ああ、なんだと、太一は思った。

もうだいぶ前から、彼はその答えを知っていたのだ。

7

窓の外の桜がいっせいに開花して、薄紅の雲のようになった。

春休みのある日、風呂からあがって部屋に戻ろうとした太一は、例によって隣のタカハシさんの部屋から出てきた幽霊と遭遇した。

今日は軍人だ。

カーキ色の軍服を着たその男性は、太一に向かって敬礼すると、ブーツをコツコツ鳴らしながら階段のところまで行って、姿を消した。

前回の落ち武者に比べれば、ずいぶん最近の幽霊である。

「あのう、タカハシさん。あの人も昔、お詣りに来ていたんですか？」

そうだよと、ドアの内側から声がした。

「武運長久を祈願していた」

くどいようだがタカハシさんは、地域の安全担当である。武運の神様ではないのに、武者か

ら軍人さんまで、何百年にもわたって誤解されっぱなしだったようだ。
「じゃあ、失礼します」
「うん」
だが、自分の部屋に入ろうとして、太一は立ち止まった。しばらく迷ってから、
「あの……地域の安全とは関係ないけど、俺もお願いしていいですか？」
「どんなことかな」
「『仕方がない』って言葉は使いたくないですけど、でも、先へ進むためには乗り越えなきゃ仕方がないことって、ありますよね。――乗り越えるのに俺、強くなりたいです。そのための力を、少しだけもらえませんか」
タカハシさんは、しばらく沈黙していた。
（神様にお願いするんだから、手を合わせたほうがいいのかな？）
ぽんぽんて手を打つんだっけ。確か、神社ではそうだったと思うけど……と、太一が考えていると、隣室の主の声が廊下に響いた。
「もしそれが人間関係においてのことならば、言ってあげられることはある。ただし、力にするかどうかは君次第だ」
タカハシさんは、太一が何を願っているのか承知しているみたいだった。
「はい」

「人は、自分の言い訳のためではなく、何かを投げ出すためでもなく、他人のために『仕方がない』と言うことができる」

「――」

「仕方がなかったのだと、相手を許すためにそう思うことだって、できるんだよ」

太一は目を瞬かせて、174のプレートのかかったドアを見た。

「難しかっただろうか」

はい、と太一は素直にうなずいた。

「でも、意味がわかるまで、頑張って考えます」

「そうか。――おやすみ」

「おやすみなさい、タカハシさん」

太一は隣室のドアに向かって、頭を下げた。

花見をすると言い出したのは、鈴子さんだったらしい。

啓介に呼び出されてその日、太一は実家の近くの公園へ行った。

桜の時期には、近所ではちょっとした花見の名所として賑わう公園である。けっこう広くて、子供が遊ぶ遊具のスペースの他に、芝生の広場や小さな池もある。遊歩道に連なる桜の樹の下では、何組もの家族やグループが地面にシートを敷いて、弁当を広げたりバーベキューを楽し

んだりしていた。
「ここだ、太一」
　啓介と鈴子さんのいる場所はすぐにわかった。というか、とても目立っていた。鈴子さんがビニールシートの上にひっくり返って、爆睡していたからである。しかも風邪をひかないようにとの配慮からか、余分に持ってきていたらしい新聞紙に芋虫みたいにくるまっていた。
「どうしたの？」
　太一が訊ねると、啓介は「これ」とまだ蓋も開けていない弁当を指さした。なんと重箱の三段重ねだ。
「この弁当を作るのに、徹夜したんだ。ここへ着いてビールを一口飲んだとたんに、電池が切れた」
「徹夜って……、そんなに無理しなくたってよかったんじゃ？」
　一生懸命にもほどがある。
「俺もそう言ったんだが、何しろ本人が張り切っていて、まったく聞いていないんだ。こういう弁当を持って花見に行くのに憧れていたらしい」
　啓介は「もう慣れた」という顔で、自分も缶ビールを口に運んだ。
「こんなところで寝てて、大丈夫なの？」
「もう少ししたら、起こすさ」

とりあえず父と息子は、先にありがたく花見弁当をいただくことにした。
蓋を取ると、重箱にはいろんな料理がぎっしりと詰まっていた。卵焼きに焼き魚、野菜の煮物、かまぼこにウインナー、いなり寿司と巻き寿司、などなど。
「……なんか、微妙におせち料理っぽい？」
「野菜と魚がメインだと、どうしてもな」
でも太一のために、頑張って肉を使った料理も作ってくれていた。おからハンバーグもある。
「鶏の唐揚げ……」
食べてみたら、やっぱり油でべっとりで、肉がぱさぱさだ。
（全然、上達してないや）
太一はそんなことを思って、ちょっと笑ってしまった。
啓介が一瞬、不思議そうな顔をして彼を見たが、何も言わなかった。
「父さん、俺——ばあちゃんに会ったよ」
箸を置いてビールをまた一口飲んでから、啓介は「そうか」と言った。
「久しぶりだな」
「知っていたの？」
「おまえが小さい頃、時々来ていた。俺には見ることはできなかったが、なんとなくわかっていた。ああ、いるな、とね。あの人はあれで案外うっかり者だったから、自分ではこっそりと



来ているつもりだったんだろう。だから気づかないふりをしたんだ」
「そうだったんだ……」
「何か言っていたか？」
「けっこうマヌケに育ったなって、笑っていたよ」
いかにも言いそうだと、啓介は微笑した。
「ばあちゃんて、どんな人だったの？」
「そうだな。……あまり他人と交わることが上手な人ではなかった。仕事で妖かしと関わることが多かったせいだろう。苦手というより、人間と馴染むのが面倒だったのかもしれない。それ以外は……どんなと言われても、俺も実はよくわからんのだ。あの人は、家にいることのほうが少なかったから」
啓介は少し考えて、言葉を継いだ。
「俺にはあの人みたいな力はなかったから、いつもあの人が何を見ているのかがわからなかった。それが寂しくもあったし、羨ましくもあった。時々あの人が話してくれる異界の光景は、とても奇妙で綺麗だったから」
うん、と太一はうなずいた。
あちら側の住人たちの世界は、とても美しくて不思議で、そして怖い。
「でも父さんは、俺に空栗荘を紹介した時は、妖怪なんているわけないって言ったよね？」

理由なんてとっくに知っているけど、太一はわざと言ってみた。
あれは、と啓介は困った顔をした。
「あの時にはまさか本当のことを言うわけには……しかし、柊二郎が『ぬらりひょん』だというのは、本当にただのあだ名だぞ。あいつは人間だからな」
「うん」
啓介が真剣に言うので、太一はクスクスとまた笑ってしまう。
「ばあちゃんのこと、好きだった？」
「ああ」
小さく風が立って、あたりは薄紅に霞んだ。
満開の桜は、一瞬の盛りを過ぎて、早くも散り始めていた。桜を春のかたみという。行く春、逝く春、花が散れば春という季節が尽きるという意味だ。
淡い色の花びらはちらちらと風に舞って、人々の頭に肩に、地に降り落ちる。
それを眺めながら、太一は「父さん」と言った。
「俺、母さんに会うよ」
啓介は驚いたように彼を見た。
「いいのか？」
「うん」

「大丈夫か？　その……」

大丈夫だよ。太一は答えた。

「俺は母さんのこと、何も知らないから。よく覚えてないし。……でも、知らないままでいちゃいけないと思うんだ」

最後に抱きしめられた。「許してね」と泣きながら言った母の言葉を、嘘だと思った。

本当は、どうだったのだろう。

――嘘では、なかったのかもしれない。あれは母の、本心の言葉であったかもしれない。

そう思うのは、ただの願いだろうか。

だとしても、かまわない。たとえ、あの時の母親の言葉がやはり嘘だったのだとしても。もう一度手を振り払われたとしても。もう、傷つかない。壊れてしまったものも、取り戻すことはできるのだと、わかったから。何よりも自分が、自分を「もういらない」とは思わないから。

「許して」という母の言葉。

嘘であろうと本当であろうと、きっと何か事情があった。母にとっては「仕方のない」ことだったのだ。そう思えるくらいには、自分はあの頃よりも大人になったはずだ。

だから、先へ進むためにはこれ以上、逃げてはいけないと思う。

母に会って、話をして、今まで目を逸らしてきたいろいろなことを、知らなければいけないと思う。

自分の中にある傷を、今度こそ終わらせるために。

鈴子さんがクシャミをして、目を覚ました。他愛ないおしゃべりを、いっぱいした。油っぽい唐揚げを、残さず食べた。ビールをこっそり飲んで、啓介に叱られた。何度も、笑った。

そして、最後に啓介は言った。

「太一。もしおまえさえよければ――」

そろそろ空栗荘を出て、家へ帰ってこないか、と。

8

桜はもうほとんど散っていた。

春休みが終わって、今日は始業式である。

「うわあ」

学校へ行こうとして、玄関の戸を開けたとたん、巨大な髭面の男の顔が出口をふさいで大笑いしていた。その向こうは、賽河原町の裏側だ。

(……なんか前にもあったな、これって)

太一はため息をつくと、いったん戸を閉ざした。ゆっくり三つ数えて、また開ける。今度は

ちゃんと、表側の風景になっていた。
どうやら妖怪にからかわれたらしい。
（学校へ行く時とか、急いでるからやめて欲しいんだけどなあ）
そんなことを考えながら、外へ出ようとして、太一は振り返った。
空栗荘の皆に聞こえるように、大きな声で言った。
「じゃあ、行ってきます！」

もうしばらく、せめて高校生の間は空栗荘にいさせて欲しいと、啓介に頼んだ。
――あったかい場所にお帰り。おまえのまわりにはいっぱいあるよ。
実家も学校も、初緒（はつお）の言う「いっぱい」の中のひとつなのだろう。
でも太一にとって、一番「あったかい場所」は、やっぱり空栗荘だ。
ひとつしかない居場所に逃げ込むことと、たくさんある中から一番好きな場所を選ぶことは、違う。
それが、「逃げ場にはしない」ということ。

人ではないモノたちが住む異界は、実家から徒歩八分、電車で四十分、バスで十五分のところにあった。

ちゃんと地図にも地名が載っている。
その名を、賽河原町という。

了

あとがき

こんにちは。霜島ケイです。

夏から始まった太一の物語も、今回の春の話でようやく完結となりました。

……と、胸を張って言いたいところなのですが。

すみません。三巻からまたも、間があいてしまいました。この巻まで読み続けてくださった皆様に、心から感謝するとともに、もっと早くに物語を書き上げられなかったことは本当に申し訳なく思っています。

正直に言います。四巻を書き始めたのは、去年の夏でした。原稿が終わったら冬になってました。だからどうして、一冊書き終えるのにいつも四ヶ月もかかってしまうんだ……。

でもとりあえず、春のうちに出せてよかった。ええもう、たとえゴールデンウィーク目前だとしても、この本が出る頃には桜はだいぶ散ってしまっているかも知れませんけれども、ギリギリ春ということで。

あとは、この話が皆様に少しでも楽しんでいただけるものであることを、祈るばかりです。

ところで先日、担当のMさんとこんな会話をば。

霜島「Mさん、あとがきのネタなんですけど……」
Mさん「私は何もしゃべりませんからね」
霜島「そんな謙虚でなくても。だってほら、一巻のあとがきから登場してもらってるわけですし」
Mさん「ぜーったいにしゃべりません！　……そんなことより、営業さんに『今度はどんな話？』と聞かれたので、『いろいろあって太一が笑う話』って言っときましたから」
って、一言かいっ。確かに、いろいろあって太一が笑う話には違いありませんけど（笑）。
自分でも、今回と一巻の表紙を見比べて、なんだかしみじみとしてしまいました。ぜひミギーさんの絵で太一の笑顔を見たかったので、これでやっと太一も人並みに（とまでは、まだいってないかもですが）成長したんだなあ、と。
栞奈も頑張ったかな。人によっては、子犬みたいにまとわりついてくるこのタイプの女の子って、ちょっと煩いかもしれない。でも太一にとっては、きっとかけがえのない存在になっていくんだろうと、後日談を想像して思っています。
空栗荘の面々と妖怪たちも、相変わらずだったり、思うところがあったりなかったり。
みんなそれぞれ、書いていて愛着があったし楽しかった。機会があればもう少し彼らの物語をつづけてみたかったのですが、どうでしょうね。大家と古都子の先行きに触れられなかったのが、残念と言えば残念。

今回の二章タイトル『菜の花いろの灯をともし』は、木下夕爾氏の『家々や菜の花いろの灯をともし』という句からの引用です。

この句を見るたびに、暖かな春の夕暮れと黄色い光を窓に灯す家々の風景が、目に浮かびます。「菜の花いろ」の一言だけで、なんだかとても幸せに感じられるその風景を、機会があれば自分でも書いてみたいと思っていたのですが。……まさか、妖怪ネタでやることになるとは思わなかった。いいのか、私。いや、いいけど。

妖怪ネタといえば、この原稿を書いている時に、友人が勧めてくれたのが『妖怪を見た人びと』という本。文字通り妖怪の目撃談ですが、なんと昔話ではなく現代のお話です。

たとえば、キャンプをしていた男性が夜中にトイレに行きたくなって友人と一緒にテントを出ると、向こうから作業着姿の男が歩いて来る。こんな時間に……というか、どうも様子が変だなと思いながらすれ違ったら、その男は顔のない「のっぺらぼう」だった。悲鳴をあげて友人ともどもテントに逃げ帰ったそうですが、「のっぺらぼう」は人間を驚かせるのが楽しいだけなので、べつに悪さはしてこなかったとか。

しかし、なんで作業着？　首にタオルを巻いて長靴までちゃんと履いていたらしいけど、もしかしてキャンプ場で仕事でもしていたのか、のっぺらぼう!?

他にも河童や天狗、ぬらりひょんや山姥などなど、けっこういろんな場所で目撃されています。もちろんその話を信じるか信じないかはそれぞれですけど、でもやっぱり、妖怪は今も人

間の世界に紛れ込んで生きているのかも知れない。——そう思うほうが、なんだかちょっと楽しい気がします。まあ実際にそういうものに遭遇したら、私だって悲鳴をあげて逃げるでしょうけども（笑）。

最後になりましたが。

イラストを描いてくださったミギーさん。毎回、素敵な絵をありがとうございました。惚れ込んだ絵で自分の物語を飾ってもらえるのだから、これほど幸せなことはありませんでした。

それから、担当Mさん。いつまで経っても終わらない原稿を辛抱強く待っていてくださって、ついでにネタも提供してくださって、いやいやそれよりこの話はMさんがいなければ多分、存在していませんでした（一巻あとがき参照）。くいだおれ太郎にはまだ未練がありますが、それはともかく、本当に感謝しています。

そして、この話を読んで太一を見守ってくださっていた皆様に、最大の感謝を。

また、お会いしましょう。

霜島ケイ

ファンレター、作品の感想を
お待ちしています

〈あて先〉

〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
ソフトバンク クリエイティブ（株）
GA文庫編集部 気付

「霜島ケイ先生」係
「ミギー先生」係

http://ga.sbcr.jp/

カラクリ荘の異人たち4
～春来るあやかし～

発　行　　2010年4月30日　初版第一刷発行
著　者　　霜島ケイ
発行人　　新田光敏

発行所　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
電話　03－5549－1201
03－5549－1167（編集）

装　丁　　株式会社ケイズ（大橋 勉／彦坂暢章）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
© Kei Shimojima 2010
ISBN978-4-7973-5894-0
Printed in Japan　　GA 文庫

第3回 GA文庫大賞

GA文庫では10代～20代のライトノベル読者に向けた
魅力あふれるエンターテインメント作品を募集します!



イラスト／赤りんご

大賞賞金100万円+受賞作品刊行

希望者全員に評価シート送付!

◆大賞◆

広義のエンターテインメント小説（ラブコメ、学園モノ、ファンタジー、アドベンチャー、SFなど）で、日本語で書かれた未発表のオリジナル作品を募集します。

※文章量は42文字×34行の書式で80枚以上130枚以下

応募の詳細は弊社Webサイト
GA Graphicホームページにて **http://ga.sbcr.jp/**

ISBN978-4-7973-5894-0

C0193 ¥630E

9784797358940

定価 本体630円 +税

1920193006308

ジーエー文庫
発行：ソフトバンク クリエイティブ

カラクリ荘の異人たち4
～春来るあやかし～

「幽霊を見たことがある？」

クラスの、それほど親しくもない男子に問われた太一は「ある」と答えた。

なにしろカラクリ荘に来てからというもの、幽霊どころか妖（あやかし）たちの絡む色々な事件に巻き込まれてきたのである――。もっとも、幽霊話はともかく、人との距離がうまく掴めない太一にとって、なぜ彼がそんな話をしてきたのか皆目見当がつかない。だが、理由を訊けぬままに別れた後も、自分で不思議に思うほど、その事が気にかかる――。以前の自分であればこんな事はなかったのに――なぜ!?

賽河原町に春風が吹き少年の心にも、小さな春が訪れる……。ハートフルご町内妖怪奇談第4巻!!